
遊戯王 5D's Magical A's

ネロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王5D's Magical A's

【Nコード】

N5589P

【作者名】

ネロ

【あらすじ】

『PT事件』から半年後、不動遊星は新たなる出会いと戦いに立ち向かうことになる。

この作品は『遊戯王5D's Magical』の第二期です。

第一期を読んでない方はまず先にそちらの方を読むことをお進めします。

プロローグ（前書き）

第二期です！

やっと始まった…

前作から読んでくださっている方、この作品を見て第一期から読もうと思ってくくださる方、これからもしろしくお願いします！

プロローグ

次元航行艦『アースラ』の艦長室にて、不動遊星は『アースラ』の艦長であるリンディ・ハラウンと話をしていた。

「海鳴に？」

「ええ。ここ最近、海鳴市で管理局員が何者かにリンカーコアを奪われるって事件が多発しているの。遊星さんにはそのことを調べに地上に降りて欲しいの。許可は取ってあるから。」

「だが、どうして俺が？俺はまだ裁判が終わっていない。クロノの方がいいと思うが」

「クロノは海鳴のことはほとんど知らないから。だからと言ってあなたと同じ条件のフェイトさんを一人で海鳴に向かわせる訳にも行かないし……」

リンディが遊星に笑いかける。リンディがこの笑顔を見せる時は遊星には拒否権が無いということを遊星は今までの経験から理解している。

「わかった。それで、俺は海鳴のどこに行けばいい？」

「そっちの方はエイミィに連絡するように言っているから、細かいことは彼女に聞いて」

「わかった。」

遊星はそう言って艦長室を後にした。

部屋を出た後に遊星の中に一つの疑問が浮かぶ。

「（リンディさんは許可をとったと言っていたが…そんなに簡単にとれるものなのか？）」

その１時間後、遊星は『アースラ』から海鳴市へと転送された。

半年前、色々なことが起きた海鳴に…

プロローグ（後書き）

どうでしょうか？

駄文だということは自分でも理解しております。

それでも読んでくれる方がいるので、頑張って書いていこうと思います！

第一話 新たなる出会いと新たなる戦い！（前書き）

書いてみて思った事は関西弁が難しいという事ぐらいかな。

相変わらずの駄文。

どうしたものか……

第一話 新たなる出会いと新たなる戦い！

海鳴に転送された遊星はエイミィが送ってきた指示通り、なのはの家の近くの高級マンションを借りることになっていた。

遊星はしばらくそこに住むことになるのだが、引っ越しはすぐに終わった。

遊星が持ってきた大きな荷物といえばDホイールぐらいだった。

「後で買い出しに行くか…それにしてもこの資金は一体…」

遊星がリンディに渡された海鳴で生活するための資金は札束が一つ。

「とりあえず、買い出しに行くか…」

遊星はそう呟き、部屋を出た。

買い出しと言っても、買ったものは今日の夜の食事だけだ。買い物を実に済ませた遊星は帰宅途中に偶然見つけた図書館へ立ち寄ることにした。

前に来た時は落ち着く暇がほとんどなかったため、こういった場所へ来るのは初めてだった。

「何か読むか…」

幸いなことにこの世界の文字は自分の世界『ネオ童実野シティ』で使われているものとまったく同じだった。

遊星が何を読もうかと迷っていた時、とある本棚で車椅子に座った茶髪の少女が自分より高い位置にある本に向けて手を伸ばしていた。

遊星はその少女が取ろうとしている本を取って少女に渡した。

「あつ、おおきに」

本を取って貰った少女は車椅子を遊星の方へ向け頭を下げた。

「いや、気にするな」

「すみません。足、不自由なもので」

その後、遊星とその少女は椅子に座り、お互いの自己紹介をした。

「初めまして。八神はやていいいます。えっと、あなたは？」

「不動遊星だ」

「遊星さんか。カッコいい名前やなあ。」

はやてが笑顔になる。

それから二人はお互いのことをしばらく語った。遊星ははやてに自分の両親の事、この街に用があつて海鳴に引越してきた事を話した。

はやては遊星に自分も両親は既に亡くなっている事、自分の足は生まれつき不自由だという事、などを話した。

その後、はやてと別れた遊星は図書館を出て帰ろうとした時、クロ

ノから通信が入った。

「なんだ？」

「もう伝えたかもしれないが明日はフェイトと君の裁判最終日だ。
今日の夜八時、僕が君を迎えに行く」

「ここでの任務はどうなる？」

「その事については心配ない。今夜君と入れ違いで局の魔導師が数人そちらに向かう」

「わかった」

「それじゃあ、また後で」

遊星は通信を切り、家へと戻り、夜にはクロノと共に再び『アースラ』へと戻った。

次の日、『アースラ』の食堂にて、執務官であるクロノ・ハラオウンが対面に座っている四人と裁判の最終確認をしていた。

四人の手元には裁判についてのあらましが記載されている電子資料が置かれていた。

「さて、じゃあ最終確認だ」

対面に座っている右からユーノ（人間）、遊星、フェイト、アルフが座っていた。

「被告席のフェイトと遊星は裁判長の問いにその内容どおりに答えること」

「うん」

「ああ」

「今回はアルフも被告席にも入ってもらうから。」

「わかった」

クロノの指示にアルフが頷く。

「で、僕とこのフェレットもどきは証人席に、設問に関する回答はそこのとおりに……」

「うん。わかつ。」

ユーノは頷き、電子資料に目を通すのだが…

「て、おい!!」

目を通しながらユーノはクロノの先程の呼ばれ方を思い出し、テーブルを叩きながら立ち上がり、クロノを睨んだ。

「何だ？」

クロノはユーノが何故急に大声を張り上げたのかわかってはいるが、とぼけた表情をする。

「誰がフェレットもどきだ！誰が！！」

「君だが、何か？」

フェイトとアルフの頭ではユーノ＝フェレットの図式が構築されていた。

「「おお！！」」

と納得していた。

ユーノの頭の中でもその図式が構築されていたらしく、理解してシヨックを受けていた。

「そりゃ動物形態でいる事も多いけど、僕にはユーノ・スクライアっていう立派な名前が！！」

ユーノは力いっぱい自身がユーノ・スクライアであるという事を証明するように胸に手を当てて、クロノに抗議する。

「ユーノ。まあまあ」

アルフが苦笑いを浮かべながら落ち着くように宥める。

「クロノ、あんまり意地悪言っちゃ駄目だよ」

フェイトも苦笑しながらクロノに注意する。

「大丈夫。場を和ませる軽いジョークだ」

瞳を閉じて言っているからジョークか本気かは判別はつかなかった。

遊星はその様子をいつもの事だとばかりに見ていた。

正直ユーノとクロノが些細なことで口喧嘩をする事は半年間一緒にいてわかっていた。

同時にジャックとクロウが同じようなやり取りをしていた事を思い出し、どこか懐かしくもあった。

「とにかく……事実上、判決無罪。数年間の保護観察は確実といったところだが、受け答えはしっかりと頭に入れておくように」

「はい」

フェイトとアルフは首を縦に振って返事する。

「……はい」

ユーノは顔を引きつらせながらも返事をした。

裁判が始まる前に遊星は『アースラ』のメインモニタールームでリンディから「暗いニュース」を聞いていた。

「以前、海鳴で微弱だけどロストログアの反応をキャッチして、局員を二人ほど派遣して、その二人のリンカーコアが奪われたって話をしたじゃない？」

「ああ」

「そういう事が他の世界でも起きてるのよ。局員に限らず、リンカーコアを持った大型生物とかも発見されてるの」

「まさか…」

遊星の考えを察したのか、リンディは話を続ける。

「ええ。そのまさかよ。あなたと入れ替わりで海鳴に向かった局員はそのロストログアの反応を追って海鳴にいったの。でもその日、派遣された二人の局員もリンカーコアを抜き取られた状態で発見されたの」

「犯人は魔力反応を持った者をしらみつぶしに襲っているという事か。そして、海鳴にはなのはがいる」

「ええ。このままだとなのはさんも襲われる可能性がある。あなたとフェイトさんそれとアルフとユーノ君には裁判終了後、海鳴に向かってもらう事になるわ」

「わかった。この事をフェイトには…」

「裁判が終わるまでは言わない方がいいわ。絶対に心配するから」

「わかった」

嫌な予感がすると、遊星は思っていた。

そして次の日の夜、その予感は的中する事になるのだった。

第一話 新たなる出会いと新たなる戦い！（後書き）

次回予告

遊星

「裁判を終えた俺たちはすぐになのはの無事を確かめる為に海鳴へと向かった。

そこで俺たちが見た光景は…

次回！遊戯王5D's Magical A's 戦いの嵐！ベルカの騎士！」

ライディングデュエルアクセレーション！！」

第二話 戦いの嵐！ベルカの騎士！（前書き）

デュエリストVS非デュエリスト同士の戦いA・S編。

ドロー、SPCの上昇、モンスターの召喚などは一期と同じ。

モンスターが破壊された時のダメージは、

攻撃表示 破壊された時の攻撃力の半分のダメージを受ける。

守備表示 ダメージなし。

一期の時のダメージ計算が面倒だったので、これからはこんな感じでいきます。

第二話 戦いの嵐！ベルカの騎士！

裁判が終わった後、遊星達はすぐに海鳴に転送された。

遊星達の裁判が終わると同時刻、高町なのはは謎の襲撃を受け、高層ビルに直撃した。

なのははバリアジャケットは破壊され、相棒であるレイジングハーにも大破した状態だった。

そして、なのはの目の前に、なのはやフェイトよりも少し幼く赤色の戦闘服に身を包み、無骨なフォルムのハンマー、グラーファイゼンを肩に担いだ少女、ヴィータがなのはを追ってビルの中へと入ってきた。

「言ったよな？あたしはギガ強えてな……」

呼吸を整えながらヴィータは手にしたハンマーをなのはに向けて振り下ろした。

しかし、その攻撃はなのはには当たらなかった。

なのはが、顔を向けると、金髪に黒衣の少女、フェイト・テストアツサが手にしたデバイス、バルディッシュでヴィータのグラーファイゼンを受け止めていた。

「ごめん、なのは。遅くなった」

なのはの肩に優しく手を置いたのはユーノ・スクライア（人型）だ。

「仲間か!？」

少女はこれ以上の罅迫り合いを避けるために、後方へと距離を置く。

フェイトは追いかけて、バルディッシュを前に構える。

『サイズフォーム』

バルディッシュの先端が変形し、金色の鎌が出現する。

「……友達だ」

少女…フェイト・テストロッサはバルディッシュを構えて、ヴィータを睨んだ。

フェイト

「民間人への魔法攻撃。軽犯罪では済まない罪だ。」

フェイトは眼前の少女に告げた。

「何だあ？ テメエ、管理局の魔導師か？」

ヴィータは物怖じせずにフェイトに訊ねる。

「時空管理局囑託魔導師、フェイト・テストロッサ」

告げると同時に左足を半歩前に出す。

「抵抗しなければ弁護の機会が君にはある。同意するなら武装を解除して……」

フェイトはバルディッシュを構える。

「誰がするかよ!」

ヴィータは後ろを振り向かずにそのまま後退し、ビルから脱出する。

「ユーノ、なのはをお願い!」

「うん!」

フェイトは後方にいるユーノになのはの事を任せると、ヴィータを追いかけるようにしてビルを抜けた。

「来たか」

なのは達のいるビルの屋上からデュエルディスクを左腕に装着した遊星は、腕を組んで待機していた。

下から空を切るような音がした後、遊星の目の前にグラーファイゼンを手にしたヴィータが遊星の目の前に現れる。そして、それを追うようにしてフェイトが遊星の隣に着地する。

「うおっ!?!」

遊星の姿を見たヴィータはあわてて遊星から距離を取る。

「そこまでだ!おとなしくしろ!」

「んな事言われておとなしくする馬鹿がいるかよ!!」

ヴィータが罵声をとばす。

「仕方が無い!行くぞ!」

遊星がデュエルディスクからカードを五枚ドロ―する。

「なんだ!?!」

「ドロ―!マックス・ウォリアーを召喚!」

遊星の前にマックス・ウォリアーが召喚される。

「何だありゃ!?!使い魔…いや、召喚獣か?」

「マックス・ウォリアーで攻撃!」

遊星がそう叫ぶと同時にマックス・ウォリアーがヴィータに向かって行く。

「ちっ!」

マックスウォリアーの攻撃をかわしながらヴィータは遊星達から距離を取ろうとするが、フェイトがそれを見逃すはずが無く、すぐにヴィータを追いかける。

遊星は停めてあったDホイールに乗り込み、デュエルモードにしてDホイールを走らせた。

遊星が向かったのは、ビルの端、向いのビルに飛び移るのには距離が開きすぎている。

「スピードロード！」

遊星がそう叫ぶと、Dホイールの前輪から金色に輝く光の道が現れた。フェイトと共に受けた囑託試験後に遊星が新たに使えるようになった力だ。スピードロードは遊星のDホイールの走行する向きに合わせて道を造り、Dホイールが走り去った後はすぐに消えるようになっていく。これのおかげで遊星は空中でもライディングデュエルをする事が可能になった。

「これなら、空にあがったフェイト達をサポート出来る」

遊星はDホイールを走らせ、フェイト達の後を追った。

フェイトとヴィータの戦闘は続いていた。

互いにぶつかっては距離をとるという行為を繰り返していた。フェイトが距離をとり、ヴィータが詰め寄ろうとしたときだ。フェイトのそばで待機していたアルフが掌で展開した魔法陣を展開し、バインドでヴィータの四肢を封じたのだ。ヴィータの四肢にはオレンジ色の輪が出現し、空に縫い付けられたようにしてその場で動きを封じた。

ヴィータ

「うぐっ、うづううう……」

必死でもがこうとするが、外れない。

「終わりだね。名前と出身世界、目的を教えてもらおうよ」

バルディッシュをヴィータに突きつけフェイトは訊ねる。
訊ねるといふよりは尋問と言った方しっくりくるだろう。

アルフは魔法陣を閉じる。スピードロードを使った遊星も二人に合流する。

「くっくっくっくっ!!」

ヴィータは獣のような唸り声を上げる。

フェイトもアルフもこれで解決したと思ったが、

「何かヤバイよ!? フェイト!」

アルフは動物の本能のようなものが働き、主に警告した。

「え?」

「フェイト、離れる!!」

遊星がフェイトをその場から引き離そうとするが、そうするよりも早く、フェイトの眼前に自分より遥かに身長の高い女性が現れ、右手に持っている剣でバルディッシュを構えたフェイトを後方へと飛ばした。

「うああああっ!!」

「フェイト!!」

遊星が叫ぶ。

フェイトは自分を飛ばし、ヴィータを守るようにして立っている騎士甲冑のような衣装に長い桃色の髪をポニーテールにし、鋭い眼光を放つ女性を見た。

「ぬおおおおおっ!!」

その直後、アルフの正面から叫び声のような声が聞こえてきた。

女性ではなく、男性の声が獣のような叫びをしながらアルフに間合いを詰めてきた。

男は右回し蹴りを放つ。

アルフは左腕で防御をするが、それでも衝撃を完全に殺す事は出来ずに蹴り飛ばされた。

ヴィータを助けた女性、シグナムはヴィータではなくフェイトを見ていた。

ヴィータのバインドを解くにしても、フェイトが邪魔だ。

シグナムは手にした剣を斜め上に掲げる。

「レヴァンティン。カートリッジロード!」

紫色の魔法陣を足元に展開させている。

刀身の一部分が上下にスライドして薬莢を排出させながら蒸気を噴出させる。

剣――レヴァンティンを天に掲げる。

刀身に炎が灯ってから、振りかぶる。

「紫電一閃！！はあああああ！！」

魔法陣から離れてフェイトへと間合いを詰める。

「っ！？」

フェイトはバルディッシュで防御を取るが、レヴァンティンはそんなバルディッシュをあつさり叩き斬ってしまった。

シグナムは更にもう一回、レヴァンティンを振り下ろす。

『ディフェンサー』

バルディッシュがフェイトを覆うようにして防御魔法を発動させるが、シグナムの一撃の方が上だった。

フェイトはシグナムの一撃に耐え切れず、地上に向かって落下していく。

「（バルディッシュを一撃で、こんな状態に……）」

いくら隙を突かれたといっても、ここまで見事にやられるとは思わなかった。

「（駄目だ。いい案が浮かんでこない……）」

瞳を閉じて、重力に逆らうことなく落下していく事を選んだが、フェイトの体はそれ以上落ちることは無かった。

フェイトが瞳を開けると、遊星がDホイールに乗ったまま、フェイトを抱きかかえていた。

「遊星!？」

フェイトの無事を確認した遊星はフェイトの方に視線を向けたが、すぐに視線を前の方に向け直した。

いつもの遊星なら、大丈夫か?などと聞いてくるはずなのだが、遊星の表情には余裕が無かった。

なのは、フェイト、そしてクロノは強く、そう簡単にはやられないと遊星は思っていたのだが、今さっきその考えは簡単に覆された。

遊星は近くのビルにフェイトを降ろすと、シグナム達の方へと向かった。

「(相手は三人。俺の手札は五枚、SPCは3、場にはマックス・ウォリアーが一体。)」

なのはは戦闘不能と断言していい状態でありフェイトもおそらく長期戦は無理だろう。

「(ならば、次のドローから畳み掛けて勝負をつける!)」

遊星はそう思い、カードをドローする。

「スピード・ウォリアーを召喚!」

遊星の場にスピード・ウォリアーが召喚される。

「なんだあれは…召喚獣か?」

遊星の召喚したモンスターを見てシグナムが呟く。

「さあな、でも、あいつはさっきの魔導師より厄介だ。」

バインドを解き、無くした帽子をかぶり直したヴィータがシグナムに言う。

「そのようだ。だが、1対1の戦いであれば…」

「ベルカの騎士に負けはねえっ!!」

シグナムとヴィータが各々の武器を構え直す。

「奴は私がやる。後は任せる。」

シグナムはそう言つと、遊星の方へ向かつて行く。

「ちっ!しゃあねえなあ!つてあれ?」

ヴィータはいつの間にか自分の後ろに入れていたある物が無くなっているのに気付いた。

「さっきの騎士か!行けっ!マックス・ウォリアー!!」

マックスウォリアーが槍を構え、シグナムへと向かつていくが、シグナムは愛剣レヴァンティンのカートリッジを排出させ、剣先に炎を灯す。

「紫電一閃!!」

シグナムの一振りでマックスウォリアーが両断され、破壊される。

「ぐああっ！」

遊星 LP 4000 2900

「召喚獣が破壊されると、召喚師も傷を負うのか。面白い」

「カードを二枚伏せる」

迂闊に攻め込めば負ける。

そう考えた遊星はさっきまでの考えを諦め、シグナムの隙を突く事にした。

第二話 戦いの嵐！ベルカの騎士！（後書き）

次回予告

遊星

「俺たちの前に突如現れたベルカの騎士。彼女達の攻撃によって俺たちは徐々に追いつめられていく…」

次回！遊戯王5D's Magical As！『対決！スターダスト・ドラゴンVSベルカの騎士！』

ライディングデュエルアクセレーション！！」

第三話 対決！スターダスト・ドラゴンVSベルカの騎士！（前書き）

マジで久々の投稿です。

ここで調子を取り戻して更新して行けるといいな。

第三話 対決！スターダスト・ドラゴンVSベルカの騎士！

海鳴の都市上空で遊星は謎の襲撃者の一人、シグナムと戦闘を続けていた。

シグナム

「紫電一閃！！」

シグナムの振るう剣、レヴァンティンが遊星のモンスター、マックス・ウォリアーを両断する。

遊星

「ぐあああつ！！」

遊星 LP4000 2900

シグナム

「召喚獣が破壊されると、召喚師も傷を負うのか。面白い。」

シグナムが遊星を面白そうに見る。

遊星

「カードを二枚伏せる。」

シグナム

「（攻めて来ないだ？）ならば、こちらから行くぞ！！」

遊星

「来るか！！」

シグナムが遊星の場に出ているスピード・ウォリアーを斬り裂こうと、突進する。

遊星

「トラップカードオープン！くず鉄のかかし！」

シグナム

「はあああつ！！」

シグナムがレヴァンティンをスピード・ウォリアーに向けて振り下ろそうとするが、その太刀筋はスピード・ウォリアーの前に現れたくず鉄のかかしによって防がれた。

シグナム

「何！？」

遊星

「くず鉄のかかしは相手からの攻撃を一度だけ無効にし、発動後、再セットする。」

シグナム

「使つのは召喚獣だけではないという事か。」

シグナムは遊星からの攻撃を警戒しているのか、一度距離を置いた。

遊星

「俺のターン！」

遊星 S P C 3 S P C 4

遊星

「トランプ発動！トゥルースリインフォース！！このカードは、デツキからレベル2以下かの戦士族モンスター一体を特殊召喚する！ただし、このターン、俺はバトルフェイズを行う事が出来ない。現れる！マツシブ・ウォリアー！！」

遊星の場にマツシブウォリアーが召喚される。

遊星

「さらに、デブリドラゴンを召喚！」

遊星の場に続けてデブリドラゴンが召喚される。

シグナム

「召喚獣が三体だと！？何だこいつは！？」

遊星

「レベル2のマツシブ・ウォリアーとスピード・ウォリアーにレベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング！！」

デブリ・ドラゴンが光の輪となり、マツシブ・ウォリアーとスピード・ウォリアーを包み込む。

遊星

「集いし願いが新たに輝く星となる。光指す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ！スターダスト・ドラゴン！！」

遊星の場の三体のモンスターが消え、スターダスト・ドラゴンが海鳴の夜空へと飛翔する。

シグナム

「（さっきまでの召喚獣とは違う。感じとれる魔力も、威圧感も…）」

「

驚いていたのはシグナムだけではなかった。

同じように上空でフェイトと戦闘をしていたヴィータ、アルフと盾の守護獣ザフィーラ、とあるビルの屋上へと移動したなのはとユーノの視線はスターダス・ドラゴンに向けられた。

遊星

「さらにカードを一枚伏せる！そして、スピードワールド2の効果発動！SPCを四つ取り除く事で、手札のSP一枚につき800ポイントのダメージを与える！」

遊星 S P C 4 0

遊星のDホイールの先端から金色の光がシグナムへと向かって行く。

シグナム

「レヴァンティン。私の甲冑を。」

シグナムがレヴァンティンを何か儀式めいていた構えを取って指示を出した。

全身に紫色の魔力が纏われる。

シグナム

「甲冑……、鎧……防御系……」

スピードワールド2による攻撃はシグナムの周りの紫色の防御壁によって弾かれ、霧散する。

遊星

「何!？」

シグナム

「悪くない一撃だ。通常なら確実にダメージを与える事が出来るだろうな。」

シグナムの全身を纏っていた紫色の魔力は消える。

シグナム

「だが、ベルカの騎士に一对一を挑むには……まだ足りん!!」

シグナムがそう叫ぶと同時にシグナムは遊星の視界から消えた。

遊星

「消えた!？」

遊星がシグナムを見つけたときには、既にシグナムは炎を灯したレヴァンティンでスターダスト・ドラゴンに斬り掛かっていた。

遊星

「そうはさせない!くず鉄のかかし!!」

再びくず鉄のかかしが発動されシグナムの攻撃を防ぐが、

シグナム

「ベルカの騎士に同じ手は通用せん!!」

レヴァンティンの攻撃力と刀身に灯した炎による攻撃でくず鉄のか
かしが粉々になる。

遊星

「くず鉄のかかしが…」

シグナム

「はああああつ!!」

シグナムの一撃でスターダストドラゴンは頭から両断され、爆散す
る。

遊星

「ぐあああああつ!!」

遊星 LP2900 1650

遊星

「スターダストが、破壊されただと!?!」

遊星がスターダストが破壊された所に目を向けると、スターダスト
の残滓の様な物が一カ所に集まり、何処かへと飛び去って行った。

遊星

「何だあれは!?!」

シグナムは驚く遊星を黙って見ていた。

シグナム

「貴様のしもべの力、我らの糧とさせてもらったぞ。」

遊星

「何！？どういう意味だ！？」

遊星が問いかけるが、シグナムは答えなかった。

遊星

「お前達は何であろうと、俺は自分の戦いをするのみ！俺のターン！！」

遊星 S P C O 1

遊星

「カードを一枚伏せ、ロードランナーを守備表示で召喚！」

遊星の場にロードランナーが召喚され自分の身を守らんとばかりに体を丸くする。

シグナム

「時間稼ぎか…（このまま奴に逃げられれば私も危ない。一気に勝負を決める！！）」

シグナムがレヴァンティンを構え、ロードランナーに突進する。

遊星

「くっ！（この攻撃を決められれば、俺自身も無事では済まない！だが！）トラップ発動！！スターダスト・アドベント！！」

シグナム

「っ！？」

遊星の場のカードを見て、シグナムの動きが止まる。

遊星

「このカードは、自分の場のモンスターが攻撃されたとき、その攻撃を無効にして、墓地のスターダスト・ドラゴンと同じレベルのシンクロモンスターをエクストラデッキから墓地に送る事で特殊召喚する！！俺はエクストラデッキから、ロード・ウォリアーを墓地に送る！！」

シグナム

「まさか…再び奴が…！？」

遊星

「飛翔せよ！スターダスト・ドラゴン！！」

遊星の場にスターダスト・ドラゴンが飛翔する。

遊星

「この効果で召喚したスターダスト・ドラゴンはエンドフェイズに除外されるが、攻撃力は倍になる！」

スターダスト・ドラゴン ATK 2500 5000

シグナム

「馬鹿な…！？こいつの魔力は全て闇の書に…そして、さっきとは比べ物にならない程の魔力…」

遊星

「俺が諦めない限り、俺のモンスター達は何度でも蘇る!!」

遊星がスターダスト・ドラゴンを召喚したとき、遊星の視界になのはが映った。破損したレイジングハートに魔力を込めているようだった。

遊星

「（なのははおそらくあの時の大技スターライトブレイカーでこの結界を破壊するつもりだろう。俺もフェイトも限界が近い。ならば、なのはが結界を破るまでにこの場で一気に決着を着ける!!）行く……」

次の瞬間、遊星の動きが止まった。

遊星

「何だ…これは…」

遊星が下に目を向けると、遊星の胸から手が生えていた。

シグナム

「（シャルカ…）」

フェイト

「遊星!!」

フェイトが遊星を助けようと遊星の元に向かうがシグナムがそれを阻む。

遊星

「ぐあああああああつ!!」

遊星が絶叫する。

遊星

「（俺の中から何かが奪われて行く……一体……これは……）」

なのはの方に目を向けると、なのはの胸の辺りからも同じように手が生えていた。しかしなのははその手を振り切るようにレイジングハートは高く掲げた。

遊星

「（まずい!このままでは……）スターダスト・ドラゴン!!」

なのは

「スターライト……」

遊星

「シューティング……」

なのは

「ブレイカー!!!!」

遊星

「ソニック!!!!」

なのははふらつきながらも振りかぶったレイジングハートを完成させた特大の桜色の魔力球にぶつけて、発射させる事に成功した。同時にスターダストドラゴンが天に向けてシューティングソニック

を放った。

桜色の一直線の柱と、銀色の一直線の柱のような光となって天に向かって飛んだ。

やがて桜色の光と銀色の光は結界を貫き、消えた。

次元航行艦アースラでは。

なのはがスターライトブレイカーを、スターダストドラゴンがシューティングソニックを撃って、結界を破壊してくれたおかげで映像が映った。

なのは、フェイト、ユーノ、アルフ、そして遊星と正体不明の四人組などが映っていた。

エイミィ・リミエツタが超速でキーボードを叩きながら、逃げていく四つの光の検索を試みるが、焦るばかりだ。

エイミィ

「に、逃げる！ ロック急いで！ 転送の索敵を！」

局員

『やっています！』

それでもキーボードを叩く速度は落ちない。

映像の中に何か本のようなものが映った。

エイミィの横にいたクロノがそれを見て、驚きを隠せなかった。

クロノ

「あれは……」

それから数分が経過し、エイミィの行動は失敗に終わった。

キーボードを叩きながらエイミィは突っ伏した。

エイミィ

「クロノ君、ごめん。クロノ君？」

エイミィはクロノを見る。

クロノは真剣な表情をしていた。

クロノ

「第一級搜索指定遺失物ロストログア……闇の書……」

クロノは拳を強く握り締めていた。

ユーノ

『クロノ！！』

クロノ

「どうした？」

ユーノの慌てたような表情にクロノが聞き返す。

ユーノ

「ごめん、敵には逃げられた……」

クロノ

「ああ。こっちでも追いかけたがダメだった。そっちは？全員無事なのか？」

ユーノ

「それが……」

ユーノが言葉を切らす。

クロノがモニターを見ると、倒れたなのはをフェイトが抱き起こし、介抱しているのが見えた。

ユーノ

「それと、遊星も…」

モニターで遊星を映すと、遊星はDホイールの側面にもたれ掛かっていた。

クロノ

「なのはと遊星の意識は!？」

ユーノ

「なのはの方は意識はあるみたいだけど、遊星の方は…」

ユーノが言葉を詰まらせる。意識が無いのだという事をクロノは察した。

クロノ

「解った。とにかく君たちをすぐに『アースラ』へと転送させる!」

ユーノ

「ああ!」

数分後、フェイト達は『アースラ』へと転送されたのだった。

第三話 対決！スターダスト・ドラゴンVSベルカの騎士！（後書き）

次回予告

フェイト

「なのはと遊星は意識を取り戻したけど、回復にはまだ時間がかかるみたいです。そんな中いいニュースが一つ。

次回、遊戯王5D's Magical A's ♪ 再会！そして海鳴へ… ♪

ライディングデュエルアクセレーション／／／

第四話 再会！そして海鳴へ…（前書き）

今更ですが、明けましておめでとつございます！

ものすごく久々の更新ですが、これを機にペースを整えて行きたい
と思います！！

第四話 再会！そして海鳴へ…

次元空間の中で一際目立った建造物があつた。

その中で次元航行艦『アースラ』と同等の大きさの艦や小型の運送に使われる艦など種類様々な艦が行き来していた。

発着場では『アースラ』はメンテナンスを受けていた。

中にはエイミィやリンディと似たような格好をしている者達がいるような場所に溢れていた。

ここは時空管理局本局である。

海鳴での戦いで意識不明になった遊星となのはは、すぐに本局の医務室へと連れて行かれた。

なのはは、すぐに目を覚まし、フェイトとの再会を無事果たせたのだが、遊星は目を覚まさなかった。

エイミィ

「なのはちゃんとユーノ君、それとフェイトちゃんの検査結果ですが、怪我そのものは大したことはないようです。」

リンディ

「そう。それはよかったわ。」

エレベーターの中でエイミィは景色を眺めていると思われるリンデ

イに報告する。

リンディ

「遊星さんは？」

エイミィ

「……えつと……」

エイミィが言葉を詰まらせる。

リンディ

「まだ、目を覚まさないのね。」

エイミィの様子を見てリンディは察したように言った。

エイミィ

「はい……」

エイミィも暗い表情で答える。

なのはやフェイトの負傷はまだしも、遊星の戦闘不能はダメージが大きかった。

遊星はこれまで何度倒れても不屈の闘志で起き上がってきたが、今回の負傷でもそうとは限らない。

しかし、リンディは遊星が復活すると信じていた。

クロノ

「君の怪我也大した事なくてよかった。」

別室でクロノはフェイトに応急処置を終えると、廊下に出ていた。手に包帯を巻かれたフェイトもついていくように廊下に出る。

フェイト

「クロノ、ごめんね。心配かけて…」

クロノ

「君となのはでもう慣れた。気にするな。」

フェイトはその言葉にただ、笑みを浮かべるしかなかった。

フェイト

「クロノ…遊星は？」

フェイトの質問にクロノは表情を暗くする。

クロノ

「まだ、目を覚まさないらしい。」

フェイト

「遊星には何が起こったの？遊星はリンカーコアが無いし…」

クロノ

「無いにしても、リンカーコアとは別の何かで彼は召喚獣を召喚していた可能性がある。それを奴らに奪われたのかもしれない。」

フェイト

「遊星、目を覚ますといいけど……」

クロノ

「まあ、話は出来なくとも、顔を見る事は出来る。彼の所へ行くか？」

フェイト

「うん!!」

クロノの提案にフェイトは顔を輝かせた。

遊星

「ここは、海鳴か？」

夢なのか、現実なのかは分からなかったが、周りを見回すと、そこは炎に包まれた海鳴の街があった。

遊星

「あれは……」

遊星が見つけたのはデバイスを破壊され、血を流して倒れているのはとフェイトだった。そしてその様子を空から見下ろしている者がいた。遊星がそれに気付く。

遊星

「お前か！こんな事したのは!!」

遊星が自分たちを見下ろしている物に問いかける。それは黒い装束を着て、体中に赤い模様が浮かんでいる銀髪の髪的女性だった。

女性は涙を流していた。

女性

「この惨状は貴様達の愚かな行動が引き起こしたものの…」

遊星

「何!?!」

女性

「そして、その元凶、不動遊星…お前はここで消える…」

遊星

「?」

遊星が首を傾げた時、遊星の後ろから何かが飛び去って行った。

遊星

「何!?! あれは…スターダスト!!」

女性

「貴様はこの星屑の竜に葬られる…消えろ…」

スターダスト・ドラゴンが遊星に向けてシューティングソニックを放つ。

次の瞬間、遊星の視界は真っ白になった。

遊星

「っ!!」

遊星が目を覚ました遊星が最初に目にしたのは医務室と思われる天井だった。前にフェイトが運ばれた『アースラ』の医務室に似ていた。

クロノ

「やっと、目が覚めたのか。」

部屋のドアからクロノが入ってきた。

遊星

「クロノ…ここは？」

クロノ

「本局の医務室だ。君はあの戦いから意識不明でここに運ばれた。」

遊星

「そうか。……っ!!」

遊星は上半身を起こそうとしたが、突然の目眩に襲われ、体を倒した。

クロノ

「あまり無理はするな。君は生死の境を彷徨っていたと言ってもいい状態だったんだ。」

遊星

「俺は、どれくらい眠っていた？」

クロノは遊星が二日間眠っていた事、なのはもユーノもフェイトも傷は大した事はない事、遊星達が戦った相手の事は今の所何も分かっていないと言う事を話した。

クロノ

「フェイトが今、飲み物と、タオルを持ってきてくれる。」

遊星

「そうか……」

クロノ

「それと、君の持ち物は僕が預かっている。起きて、歩けるようになったら、取りにきてくれ。」

遊星

「すまない。」

クロノ

「気にするな。じゃあ、僕は仕事に戻る。」

そう言うてクロノは部屋を出て行った。

遊星は体を起こし（無理矢理）さつき見た夢の事を考えた。

遊星

「（あれは、一体何だったのか…本当に起こる事なのか…それとも

…」

遊星がそう考えていた時、フェイトがドリンクボトルとタオルを胸に抱えて部屋に入ってきた。

フェイト

「遊星……」

遊星

「フェイト……」

部屋の空気が沈黙に支配される。

フェイト

「あの…これ……」

フェイトがドリンクボトルとタオルを遊星に渡す。

遊星

「ああ。ありがとう。」

遊星は礼を言って受け取る。

フェイト

「……」

遊星

「……」

再び沈黙が訪れる…が、フェイトが不意に遊星に抱きついた。

遊星

「……フェイト？」

フェイトの突然の行動に遊星が動揺する。

フェイト

「良かった…遊星。本当に良かった。」

フェイトの声は若干震えていた。この時、遊星はどうすればいいのかわからなかった、というのは内緒である。

数日後、遊星の容態はすぐに回復し、普通に生活出来る程に回復していた。

一方、リンディたちは今後のプランを検討していた。『アースラ』は整備中であり、本局からではなのはたちの世界には数十分の転送タイムラグがあるため、本局を拠点とするわけにもいかない。

フェイトも事件への協力を申し出るが、魔法が使えなくなってしまったのはを守りたいという気持ちが本音だろう。そんなフェイトをクロノはあまり巻き込みたくないと心配する。

遊星

「それで、これからどうする。」

遊星が全員に問う。

リンディ

「やっぱり、あの手で行きましようか。」

リンディが明るく言ったが、誰一人として、その意図を理解する事は出来なかった。

リンディ

「さて、私達アースラスタッフは今回ロストログア『闇の書』の捜索及び魔導師襲撃事件の捜査を担当する事になりました。ただ、肝心の『アースラ』がしばらく使えない都合上、事件発生時の近隣に臨時作戦本部を置く事となります。」

リンディの言葉に誰もが真剣に聞いている。

リンディ

「分割は観測スタッフはアレックスとランディに。」

リンディが二人に視線を向ける。

アレックス&ランディ

「はい!!」「」

アレックスとランディは即座に返事をする。

リンディ

「ギャレットをリーダーとした捜査スタッフ一同!」

リンディがさらに後ろにいる多数のスタッフに視線を向ける。

捜査スタッフ

「「「「「はい！」「」「」「」

全員が揃って返事をする。

リンディ

「そして、司令部は私とクロノ執務官、エイミー執務官補佐、遊星さんとフェイトさん。以上三組に分かれて駐屯します。ちなみに司令部は、なのはさんの保護も兼ねてなのはさんのお家のすぐ近所になります！」

遊星を除く全員が驚愕の声を上げた。

第四話 再会！そして海鳴へ…（後書き）

次回予告

遊星

「海鳴に住む事になった俺達。そして、再び新たな戦いが始まる！

次回、遊戯王5D's Magical A's「新たな出会い！新たな力！」

ライディングデュエルアクセレーション！！」

第五話 新たな出会い！新たな力！（前書き）

グレアムとの会話が無いのは仕様です…

面倒だし、遊星と絡ませるのも難しかったので…

第五話 新たなる出会い！新たなる力！

遊星達が海鳴に住む事が決まった次の日、遊星達は荷物をまとめて海鳴にあるとあるマンションを借り、そこへ荷物を運んだ。

遊星は前に借りた部屋に住むつもりでいたのだが、合流するのが面倒、すぐに行動できるように一緒にいた方がいい、一人になった遊星が心配（主にフェイトが）という理由で遊星もフェイト達と、暮らす事になった。

荷物を運びこみ、（クロノはほとんど役に立たなかった。）電化製品の調整を終えた遊星はDホイールの整備をしていた。

遊星

「（スピードロードは十分役に立っている。エイミィに感謝だな）」

遊星がDホイールの調整をしていると、不意に後ろから声をかけられた。

「??？」

「あの～」

遊星が声のする方へ振り向くと、金髪の少女と、青い髪の少女が立っていた。

遊星

「君たちは、前に…」

遊星は以前、この二人と、なのはを含めた三人が乗った車の故障を

直した事を思い出した。

遊星

「アリサとすずか、だったか？」

遊星の反応にすずかが目を丸くする。

すずか

「どうして、私達の名前……」

アリサ

「ほら、前に車直してくれた人よ。覚えてない？」

すずか

「ああ、あの時の」

アリサの言葉で、すずかは遊星の事を思い出したようだ。

遊星

「そういう君達はここに何か用があつてきたのか？」

アリサ

「なのはに呼ばれてきたのよ」

すずか

「フェイトちゃんがここに住む事になったから良かったら来てって」

遊星は以前フェイトがなのは宛にビデオメールを出していた事を思い出した。

遊星

「フェイト達なら上にいるはずだ。会ってくるといい」

アリサ&すずか

「「はい!!」」

アリサ達は元気に返事をする、なのは達のいる部屋へと向かっていった。

遊星が整備を続けていると、マンションの入り口から、なのは達が出てきた。

フェイト

「遊星」

遊星

「フェイトか。出かけるのか？」

フェイト

「うん。色々話したいこともあるから、なのはのお店に……」

遊星

「そうか。気をつけて行って来いよ」

遊星がそう言う、フェイト達は翠屋へと、出かけて行った。

整備を終えた遊星は取りあえず、一度部屋に戻ろうとした時、入り口からリンディが出てきた。

リンディ

「あら、遊星さん」

遊星

「リンディ提督か。出かけるのか？」

リンディ

「ええ。なのはさんのご両親に挨拶するためにこれから翠屋に」

遊星

「そうか」

リンディ

「良かったら、あなたも来ない？」

遊星

「俺も？」

リンディ

「そう。なのはさんのご両親はとてもいい人なの。これから、会う機会も多くなると思うから、挨拶しといた方がいいと思うわよ？」

遊星

「そういうことなら、俺も行くわ。」

遊星はDホイールのシートの上に置いてあるジャケットを羽織る。

翠屋に着いた遊星達は士郎と桃子に挨拶をし、なのは、フェイト、

アリサ、すずかはテラスで談話していた。

士郎

「君が遊星君か。なのはから、話は聞いているよ。」

遊星

「いえ、これからよろしくお願いします」

遊星が丁寧に挨拶をする。

リンディ

「そんなわけでこれからしばらく近所になります。よろしくお願いします」

リンディが二人に深々と頭を下げた。

士郎

「ああ、いえいえこちらこそ」

桃子

「どうぞ、よろしくお願いします」

士郎と桃子も頭を下げながら挨拶をする。

士郎

「そういえば、フェイトちゃんは三年生ですよね？学校はどちらに？」

士郎がフェイトの転入先を訊ねる。

リンディ

「はい。実は……」

リンディが士郎の質問に答えようとした時、ドアが開き、何かが入っている箱を持ったフェイト達が入ってきた。

フェイト

「リンディでいと……、リンディさん」

フェイトが両手で持っている箱の事を訊ねようとする。

リンディ

「なあに？」

リンディの声色は明らかにフェイトが訊ねにくるだろうということとを想定していたものだ。

フェイト

「あ、あの……これ……これって……」

フェイトが持っていた箱の中には聖祥学園の制服が入っていた。それでフェイトの転入先が遊星にはわかった。

リンディ

「転校手続きとつといたから、週明けからなのはさんのクラスメイトね」

リンディは笑顔で言っただけだ。

桃子

「まあ素敵！」

士郎

「聖祥小学校ですか。あそこはいい学校ですよ」

高町夫妻が娘が通っている学校を褒める。皆から祝福の言葉が送られるフェイト。

しかし、フェイトは戸惑っていた。フェイトが遊星を見る。

遊星の言おうとしていることはもう分かっていた。

「せつかくの学校だ。楽しんで来い」

だろう。

フェイト

「は、はい…ありがとうございます／＼」

フェイトは顔を真っ赤にしながら制服が入っている箱を大切に抱きしめた。

士郎

「ところで遊星君。」

遊星

「はい？」

士郎

「居候というのも肩身が狭いだろっ？うちで働く気はないかい？」

突然の提案にさすがの遊星も少し戸惑う。

遊星

「いいんですか？」

士郎

「ああ。私達としても、君がいてくれるのはありがたい。」

桃子

「遊星さんさえ良ければ、私達はいつでもあなたを歓迎するわよ」

遊星

「実は、職を探して、働こうと思っていた所だったんです。ただ、住まわせて貰うのは気が引けるので……」

士郎

「ふむ。遊星君は何ができるんだい？」

士郎からの質問に遊星は少し考えた。

遊星

「機械弄りと修理、プログラミング……」

遊星が自分が得意なことを挙げていく。

士郎

「機械に強いなら、是非働いてもらいたい！何かあった時に対応してもらえるしね。」

遊星

「では、お願いします。」

遊星と士郎は固く手を握り合った。

一方、本局のメンテナンス室ではレイジングハートとバルディッシュの修理と調整をしているエイミィの後輩、マリーは、二基が出しているエラーコードに頭を悩ませ、エイミィに相談していたのだ。

二基が出しているエラーコードは、「必要な部品が足りない」というものだった。

そのエラーコードと要求部品を見て、驚くエイミィ。

エイミィ

「これって……」

「CVK - 792」

エイミィ

「レイジングハート、バルディッシュ……本気なの？」

それは、ベルカ式カートリッジシステムの部品名だった。

第五話 新たなる出会い！新たなる力！（後書き）

次回予告

遊星

「デバイスの修理を終え、なのはとフェイトは新たな力を手に入れる。そして再び、四人の騎士達との戦いが始まる！」

次回、遊戯王5D's Magical A's 「新たなる力の起動！
対決！闇の書の決闘者！」

ライディングデュエルアクセレーション！！」

第六話 新たな力の起動！対決！闇の書の決闘者！（前書き）

色々飛ばしてますが、補足はするつもりです。

銭湯の話とか銭湯の話とか銭湯の話とかwww

第六話 新たな力の起動！対決！闇の書の決闘者！

私立聖祥学園。

フェイトは本日、転校初日である。

正直、メチャクチャ緊張している。

なのは、アリサ・バニングス、月村すかという友人がいなければ柱の陰にでも隠れるか、穴を掘ってどこかに入って事の成り行きを見守りたいと思っていたに違いない。

ちなみに現在、フェイトは廊下にいる。

もちろん、服装は私服ではなく聖祥学園の制服だ。

教師

「さて皆さん。実は先週、急に決まったんですが今日から新しいお友達がやってきます。海外からの留学生さんです」

担任教師が自分のことを大まかに説明してくれてはいるが…

フェイト

「（どどどどど、どうしよう。昨日は練習しようと思ったけど全然出来なかったし、遊星は変に緊張する事ないって言ってくれたけど、クロノやエイミィは転校初日の成功如何で今後の学生生活に影響するって言ってたし……、どどどど、どうしよう）」

だが、それがフェイトの緊張を和らげる効果を与えてくれているわけではないようだ。

フェイト

「（そ、そうだ。まずは深呼吸！）」

思い出したようにフェイトは深呼吸をしようとするが…

教師

「フェイトさん、どうぞ」

タイミング悪く、担任教師がフェイト声をかけた。

フェイト

「（え…）」

フェイトの思考が完全に停止する。

フェイト

「（えっと、確か遊星は…）」

フェイトが登校する前に遊星は緊張しているフェイトに一つアドバイスをしたのだ。

遊星

「最初は自己紹介ができればいい。質問は後で一つ一つ答えていけばいい。」

と、言われたのだが、今のフェイトは挨拶すらまともにできるのかも怪しかった。

フェイト

「（いや、ここで逃げちゃダメだ。まだ始まってもないんだから

！」

フェイトは両手を拳にし、覚悟を決めてドアに手をかけた。

フェイト

「し、失礼します」

フェイトが入ると、教室内で色んな声が出ていた。

緊張しながらも教師の近くまで何とか歩み寄る。

フェイト

「あの、フェイト・テストロッサといいます。よろしく願います」

自己紹介を終えてから、頭を下げた。

教室内から拍手が送られた。

フェイト

「（よかった。上手くいったんだ！やったよ！遊星！！）」

フェイトは自分の自己紹介が上手くいったことで心の中で遊星に感謝した。

一方遊星はと言つと…

遊星

「お会計が六百円になります。」

遊星が会計の合計を伝え、客が料金を渡す。

遊星

「六百円ちょうどお預かりいたします。ありがとうございました。」

なのはの両親が経営する喫茶店「翠屋」でレジを打っていた。

そして午後、一段落した遊星はレジの近くにある椅子に腰掛け一休みしていた。

士郎

「遊星君、お疲れ。」

士郎が奥の厨房から出てきて遊星にコーヒーの入ったマグカップを渡す。

遊星

「ああ、お疲れ様です。」

遊星がマグカップを受け取ると、士郎も遊星の隣の椅子に座る。

士郎

「今頃、フェイトちゃんも、少しは学校に慣れたんじゃないかな。」

士郎が思い出したように言う。

遊星

「すぐに打ち解けていると思います。人見知りの激しい所はありませんが、なのは達もいるので…」

士郎

「そうだね。そう言った面では大丈夫かもしれないね。」

遊星

「そう言った面？」

遊星が聞き返すが、士郎は何も言わなかった。

そして、一週間後。なのはのリンカーコアは無事に完治。そして、レイジングハートとバルディッシュも修理と部品交換を終えて、二人の手に戻ってくる。

一方、帰還中のヴィータとザフィーラが管理局に補足され、局の捕獲結界内で武装局員に取り囲まれる。クロノの攻撃を軽傷でしのいだ二人。

戦闘開始のその刹那、なのはとフェイトが現場に駆けつける。

それぞれのデバイスを起動させるなのはとフェイト。

だがその時、溢れる魔力の奔流と共に、新たな鼓動が二人を包む。

エイミーからの通信で、レイジングハートとバルディッシュは、それぞれの主人のために

自ら望んで、自らの意志で新たなシステムを搭載したことを告げる。

そしてなのはとフェイトは、新たに生まれ変わった自分のデバイスの名を呼ぶ。

なのは

「レイジングハート・エクセリオン!!」

フェイト

「バルディッシュ・アサルト!!」

6連装カートリッジシステムを搭載し、新たな姿となった二基。

二人のバリアジャケットもそれぞれ強化型へと変化。

いま、二度目の戦いが始まるうとしていた。

遊星もDホイールに乗り、アルフと共になのはとフェイトの後ろに陣取っていた。

それを見たヴィータ達が戦闘態勢に入ろうとした刹那、ヴィータが抱えていた闇の書が黒い輝きを放った。

ヴィータ

「うおっ!!」

ヴィータが闇の書の突然の異変に驚く。同じようにヴィータと背中合わせになっていたザフィーラも闇の書の異変を感じ取り驚いていた。

ザフィーラ

「何だ…これは…闇の書に何が起きている!?!」

ヴィータ

「知らねえよ!!でも、これは何かヤバイ!!」

ヴィータがそう言った直後、闇の書が開き、一部のページから黒い何かが猛スピードで遊星に向けて突進していった。

アルフ

「遊星！こっちに来るよ！！」

遊星

「くっ！！」

黒い何かの突進を遊星はDホイールを操り回避するが、黒い何かは遊星に狙いを定めたらしくすぐに軌道を変え、遊星を追いかける。

遊星

「何！？」

追いつかれる訳には行かないと、スピードロードを展開させ、海鳴の上空を走る。

遊星が後ろを確認しようと、モニターを切り替えると、追ってきたはずの黒い何かは消えていた。

遊星

「消えた！？」

フェイト

「遊星、危ない！！」

フェイトが遊星に危険を知らせる。遊星が前の方へ向き直ると、さっきの黒い何かが人の形に変身し、遊星をDホイールごと吹き飛ば

す。

遊星

「ぐああっ!!」

Dホイールはビルの屋上に墜落し、遊星はDホイールから投げ出された。

人型となった黒い何かはそのまま遊星が墜落したビルに着地する。

遊星

「お前は一体、何者だ!？」

???

「我は闇の書の意志の欠片。不動遊星、貴様はここで消し去る。それが、闇の書完成の第一歩だ。」

闇の書の意志が左手を胸の前に掲げると、デュエルディスクのような器官が出現する。

遊星

「お前が何者であろうと、俺はここでやられる訳にはいかない!!」

遊星もDホイールからデュエルディスクを装着し、構える。

フェイト

「遊星!」

なのは

「遊星さん!」

なのはとフェイトが遊星を心配する。

遊星

「こいつの相手は俺がする！お前達はそこにいる騎士達の相手を頼む！俺もすぐに合流する！」

闇の書の意志

「ずいぶんとでかい口を叩くな。面白い。」

なのは

「わかりました！」

フェイト

「遊星も気を付けてね」

二人はそう言うと、ヴィータとザフィーラと戦闘を開始した。

闇の書の意志

「では、我らも……」

遊星

「（ここは速攻でケリを付ける！！）」

遊星&闇の書の意志

「「デュエル！！」」

第六話 新たな力の起動！対決！闇の書の決闘者！（後書き）

次回予告

遊星

「闇の書から現れた闇の書の意志。奴は俺の全ての戦術、戦略を読み取り、攻めて来る。そして、奴の戦術は…」

次回、遊戯王5D's Magical A's 『迫り来る自分！写し身のジャンクデッキ！』

ライディングデュエルアクセレーション！！」

第七話 迫り来る自分！写し身のジャンクデッキ！

遊星＆闇の書の意志（以下、闇の意志）

「デュエル！！」

遊星 LP4000

闇の意志 LP4000

遊星

「先攻は俺がもらう！！俺のターン！！ボルト・ヘッジホッグを準備表示で召喚！！」

ボルト・ヘッジホッグ DEF800

遊星

「さらにカードを一枚伏せ、ターンエンド！」

闇の意志

「私のターン、ドロ。スピード・ウォリアーを攻撃表示で召喚」

闇の意志の場に遊星のスピードウォリアーに比べて体の色が若干黒いスピード・ウォリアーが召喚される。

遊星

「スピード・ウォリアーだと！？」

闇の意志

「スピード・ウォリアーでボルト・ヘッジホッグを攻撃！！スピード・ウォリアーは召喚ターンのバトルフェイズのみ、攻撃力が倍となる！」

スピード・ウォリアーがボルト・ヘッジホッグを攻撃し、破壊する。

闇の意志

「カードを一枚伏せてターンエンド」

遊星

「（まさか…奴のデッキは…）俺のターン！」

遊星の引いたカードはジャンク・シンクロンだった。

遊星

「ジャンク・シンクロンを召喚！ジャンク・シンクロンの効果により、墓地のボルト・ヘッジホッグを守備表示で特殊召喚！！」

ジャンク・シンクロンがボルト・ヘッジホッグをフィールドに呼ぶ。

遊星

「レベル2のボルト・ヘッジホッグに、レベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング！！」

ジャンク・シンクロンが光の輪となり、ボルト・ヘッジホッグを包み込む。

遊星

「集いし星が、新たな力を呼び起こす！光さす道となれ！シンクロ召喚！出でよ、ジャンク・ウォリアー！！」

二体のモンスターが消え、ジャンク・ウォリアーが現れる。

遊星

「ジャンク・ウォリアーで、スピード・ウォリアーを攻撃！スクラップ・フィスト！」

ジャンク・ウォリアーがスピード・ウォリアーに向かっていくが…

闇の意志

「トラップ発動！『くず鉄のかかし』！」

遊星

「何！？」

スピード・ウォリアーの前にくず鉄のかかしが現れ、ジャンク・ウォリアーの攻撃を弾き返す。

闇の意志

「説明するまでもないな。『くず鉄のかかし』は貴様の愛用するカードの一枚だ」

遊星

「（やはり、奴のデッキは…）ターンエンド」

闇の意志

「私のターン！ジャンク・シンクロンを召喚！」

闇の意志の場に、先程のスピード・ウォリアーと同じように黒いジャンク・シンクロンが召喚される。

遊星

「ジャンク・シンクロンだと！？貴様、まさか…」

闇の意志

「ここまですれば流石に気付くだろう。そうだ、このデッキは以前貴様に干渉したときに闇の書に蓄積されたお前のデッキを元に構成された」

遊星

「あの時の…」

遊星は以前、自分の胸から、人の腕が現れた事を思い出した。

闇の意志

「レベル2のスピード・ウォリアーにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

ジャンク・シンクロンがスピード・ウォリアーを包み込み、消える。

闇の意志

「シンクロ召喚！現れる！ジャンク・ウォリアー！！」

遊星

「ジャンク・ウォリアー…」

闇の意志

「さらに装備魔法『ファイティング・スピリッツ』をジャンク・ウォリアーに装備。これにより、ジャンクウォリアーの攻撃力は、相手の場のモンスター一体に付き300ポイントアップする。」

ジャンクウォリアー A T K 2 3 0 0 2 6 0 0

闇の意志

「ジャンク・ウォリアーで、不動遊星のジャンク・ウォリアーを攻撃！」

遊星

「トラップ発動！『くず鉄のかかし』！」

遊星のジャンク・ウォリアーの前にくず鉄のかかしが現れ、闇の意志の操るジャンク・ウォリアーの攻撃を受け流す。

闇の意志

「カードを一枚伏せ、ターンエンド」

遊星

「俺のターン！（奴の場にはくず鉄のかかしが伏せられている。このままジャンク・ウォリアーの攻撃力が、奴のジャンク・ウォリアーを上回ったとしても、攻撃を無効にされてしまう…ならばっ！）俺はネジマキの見習い戦士を攻撃表示で召喚！」

ネジマキの見習い戦士 A T K 8 0 0

遊星

「レベル5のジャンクウォリアーにレベル2のネジマキの見習い戦士をチューニング！」

ネジマキの見習い戦士がジャンク・ウォリアーを包み込む。

遊星

「集いし雷が、新たな力を撃ち落とす！光指す道となれ！シンクロ召喚！光来せよライトニング・ウォリアー！！」

ライトニング・ウォリアー ATK 2400

遊星

「さらに、魔法カード『破壊の剣・ブレイクソード』をライトニング・ウォリアーに装備！これにより、装備モンスターの攻撃力は800ポイントアップし、装備モンスターが戦闘を行う場合、フィールド上の魔法、罠カードを一枚破壊する！」

ライトニングウォリアー ATK 2400 3200

闇の意志

「くっ！」

遊星

「ライトニング・ウォリアーで、ジャンク・ウォリアーを攻撃！そして、この瞬間、ブレイクソードの効果により、お前の場のくず鉄のかかしを破壊！行け！ライトニング・パニッシャー！！」

闇の意志

「だが、ファイティングスピリッツを装備したモンスターは、このカードを身代わりにする事で、戦闘での破壊を無効にする！」

遊星

「だが、戦闘ダメージは受けてもらう！」

闇の意志 LP 4000 3400

遊星

「カードを一枚伏せ、ターンエンド」

闇の意志

「私のターン！手札から、リバイバルチューニングを発動！自分フィールド上のシンクロモンスター1体を選択し、墓地から、そのシンクロモンスターの素材となったチューナーを1体特殊召喚する。私はジャンク・シンクロンを守備表示で召喚！」

闇の意志の場に、ジャンク・シンクロンが召喚される。

闇の意志

「そして、選択したシンクロモンスターは、特殊召喚したチューナーの攻撃力の半分の数値分、攻撃力がアップする。」

ジャンク・ウォリアー ATK 2300 2950

遊星

「（リバイバル・チューニングを使ったとしても、ジャンク・ウォリアーの攻撃力は2950。俺のライトニング・ウォリアーの攻撃力3200には及ばない。何をする気だ！？）」

闇の意志

「さらに、ボルト・ヘッジホッグを通常召喚。レベル2のボルトヘッジホッグにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング。シンクロ召喚！出でよ！カタパルト・ウォリアー！」

カタパルトウォリアー ATK 1000

遊星

「カタパルト・ウォリアーだと!?!」

闇の意志

「そうだ。このカードは、自分のターンに一度、「ジャンク」と名の付いたモンスターをリリースする事でそのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを与える。」

遊星

「くっ!」

闇の意志

「カタパルト・ウォリアーの効果で、ジャンク・ウォリアーを射出!ダイブ・カタパルト!」

ジャンク・ウォリアーの体が消え、ジャンク・ウォリアーの魂のような物が遊星に直撃する。

遊星

「ぐああっ!!」

遊星 LP 4000 1700

闇の意志

「カードを一枚伏せてターンエンド」

遊星

「俺のターン!!ライトニングウォリアーでカタパルトウォリアーを攻撃!そして、ブレイクソードの効果で...」

闇の意志

「この瞬間！トラップ発動！『ジャンク・ブレイク』！相手が攻撃してきた時、自分の墓地のモンスター一体をゲームから除外する事で、相手の攻撃モンスターを破壊する。」

闇の意志が墓地より、ジャンク・ウォリアーを除外したのでライトニング・ウォリアーが破壊される。

遊星

「だが、ブレイクソードの効果により、お前の場の伏せカードを破壊する！」

闇の意志

「破壊されたのは『リミッター・ブレイク』だ。このカードは墓地へ送られた時、手札、墓地、デッキからスピードウォリアーを一体特殊召喚できる」

スピードウォリアー DEF 400

遊星

「（次のターン！奴が攻撃力1700以上のジャンクモンスターを出せば、俺は負ける。いや、奴がそのモンスターを召喚し、場の全てのモンスターで総攻撃されても、俺は負ける）カードを一枚伏せ、ターンエンド」

闇の意志

「この私のターンで不動遊星！お前の命は尽きる。確実に……」

第七話 迫り来る自分！写し身のジャンクデッキ！（後書き）

次回予告

遊星

「なのはとフェイトは新たな力で騎士達を追いつめていく。そして俺も、奴には無い力でこの逆境を乗り越える！」

次回、遊戯王5D's Magical A's『反撃の一撃！スターダスト・オーバードライブ！』ライディングデュエルアクセラレーション！！

第八話 反撃の一撃！スターダスト・オーバードライブ！（前書き）

多分、次回は番外編やります。

第八話 反撃の一撃！スターダスト・オーバードライブ！

遊星 LP 1700

闇の意志 LP 3400

闇の意志

「私のターン！」

遊星

「（奴の一手によって俺の敗北が決まる。だが、俺の伏せカードには、くず鉄のかかしが伏せられている。奴の攻撃を一度なら防ぐ事ができる。）」

闇の意志

「私はニトロ・シンクロンを召喚」

遊星

「（ニトロウォリアーをシンクロ召喚するつもりか！？しかし…）」

闇の意志

「レベル5のカタパルト・ウォリアーにレベル2のニトロ・シンクロンをチューニング！シンクロ召喚！出でよ、ニトロ・ウォリアー！！」

ニトロ・ウォリアー ATK 2800

闇の意志

「ニトロ・シンクロンの効果によって、カードを一枚ドロー。スピ

ードウォリアーを攻撃表示に変更」

スピードウォリアーが攻撃態勢に入る。

闇の意志

「バトル！ニトロ・ウォリアーで、不動遊星にダイレクトアタック
！！」

ニトロ・ウォリアーが遊星に向かっていく。

遊星

「トラップ発動！くず鉄のかかし！」

ニトロウォリアーの攻撃はくず鉄のかかしによって阻まれる。

闇の意志

「続けて、スピード・ウォリアーで攻撃」

遊星

「スピード・ウォリアーの攻撃では、俺のライフをゼロにはできない！」

闇の意志

「LP1700のお前はニトロ・ウォリアーの攻撃の際に必ずくず鉄のかかしを使うと読んでいただからこそそのアタックだ」

遊星

「何！？」

スピードウォリアーが遊星に攻撃する。

遊星 LP1700 600

闇の意志

「この瞬間、速攻魔法『異次元攻撃』を発動。自分の攻撃力1000以下のモンスターが相手にダメージを与えた時、相手がこのターンに発動した魔法、罠カードを全てゲームより除外する」

遊星

「何!？」

遊星の場のくず鉄のかかしが異次元の彼方へと消える。

闇の意志

「このカードを発動した場合、相手はカードを一枚ドローできる。さあカードを引け」

遊星がカードをドローする。

遊星

「(スターダスト・オーバードライブ…スターダスト・ドラゴンとコンボで使うカード。まだ手は残されている。俺は俺のデッキを信じる!)」

闇の意志

「ターンエンド」

遊星

「俺のターン!ドロー!(来た!)」

遊星の頭の中では勝利への道は完成していた。

遊星

「手札より、魔法カード『調律』発動！自分のデッキから「シンクロン」名の付いたチューナーを一枚手札に加える。俺はこのカード、ハイパー・シンクロンを手札に加える。その後、デッキの上からカードを一枚墓地に送る」

墓地に送ったカードはスピード・ウォリアーだった。

遊星

「さらにトラップ発動！『エンジェル・リフト』！これにより、さつき墓地に送ったスピード・ウォリアーを攻撃表示で特殊召喚！」

スピード・ウォリアー ATK900

遊星

「そして、ハイパー・シンクロンを通常召喚！」

ハイパー・シンクロン ATK1600

遊星

「そして、墓地にあるボルト・ヘッジホッグは俺の場にチューナーがいる時、特殊召喚できる！」

ボルト・ヘッジホッグ ATK800

遊星

「レベル2のスピード・ウォリアーとボルト・ヘッジホッグに、レベル4のハイパー・シンクロンをチューニング！集いし願いが、新たに輝く星となる！光指す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ！ス

ターダスト・ドラゴン!!」

スターダスト・ドラゴン ATK2500

闇の意志

「スターダスト・ドラゴン…闇の書の力でもこれだけは復元できなかった…」

遊星

「ハイパー・シンクロンをシンクロ素材とした事で、スターダストの攻撃力は800ポイントアップする!!」

スターダスト・ドラゴン ATK2500 3300

遊星

「さらに手札から、『スターダスト・オーバードライブ』を発動! このターン、エクストラデッキからスターダスト・ドラゴンをシンクロ素材とするシンクロモンスターをゲームから除外する事で、スターダスト・ドラゴンの攻撃力は、そのシンクロモンスターの攻撃力分アップする!!」

闇の意志

「何だと!?!」

遊星

「俺はエクストラデッキからセイヴァー・スター・ドラゴンをゲームから除外する事でスターダストドラゴンの攻撃力2500に、セイヴァー・スター・ドラゴンの攻撃力3800を加算する!!」

スターダストドラゴン ATK3300 7100

闇の意志

「攻撃力7100だと!?!」

遊星

「スターダスト・ドラゴンで、ニトロ・ウォリアーに攻撃!! シュ
ーティングオーバーソニック!!」

スターダスト・ドラゴンが口から白銀の音波を出し、ニトロ・ウォ
リアーを破壊する。

闇の意志

「ぐあああつ!!!」

闇の意志 LP3400 0

闇の意志

「私の負けだ。だが、闇の書の糧とするだけの力は集まった…」

遊星

「何!?!」

遊星が聞き返した時、互いのデュエルディスクの墓地から、黒い何
かが飛び出し、闇の書があると思われる方へと飛んでいった。

遊星

「おい! 今の黒い波動は何だ!?! 答える!」

遊星が闇の意志に詰め寄る。

闇の意志

「このデュエルの記憶と、このデュエルで墓地に行ったモンスターの力の欠片が、闇の書の糧となったのだよ。闇の書は本来、魔力を糧に頁を増やすのだが、貴様というイレギュラーのせいでデュエルモンスターズの力も吸収できるようになった」

遊星

「俺というイレギュラーだと!？」

闇の意志

「私は所詮、闇の書の一部に過ぎない。だが、いずれ私より強い闇の意志が現れる。もう現れているかもしれないな…お前のお仲間は大丈夫かな？」

闇の意志はそう言い残し、姿を消した。

遊星

「くっ！まさかフェイト達に何か!？」

遊星はすぐにDホイルの『スピードロード』を展開させ、フェイト達が戦闘をしている所へと向かっていった。

一方、市街地の結界内では、なのは達とヴィータの対峙が続いていた。

遅れて結界内に来たシグナムは、フェイトと戦闘を継続していた。

前回と同じように、それぞれ一対一での戦闘を選択する一同。

ユーノとクロノは戦闘をなのはたちに任せ、それぞれ手分けして「闇の書」とその持ち主を搜索していた。

レイジングハートとバルディッシュはカートリッジロードを行い、強く溢れる魔力を得る。

なのははヴィータのラケーテンハンマーを今度は正面から受けきり、新射撃魔法アクセルシューターでヴィータとグラーフアイゼンを圧倒する。

クロスレンジで打撃と斬撃を撃ちかわしあうシグナムとフェイト。

バルディッシュはレヴァンティンの刃をしっかりと受けきり、新射撃魔法『プラズマランサー』、新近接形態『ハーケンフォーム』で、シグナムに応戦する。

シグナムのレヴァンティンの中距離形態、鞭状連結刃『シュランゲフォルム』にもひるむことなく互角の戦いを繰り広げるフェイトに、素直な賛辞を送るシグナム。

互いの強さを認め合いつつも、勝負を続ける二人。

そして、その戦場に向かう遊星。

黒い影はすぐそばまで迫っていた。

第八話 反撃の一撃！スターダスト・オーバードライブ！（後書き）

次回予告

遊星

「フェイト達に合流した俺は騎士達を追いつめていくが、謎の仮面の男の奇襲を受ける。」

次回、遊戯王5D's Magical A's 戦いの後に
ライディングデュエルアクセレーション！！」

第九話 戦いの後に（前書き）

みなさんお久しぶりです！

すごい地震がありましたね。みなさんは大丈夫ですか？

福島にいる俺の友人の安否が気になってまして…

番外編は、銭湯の話は個人的に遊星と絡ませる要素があまり無かったので変えました。

それでは、どうぞ！！

第九話 戦いの後に

遊星は既になのはとフェイトが戦闘をしているのが肉眼で確認できるほど近くに来ていた。

しかし遊星はフェイト達とは違う別の物を探していた。

遊星

「（あの時俺のカードの力のような物がどこかへ飛んでいった…だが、一体どこに…）」

遊星がそう思い、海鳴のビルの間を通り抜けようとしたとき、

????

「搜索指定ロストログアの所持、使用の疑いで貴女を逮捕します」

聞き覚えのある少年の声。遊星はそれが誰なのかすぐにわかった。

遊星

「（クロノか。それと、あいつは…！?）」

緑を基調とした騎士甲冑を纏った金髪の女性。

遊星

「（あいつが闇の書を持っている可能性は十分にある…!）」

遊星のSPCは7。戦闘を行うには十分だった。

クロノ

「抵抗しなければ弁護の機会が貴女にはある。同意するなら武装の解除を……」

緑色の騎士甲冑を纏った闇の書の騎士の一人、シャルに黒い杖型のデバイス・S2Uを突きつけたのはクロノ・ハラウンだった。

シャルが動くような様子はなかった。

武装さえ解除してくればこれで終わる。

クロノとしても無駄な争いは好まない。

彼が戦うのはあくまで『戦わなければならない』ときのみだ。

その時、自分の斜め後ろ辺りから、足音のようなものが聞こえた。

シャル

「え？」

クロノ

「!？」

シャルが声を上げた直後、クロノは音の発生源に顔を向けた直後に何者かがクロノとの間合いを一気に詰め、蹴りを入れる。

腹部に衝撃を受けて受身をとることも出来ずにクロノは後方のビルオブフェンスに叩きつけられた。

クロノ

「げほっ……ぐっ……」

クロノは煙を立てている腹部を押さえながら、自分にダメージを与えた相手の顔を拝もうとする。

クロノ

「仲……間……？」

遊星

「（な、何なんだ？あいつは……）」

遊星はクロノの腹部に強烈な一撃を食らわせた相手を睨みつけていた。

相手の性別はパツと見では男だろう。

紫色の髪に、顔を隠すような仮面をつけており、白をメインにしてポイントカラーが青色の軍服じみたような衣装。

その外観からして『闇の書の意志』でないことだけはわかる。

魔導師なのか、それとも別世界から来た住人なのかまでは判別が来ない。

仮面の戦士はシャルと何かを話していたが、何を話しているのかは聞き取れなかった。

遊星

「お前は一体……！？」

遊星がDホイールをクロノ達のいるビルに着地させて問う。

シャル

「貴方は？」

シャルは自分を助けてくれた仮面の戦士に対して、危機を救ってくれた感謝と同時に疑惑を持った。

管理局の者に手をかけるのだから、少なくとも敵とは思えない。

どちらにしても、情報が少なすぎるので有効な案は浮かばないというのが本音だが。

仮面の戦士

「使え」

仮面の戦士はシャルに短く告げる。

仮面の騎士

「『闇の書』の力を使って結界を破壊しろ。それと、闇の書に吸収されている不動遊星の記憶から決闘者を一体呼び出せ」

仮面の戦士が『闇の書』の使用を促す。

シャル

「でも、アレは……」

シャルが『闇の書』の使用を躊躇する。

仮面の戦士

「頁はまた集めればいい。今はお前達が生き残る事が先決だ」

それを聞いたシャルは『闇の書』を開いた。

仮面の戦士は妨害する事必至であるクロノと戦闘を開始していた。

クロノ

「何者だ！？連中の仲間か！？」

この状況ならそう思っただけの事を訊ねていた。

仮面の戦士

「……」

仮面の戦士は沈黙を保っている。

クロノ

「答えるお！！」

クロノはS2Uを構えた。

一方、シャルは足元に緑色の三角形型の魔法陣を展開した。

シャル

「『闇の書』よ。守護騎士シャルが命じます。眼下の敵を打ち砕く力と戦う戦士を今ここに！」

開かれた『闇の書』から紫色の雷が発生する。

天に向かっていき、夜空の星を覆う暗雲が生じる。

紫色の雷が今か今かというように空でバリバリと音をけたたましく鳴らして光っている。

その間に、仮面の戦士がクロノの隙を狙って蹴りを繰り出した。

クロノは避ける間もなく、下へと落下していくが地面スレスレで踏ん張っていた。

上空に浮かぶ黒い珠の周囲に紫の雷が纏わりついている。

シャマル

「撃つて！破壊の雷！！」

シャマルが叫ぶと同時に『闇の書』の紋章が輝きだし、紫の雷の中から、遊星がさっき戦った黒い人形が姿を現す。

同時に黒い珠が充填していた紫色の雷を惜しみなく結界に向かって落ちていった。

遊星

「お前は……！？」

闇の意志

「貴様を行かせるわけにはいかない！！」

闇の意志がモンスターを召喚する。

闇の意志

「行け！幻獣王ガゼル！！」

茶色の獣が遊星に向かって突進していく。

遊星

「くっ！！」

遊星は慌ててDホイールを操り、ガゼルの攻撃を回避する。

遊星

「あのカードは遊戯さんの……？やはり俺の記憶から……」

遊星は伝説の決闘者『武藤遊戯』と『遊城十代』と共にパラドックスと戦った事を思い出していた。

遊星

「マックス・ウォリアーを召喚！！」

遊星がマックス・ウォリアーが召喚され、ガゼルに向かっていく。

ガゼルが爪で攻撃しようとするが、マックスウォリアーの一撃によりガゼルは破壊された。

ガゼルが破壊されると同時に、闇の意志と闇の書の騎士、そして、仮面の戦士は消えていた。

遊星

「逃げられたか。」

フェイト

「遊星！」

なのは

「大丈夫ですか!？」

遊星

「フェイト、なのは、お前達は無事だったか。」

フェイト

「うん。何とかね…」

クロノ

「僕たちも撤収するでしょう。」

こうして遊星達も『アースラ』へと帰還した。

〈番外編〉 遊星とフェイトのデート(?)

フェイト

「遊星」

フェイトがマンションの駐車場でDホイールの整備をしていた遊星に声をかける。

遊星

「フェイトか。どうした？」

フェイト

「うん。いきなりで悪いんだけど、今日の午後って何か予定ある？」

遊星

「いや、特に無いが……」

フェイト

「ホント？じゃ……じゃあ……午後……私と一緒に……お出掛け……しない？」

フェイトが顔を真っ赤にして言う。

遊星

「ああ、構わないが。」

フェイト

「じゃ……じゃあ、また……後で……」

そう言い残してフェイトは部屋へと戻っていった。

フェイト

「やった！……うまく誘えた！……」

部屋に戻るためのエレベーターの中でフェイトは一人ガッツポーズを取る。

それは昨日の昼休み、フェイトがなのは、アリサ、すずかと昼食を食べているときの会話だった。

アリサ

「そういえばフェイトってさ、遊星さんの事好きなんですよ?」

フェイト

「え…」

突然の問いに絶句するフェイト。

なのは

「えゝ!? そうなの!？」

なのはが驚き身を乗り出す。

アリサ

「そうなのつて。アンタ、フェイトとほとんど一緒にいるくせに気付かなかったの?」

なのは

「全然」

すずか

「あはは…でもなのはちゃんだし」

なのは

「えゝそれどういう意味?」

なのはが不満そうな声をあげる。

アリサ

「まあ、それは置いといて、結局の所どうなの? フェイト」

フェイト

「どう…なんだろう？好き…なのかな…？」

アリサ

「だってフェイト、遊星さんのこと話す時すごく嬉しそうだしさ。好きなんじゃないかって思ったんだけど」

フェイト

「まあ、一緒にいてすごくドキドキする事が結構あるし…やっぱりこれが好きってことなのかな？」

そう言いながらフェイトは耳まで真っ赤になる。

アリサ

「完璧に惚れてるじゃない！もうこれは恋ね！うん、完璧な恋よ！」

なのは

「アリサちゃん、声大きいよ」

アリサ

「ああ、ゴメンゴメン。でも、もうこれは好きってことをアピールするしか無いわね！」

すずか

「じゃあ明日お休みだし、遊星さんと一緒にお出掛けするのはどう？」

アリサ

「あつ、それいいわね!」

フェイト

「え……ちょ……」

アリサ

「まずはデートに誘う所からね」

こうして、フェイトはアリサ達と一緒に遊星とのデートプランを考えたのだった。

そして午後。

二人はマンションの入り口で待ち合わせをしていた。

フェイト

「お待たせ、遊星」

遊星

「ああ。それで、どこに行くんだ?」

フェイト

「ああ、うん…まずは街のへ行って色々見て回りたいなと思うんだけど…」

遊星

「わかった。ここからなら歩いていける。行くか」

フェイト

「う…うん」

街まで歩く二人だが、特に会話は無かった。

フェイト

「（うう…どうしよう。すごく気まずいんだけど…）」

無理だったらしい。

遊星

「フェイト」

フェイト

「はっ…はひっ…！」

突然の呼びかけにフェイトは噤んでしまった。

フェイト

「ごめん遊星…何？」

胸に手を当てながらフェイトが聞き返す。

遊星

「いや…怪我はもう平気なのかと思ってな」

フェイト

「あ…ああ…うん！大丈夫だよ！わ、私の怪我は割と軽かったしね…」

遊星

「そつか…無理はするなよ。」

フェイト

「ありがとう。遊星」

街についてからは服屋やアクセサリーショップを見て回り、翠屋でお茶をするなど、考えていた通りに進んでいた。

夕日が沈みかけ、帰宅する途中、フェイトが口を開く。

フェイト

「遊星…これ、ありがとう。大事にするね」

フェイトの胸には遊星がフェイトにプレゼントした天使の羽がモチーフとなったペンダントが光っていた。

遊星

「いや、気にするな」

遊星は相変わらずぶっきらぼうだったが、表情は笑っているように見えた。

フェイト

「今日は…楽しかったよ。ありがとう」

遊星

「大した事はできなかったが、俺も楽しかった。機会があればまた行こう」

その一言でフェイトはまたドキツとする。

フェイト

「（ゆ…遊星…それは狙って言ってるの…かな？ああ、まともに遊星の顔を見れないよ……）」

帰宅してからフェイトは遊星とまともに会話するどころか、顔を合わせる事もできなかった。

その様子を見ていたリンディ、エイミィ、アルフは遊星を見てにやにやしていた。

遊星

「ど…どうしたんだ？俺が何かおかしい事をしたのか？」

と、女性陣に聞いても

リンディ

「だってね…」

エイミィ

「そうそう」

アルフ

「アンタも罪な男だねえ」

と、まともに答えてくれなかった。

遊星

「クロノ、帰ってきてから、フェイトが俺を避けている気がするんだが、何か心当たりは無いか？」

クロノ

「あなたの知らない事を、僕が知っている訳が無いだろう」

その日遊星はフェイトの態度が気になって眠れなかったとか何とか

……

第九話 戦いの後に（後書き）

次回予告

遊星

「闇の書とその主を守るためにのみ存在する、魔法技術で生成された疑似人格。

主の命を受けて行動する、ただそれだけのためのプログラムに過ぎないはずだとクロノは言うが、本当にそうなのか…そして、新たな影が新たなるステージへと俺たちを誘う。

次回、遊戯王5D's Magical A's『新たなるステージ』
ライディングデュエルアクセラレーション!!」

第十話 新たなるステージ（前書き）

お久しぶりです。

しばらく間が空いてしまいましたが、何とか更新できました。

それと、感想の返信ができず申し訳ありません！

できる限り、返信していきたいと思うので、思った事、間違いの指摘、今後の要望何でもいいので書いてください。

今回の更新の遅れは、俺が純粋にA・Sのストーリーの内容を忘れてしまったのです。

今、DVDを見返して思いついた事をまとめたら一話分だけ更新できたという状態です。

少し短いですが、温かい目で読んでください。

では、どうぞ。

第十話 新たなるステージ

遊星達は戦闘後、ハラウン家に戻っていた。

エイミー

「カートリッジシステムは扱いが難しいの。本来ならその子達みたいに繊細なインテリジェントデバイスに組み込むようなモノじゃないんだけどね。本体はその危険も大きいし危ないって言ったんだけど……、その子達がどうしてもって……」

なのはとフェイトはエイミーの講義を真剣に聞いている。

エイミー

「よっぽど悔しかったんだね。自分をご主人様を守ってあげられなかった事とか、ご主人様の信頼に応え切れなかった事とか……」

エイミーはデバイスの気持ちを二人に告げた。

なのはとフェイトは掌で収まっているデバイスを見る。

なのは

「ありがとう。レイジングハート」

なのはが感極まった表情で礼を言う。

レイジングハート

『オーライ』

待機状態のレイジングハート・エクセリオンは自身を光らせて答え

た。

フェイト

「バルディッシュ……」

フェイトもなものは同様、感極まった表情だ。

バルディッシュ

『イエッサー』

待機状態のバルディッシュ・アサルトが短く答えた。

遊星

「モードはそれぞれ三つずつだ。レイジングハートは中距離射撃の『アクセル』と砲撃の『バスター』、フルドライブの『エクセリオンモード』。バルディッシュは汎用の『アサルト』、鎌の『ハーケン』、フルドライブは『ザンバーフォーム』。破損の危険があるからフルドライブはなるべく使わないようにする事だ。」

エイミー

「特になのはちゃん」

二人にデバイスの説明を一通り終えた遊星の後にエイミーが急になのはを名指しした。

なのは

「あ、はい？」

急に名指しされたので、どこか緊張感のない声をなのはは出してしまっ。

エイミィ

「フレーム強化をするまで、『エクセリオンモード』は起動させないでね」

なのは

「はい」

エイミィの忠告を聞き入れて、なのはは真剣な表情でレイジングハート・エクセリオンを凝視した。

エイミィ

「まあやったのは私じゃないんだけどね」

と、エイミィが付け加える。

なのは

「え？」

フェイト

「それってどういつ…」

エイミィ

「レイジングハートとバルディッシュの強化をしたのは遊星君と私の後輩のマリーって子がほとんどやってるからね」

なのは

「ええ？」

フェイト

「最近、よく出掛けてるとは思ってたけど…」

エイミィ

「いや、遊星君、手際が良いから、修理から改良までが速い速い」

エイミィが自分の事のように胸を張って答える。

遊星

「慣れない作業だったから手こずったが、まあうまくいった良かったよ」

遊星が相変わらずぶっきらぼうな返事をする。

クロノ

「さて、闇の書の事なんだが…」

クロノが声をあげる。

リンディ

「これを見る限り、守護騎士達が闇の書の完成を目指してるのは間違いないわね」

クロノ

「腑に落ちませんね…彼等はまるで自分の意思で『闇の書』の完成を目指しているようにも感じますし……」

アルフ

「ん？それって何かおかしいの？」

代表するかのように切り出したのは窓際で腕組をしてたアルフだっ

た。

アルフ

「『闇の書』つてのも要はジュエルシードみたくすつごい力が欲しい人が集めるモンなんでしょ？ だったらその力を欲しい人のためにあいつ等が頑張るつてのも、おかしくないと思うんだけど」

遊星

「それに、今のクロノの言い方だと、奴らが自分たちの意志で動いている事がおかしいという意味になる」

クロノの隣で聞いていた遊星がアルフの言葉を繋げる。

クロノ

「まず第一に、『闇の書』の力はジュエルシードのように自由に制御の利くものじゃないんだ」

リンディ

「完成前も完成後も純粋な破壊にしか使えない。少なくともそれ以外に使われたという記録は一度もないわ」

リンディが続ける。

アルフ

「ああ、そっかあ」

アルフは納得した。

クロノ

「それからもう一つ。あの騎士達、『闇の書』の守護者の性質だ。

彼等は人間でも使い魔でもない」

遊星

「どういう意味だ？」

遊星が全員を代表して聞く。

クロノ

「『闇の書』に合わせて魔法技術で作られた擬似人格。主の命令を受けて行動するただそれだけのプログラムにすぎないんだが……」

遊星

「主の命令で動くプログラムか……」

遊星はそう呟くと再び寡黙になった。

フェイト

「あの……使い魔でも人間でもない擬似生命っていうと、わたしみたいないない……」

両手を胸元で合わせて、その表情は不安を表してフェイトは口を開いた。

遊星

「いや、それは違う」

全員がフェイトの言葉を否定しようとする前に、遊星が静かに、しかしはつきりと口を開く。

遊星

「お前の生まれ方は他の人とは違うが、ちゃんとした命を貰って生きているんだ。お前は紛れも無く人間だ」

クロノ

「変な事を言うもんじゃないぞ」

と、クロノも続ける。

フェイト

「えと…ごめんなさい……」

フェイトは俯きながら謝罪する。

エイミィ

「じゃ…じゃあさ、モニターで見てみようか！」

エイミィが暗くなった空気を壊すように声を上げる。

室内全体が暗くなり、宙にモニターが出現する。

『闇の書』を中心に上部にヴィータ、ザフィーラ（人型）が映っており、下部にはシグナム、シャマルが映っていた。

なのはとフェイト、遊星はソファに座り（フェイトは遊星の隣）、クロノが逆に立つ。

クロノ

「守護者達は『闇の書』に内蔵されたプログラムが人の形をとったものだ。『闇の書』は転生と再生を繰り返すけど、この四人はずっと『闇の書』とともに様々な主の元へと渡り歩いている」

エイミイがなのは、フェイト、ユーノ、遊星に聞かせるようにして顔を向ける。

エイミイ

「意思疎通のための会話能力は過去の事件でも確認されてるんだけどね。感情を見せた例ってのは今までに一度もないの」

過去の事件でヴォルケンリッターに関する資料に目を通している时空管理局員が戸惑うには十分なものだといえるだろう。

リンディ

「『闇の書』の蒐集と主の護衛。この四人の役目はそれだけですもののね……」

リンディ・ハラオウンがヴォルケンリッターの存在意義を過去の事件から大まかに集約させた。

なのは

「でも、あの帽子の子……ヴィータちゃんは怒ったり悲しんだりしてました。」

フェイト

「シグナムからハッキリと人格を感じました。なすべき事がある。仲間と主のためだって……」

クロノ

「主のため……か……」

クロノが思い詰めた様な表情をする。

遊星

「それと、もう一つ」

遊星が立ち上がり、モニターを操作する。

モニターに映ったのは遊星が戦った黒い人形の映像だった。

クロノ

「これは…」

クロノが映像に映っている人形を見て言葉を失う。

遊星

「以前、俺の力が『闇の書』に取り込まれた時に俺の記憶も一緒に取り込まれたんだろ。その記憶から、決闘者を造り出す。こんな所だろう」

エイミィ

「遊星君は戦ったんでしょ？」

遊星

「ああ。俺と同じ戦術を使ってきた。引きによっては負けていたかもしれない」

クロノ

「あなたがそこまで言うとはな…」

遊星

「それと、新たな決闘者が一人作り出され、野放しになっている。奴も守護騎士と共に頁を収集しているはずだ。」

リンディ

「まあそれについては捜査に当たっている局員からの情報を待ちましようか」

リンディは室内の空気の変化を見抜いていたらしく、空気が重くなる前に解消した。

クロノ

「転移頻度から見ても主がこの付近にいるのは確かですし、案外主が先に捕まるかもしれません」

クロノはもしかしたらの仮定を口に出す。

アルフ

「ああ、そりゃあわかりやすくていいねえ」

エイミィ

「だねえ。『闇の書』の完成前なら持ち主も普通の魔導師だろうし……」

アルフとエイミィが明るいノリで言う。なのはとフェイトとユーノ、クロノも釣られて笑みを浮かべていた。

遊星を除いては。

遊星

「（あの決闘者のモンスター『幻獣王ガゼル』あのデッキがあの人の物だとしたら……強敵だな）」

遊星は見抜いていた。

あのデッキが伝説の決闘者『武藤遊戯』の物であるという事に。

第十話 新たなるステージ（後書き）

次回予告

遊星

「ユーノは無限書庫で『闇の書』の事を調べ、なのはとフェイトと俺は束の間の平和を楽しんでいた。そんな中、エマージェンシーコールが鳴り響き、砂漠に守護騎士達が蒐集の為に現れる。」

次回、遊戯王5D's Magical As 対決！ジャンク・ウオリアーVSブラック・マジシャン！

ライディングデュエルアクセレーション！！

第十一話 対決！ジャンク・ウォリアーVSブラック・マジシャン！（前書き）

思ったより早く書く事ができたので更新します！！

感想を書いてくれた皆さん、本当にありがとうございます！！

第十一話 対決！ジャンク・ウォリアーVSブラック・マジシャン！

転入から数日：フェイトはもうすっかり学校にとけ込んでいた。

休み時間に、フェイトの携帯電話の機種選びをするのはたち一同。
放課後にリンディ同行で量販店に行き、フェイトも携帯を持つようになる。

リンディ宅のフェイトの部屋で、談笑するのはとフェイト。

遊星はデッキ、及びDホイール各部の調整に明け暮れていた。

エイミー

「たっだいまー！！」

エイミーが買い出しを終えて帰ってきた。

エイミー

「艦長、もう本局へ出掛けちゃった？」

エイミーが買ってきたカボチャをフェイトに渡しながら聞く。

フェイト

「うん。『アースラ』の武装装備が終わったから、試験航行だってアレックス達と」

エイミー

「武装つていうと、『アルカンシエル』か…あんな物騒な物、最後まで使わなくて済むといいんだけど…」

なのは

「クロノ君もいないですし…戻るまでは、エイミーさんが指揮代行だそうですね？」

アルフ

「責任重大」

子犬フォームのアルフがちやかすように言う。

遊星

「フツ」

ソファでデュエルディスクの整備をしていた遊星が小さく笑う。

エイミー

「それもまた物騒な」

フェイトに手渡したカボチャを撫でながらエイミーがやれやれと言った様子で言った。

エイミー

「とは言え、早々非常事態なんて、起こるわけが……」

とエイミーがカボチャを手に持って歩き出そうとした時、エマージエンシーコールが鳴り響いた。

エイミー

「あ……」

と同時にカボチャは落としてしまった。

砂漠世界に蒐集に訪れたシグナムとザフィーラの姿を、サーチャーが捕らえたのだった。

結界を張れる魔導士が到着するまで最速でも四十五分だった。

フェイト

「エイミィ。私が行く」

アルフ

「私もだ」

フェイトとアルフが出撃すると志願する。

遊星

「っ……！？」

モニターに映っているシグナムとザフィーラの隣に黒い人形がいるのが見えたのだ。

遊星

「エイミィ。俺も行く。奴と決着を付ける」

エイミィ

「あの黒い人形の事？」

遊星

「ああ」

エイミィ

「わかった。お願いね」

フェイト

「うん！」

アルフ

「おう！」

遊星達はシグナム達がいる砂漠世界へと向かっていった。

砂漠世界では、負傷を負いながらも砂竜を倒したシグナムがひと息ついたところだった。

シグナム

「はぁ……はぁ……ヴィータが手こずるわけだ……」

闇の意志

「シグナム、大丈夫か？」

黒い人形、闇の意志がシグナムの安否を気遣う。

シグナム

「ああ。何とかな……」

カートリッジを装填しようと気を緩めた瞬間、砂中から現れた触手に捕らえられてしまう。

闇の意志

「シグナム!!」

闇の意志がシグナムを助けようとするが、触手に邪魔をされ思うように助けられなかった。

拘束されて苦しむシグナムをそこに現れたフェイトが広域魔法・サnderブレイドで砂竜を破壊し、シグナムを助ける。

闇の意志

「あいつは……!？」

フェイトの姿を確認した闇の意志がフェイトの隣にいる遊星を見て動きを止める。

闇の意志

「不動遊星…… お前も来ていたか。シグナム、金髪の小娘の相手は任せる。俺は奴と決着をつける」

シグナム

「あ…ああ。わかった……」

闇の意志は遊星達の元へ向かっていった。

エイミー

『ダメだよフェイトちゃん！！助けちゃ……』

成り行きとはいえ、捕獲対象を助けてしまったフェイトをエイミイが注意する。

フェイト

「あ……えっと……ごめんなさい。つい……」

フェイトが謝罪していると、黒い人形がフェイト達の元へ向かってきた。

フェイト

「あなたは！？」

黒い人形こと、闇の意志を見てフェイトが身構える。

闇の意志

「やはりここに来たか。不動遊星」

闇の意志はフェイトを無視して遊星に語りかける。

闇の意志

「捕獲対象を助けるとは、面白い事をするな」

闇の意志が嘲笑う。

遊星

「また捕らえればいいだけだ。それより、俺と戦いに来たんじゃないのか？」

闇の意志

「面白い！！貴様に伝説を見せてやる！！」

黒い人形の姿をしていた闇の意志が姿を変化させる。

その姿はDホイールと人が合体した様な姿に変わっていた。

遊星

「ライディングデュエルをするつもりか……」

闇の意志

「そうだ。ただのデュエルではつまらないだろ？このデュエルに負けた者は魂は闇の書の糧とされるといふのは面白いとは思わないか？」

フェイト

「そ…そんなっ！？」

遊星

「いいだろう！お前の挑戦、受けて立つー！！」

フェイト

「遊星！」

遊星

「心配するな。俺は負けない。お前は、シグナムを捕らえるんだ」

遊星がフェイトの頭を撫でながら言う。

フェイト

「うん。気を付けてね」

フェイトはそう言うと、シグナムの方へと向かって行った。

闇の意志

「フフ……おかしい約束をする」

遊星

「何が言いたい……」

闇の意志

「貴様がこの俺に勝つ事なんて不可能だって事だ」

遊星

「（こいつ、前よりも人格がしっかりしている……）」

闇の意志

「フィールド魔法スピードワールド2セット!!」

遊星&闇の意志

「『ライディングデュエルアクセラレーション!!』」

遊星 LP4000

闇の意志 LP4000

遊星

「俺のターン!!ボルト・ヘッジホッグを守備表示で召喚!!さら
にカードを一枚伏せ、ターンエンド」

闇の意志

「俺のターン!!」

遊星&闇の意志 S P C 0 1

闇の意志

「手札から『S p - オーバーブースト』を発動!!このターン、自分のS P C を4つ増やす!」

闇の意志 S P C 1 5

闇の意志

「さらに、手札から『S p - スピード・フュージョン』を発動!S P C が4つ以上ある時、手札がフィールドから融合素材を墓地に送り、融合モンスターを召喚できる!」

遊星

「何!?後攻でいきなり融合召喚だと!?!」

闇の意志

「手札の幻獣王ガゼルとバフォメットを融合し、有翼幻獣キマイラ召喚!!」

有翼幻獣キマイラ A T K 2 1 0 0

闇の意志

「バトル!!キマイラで、ボルト・ヘッジホッグに攻撃!!」

キマイラがボルト・ヘッジホッグに向かっていく。

闇の意志

「キマイラインパクトダッシュ!!」

キマイラの一撃により、ボルト・ヘッジホッグは破壊された。

闇の意志

「カードを一枚伏せて、このターンのエンドフェイズ、『オーバーブースト』の効果で俺のSPCは1になる」

闇の意志 S P C 5 1

遊星

「俺のターン!!」

遊星&闇の意志 S P C 1 2

遊星

「ジャンク・シンクロンを召喚!」

ジャンク・シンクロン A T K 1 3 0 0

遊星

「ジャンク・シンクロンの効果で、墓地のボルト・ヘッジホッグを特殊召喚!」

闇の意志

「お決まりのシンクロ召喚か……」

遊星

「レベル2のボルト・ヘッジホッグに、レベル3のジャンク・シン

クロンをチューニング!!」

ジャンク・シンクロンが緑の輪となり、ボルト・ヘッジホッグを包み込む。

遊星

「集いし星が新たな力を呼び起こす! 光指す道となれ! シンクロ召喚! 出でよ! ジャンク・ウォリアー!!」

ジャンク・ウォリアー ATK 2300

遊星

「ジャンク・ウォリアーで有翼幻獣キマイラに攻撃! スクラップ・フィスト!!」

ジャンク・ウォリアーが右手でキマイラを粉碎する。

闇の意志 LP 4000 3800

闇の意志

「くっ! だが、キマイラが破壊された時、墓地に眠る、幻獣王ガゼルがバフォメット、どちらかを特殊召喚できる! 蘇れ! バフォメット!!」

バフォメット DEF 1800

遊星

「ターンエンド」

闇の意志

「俺のターン!!」

遊星&闇の意志 S P C 2 3

闇の意志

「手札から『S p・エンジェル・バトン』を発動! S P C が2つ以上ある時、デッキからカードを2枚ドローし、その後、手札1枚を墓地に送る。カードを1枚伏せてターンエンド」

遊星

「俺のターン!!」

遊星&闇の意志 S P C 3 4

遊星

「(今、奴の場には守備モンスターが一体のみ。手札にあるジャンク・ブレイダーを召喚し、ジャンク・ウォリアーで守備モンスターを破壊。ジャンク・ブレイダーでダイレクトアタックをすれば、奴のLPを一気に削る事ができる!!) ジャンク・ブレイダーを攻撃表示で召喚!!」

ジャンク・ブレイダー A T K 1 8 0 0

闇の意志

「この瞬間、リバーストラップ発動!!」

遊星

「何!?!」

闇の意志

「『黒魔族復活の棺』を発動！こいつは相手がモンスターを召喚した時に、そのモンスターと、自分の場のモンスター一体をリリースする事で、墓地の黒魔術師を復活させる事ができる！！」

遊星

「馬鹿な！お前の墓地のモンスターは、ガゼルとキマイラのみのはずだ！！」

闇の意志

「あつたのさ。俺が墓地に黒魔術師のカードを捨てる時がな」

遊星

「……っ！？」

闇の意志

『手札から『S p -エンジェル・バトン』を発動！S P Cが2つ以上ある時、デッキからカードを2枚ドロし、その後、手札1枚を墓地に送る。カードを1枚伏せてターンエンド』

遊星

「さっきのターンの、『エンジェル・バトン』の時か……」

漆黒の棺がジャンク・ブレイダーとバフォメットを吸収し、蓋を閉じる。

闇の意志

「出でよ！ブラック・マジシャン！！」

再び棺が開き中から現れたのは、伝説の決闘者『武藤遊戯』の相棒のブラック・マジシャンだった。

ブラック・マジシャン ATK2500

遊星

「ブラック・マジシャン……」

闇の意志

「遊星……お前を闇の書の糧にしてやる。このブラック・マジシャンでなあー!!」

第十一話 対決！ジャンク・ウォリアーVSブラック・マジシャン！（後書き）

次回予告

遊星

「ついにブラックマジシャンを召喚されてしまった。奴の戦術は常に俺の戦術の上を行き、俺は次第に追いつめられていく……」

次回、遊戯王5D's Magical A's「迫りくる伝説！反撃のシンクロ召喚！」

ライディングデュエルアクセレーション!!」

第十二話 迫り来る伝説！反撃のシンクロ召喚！（前書き）

遊戯デッキでライディングデュエルすると、『Sp』しか使えないから原作コンボが使えないという事に今気付いたorz

感想ありがとうございます！！

これからもがんばっていこうと思います！！

第十二話 迫り来る伝説！反撃のシンクロ召喚！

遊星 L P 4 0 0 0 S P C 4

闇の意志 L P 3 8 0 0 S P C 4

遊星

「（ついにブラック・マジシャンを召喚してしまった……だが、まだ手はある。）カードを1枚伏せ、ターンエンド」

闇の意志

「俺のターン!!」

遊星&闇の意志 S P C 4 5

闇の意志

「磁石の戦士 を攻撃表示で召喚！」

磁石の戦士 A T K 1 4 0 0

闇の意志

「ブラック・マジシャンで、ジャンク・ウォリアーを攻撃!! ブラックマジック!!」

ブラック・マジシャンが杖を振り回し、ジャンク・ウォリアーに向けて、杖の先端から、黒い波動が出現し、ジャンク・ウォリアーに向かっていく。

遊星

「トラップ発動！！くず鉄のかかし」！！」

遊星の場にくず鉄のかかしが現れ、ブラック・マジシャンの攻撃を防ぐ。

闇の意志

「カードを2枚伏せ、ターンエンド」

遊星

「俺のターン！」

遊星&闇の意志 S P C 5 6

遊星

「シールド・ウォリアーを守備表示で召喚！」

シールド・ウォリアー D E F 1 6 0 0

遊星

「さらに、『S p - スピード・エナジー』を発動！このカードは、自分のS P Cが2つ以上ある時に、発動する事ができる。このターンのエンドフェイズまで、自分のモンスター1体の攻撃力は、俺のS P Cの数×200ポイントアップする！俺はジャンク・ウォリアーを選択する。俺のS P Cは6！よって攻撃力は1200ポイントアップする！！」

ジャンク・ウォリアー A T K 2 3 0 0 3 5 0 0

闇の意志

「攻撃力3500だと！？」

遊星

「ジャンク・ウォリアーで、ブラック・マジシャンを攻撃！スクラップフィスト！！」

ジャンク・ウォリアーがブラック・マジシャンに右拳を突き出しながら、突進する。

闇の意志

「トラップ発動！！『聖なるバリア・ミラーフォース』！！相手モンスターの攻撃宣言時、相手の攻撃表示モンスターを全て破壊する！！」

遊星

「何！？」

ジャンク・ウォリアーの攻撃はミラーフォースに防がれ、ジャンク・ウォリアーは破壊されてしまった。

遊星

「ターンエンド！！」

闇の意志

「俺のターン！」

遊星&闇の意志 S P C 6 7

闇の意志

「手札より『S p -ブラック・フォース』を発動！こいつはS P Cが5個以上ある時、自分の場の魔法使い族モンスター数だけ、相手

の場のカードを破壊する!!」

遊星

「奴の場の魔法使い族モンスターは1体……」

闇の意志

「俺はお前の場のくず鉄のかかしを破壊する!!」

ブラック・マジシャンが杖を振りかざし、そこから現れた黒の波動を受けて、くず鉄のかかしが破壊される。

闇の意志

「これで心置きなく攻撃できる。ブラック・マジシャン、でシールド・ウォリアーを攻撃! ブラック・マジック!!」

ブラック・マジシャンがシールド・ウォリアーを粉碎する。

闇の意志

「さらにこの瞬間、トラップ発動! 『マジシャンズサークル』! これいつは、魔法使い族モンスターの攻撃宣言時に発動できる。お互いにデッキから、攻撃力2000以下の魔法使い族モンスターを攻撃表示で特殊召喚する!」

遊星

「攻撃力2000以下だと……!?!」

闇の意志

「俺は、ブラック・マジシャン・ガールを特殊召喚!!」

ブラック・マジシャン・ガール ATK2000

遊星

「くっ！俺のデッキに魔法使い族モンスターはいない……」

闇の意志

「ならば、磁石の戦士 でダイレクトアタック！」

遊星

「くっ！トラップカードオープン！！『シンクロ・スピリッツ』墓地のシンクロモンスターを一体を除外し、そのシンクロモンスターの素材を俺の場に特殊召喚する！俺は墓地より、ジャンクウォリアーを除外！」

蘇れ！ジャンク・シンクロン、ボルト・ヘッジホッグ！」

闇の意志

「しぶとい奴だな……磁石の戦士 で、ボルト・ヘッジホッグを攻撃！！」

闇の意志

「ブラック・マジシャン・ガールで、ジャンクシンクロンを攻撃！！」

ブラックマジシャンガールの攻撃で、ジャンクシンクロンに直撃し闇の意志がダイレクトアタックを宣言するが、ジャンク・シンクロンはまだ、存在していた。

闇の意志

「ジャンク・シンクロンが破壊されていない？」

遊星

「墓地のシールド・ウォリアーの効果だ。墓地のこのカードをゲームから除外する事で、俺のモンスターは一度だけ、戦闘では破壊されない！」

闇の意志

「チッ！ブラック・マジシャン・ガールでジャンク・シンクロンを攻撃！ブラック・バーニングー！」

ブラック・マジシャン・ガールの攻撃でジャンク・シンクロンは破壊された。

闇の意志

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

遊星

「俺のターン！」

遊星&闇の意志 S P C 7 8

遊星

「『S p・シンクロ・リターン』を発動！このカードは、自分のS P Cが5個以上ある時に、ゲームから除外されているシンクロモンスターを特殊召喚できる。蘇れ！ジャンク・ウォリアーー！！」

ジャンクウォリアー A T K 2 3 0 0

遊星

「そして、ニトロ・シンクロンを召喚！」

ニトロ・シンクロン ATK300

遊星

「レベル5のジャンク・ウォリアーにレベル2のニトロ・シンクロンをチューニング！」

ニトロ・シンクロンが2つの緑の輪となり、ジャンク・ウォリアーを包み込む。

遊星

「集いし思いが、ここに新たな力となる！光指す道となれ！シンクロ召喚！燃え上がれ！ニトロ・ウォリアー！！」

ニトロ・ウォリアー ATK2800

遊星

「ニトロ・シンクロンの効果で、カードを1枚ドロ！」

闇の意志

「ブラック・マジシャンを超えるカードを1ターンで呼ぶとはな。さすがだ」

闇の意志が遊星を賞賛する。

遊星

「ニトロ・ウォリアーで、ブラック・マジシャンを攻撃！ダイナマイト・ナックル！！」

ニトロ・ウォリアーが両拳でブラック・マジシャンを攻撃し、破壊する。

闇の意志

「くっ……！？」

闇の意志 L P 3 8 0 0 3 5 0 0

遊星

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

闇の意志

「俺のターン！」

遊星&闇の意志 S P C 8 9

闇の意志

「トラップ発動！『マジシャンズ・リターン』！自分のLP1000ポイント払い、手札を1枚捨てる事で、自分の墓地の魔法使い族モンスターを一体、攻撃力を1000ポイントアップさせて、特殊召喚する！」

闇の意志 L P 3 5 0 0 2 5 0 0

闇の意志はホーリー・エルフを捨てた。

闇の意志

「復活しろ！ブラック・マジシャン！」

ブラック・マジシャン A T K 2 5 0 0 3 5 0 0

闇の意志

「ブラック・マジシャンで、ニトロ・ウォリアーを攻撃！ブラック・マジックー！」

ブラック・マジシャンの放った黒い波動がニトロ・ウォリアーを破壊する。

遊星

「くっ！！」

遊星 4000 3300

闇の意志

「ブラック・マジシャン・ガールで、ダイレクトアタック！ブラック・バーニングー！」

遊星

「トラップカードオープン！『スピリット・フォース』！このカードの効果によって俺への戦闘ダメージを一度だけ0にする！」

遊星の周りに透明な壁が現れ、ブラック・マジシャン・ガールの攻撃を防ぐ。

遊星

「スピリット・フォースの効果で、墓地から守備力1500以下の戦士族チューナーを1枚手札に加える」

遊星はジャンク・シンクロンを手札に加える。

闇の意志

「だが、俺の攻撃はまだ残ってるぜ！磁石の戦士で攻撃！時空剣

「閃!!」

磁石の戦士 が遊星を手にした剣で斬りつける。

遊星

「ぐああっ!!」

遊星 L P 3 3 0 0 1 9 0 0

闇の意志

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

遊星

「俺のターン!」

遊星&闇の意志 S P C 9 1 0

遊星

「(このターンで、俺のSPCは10。スピードワールド2の効果で、SPCを10個取り除く事で、相手のカードを1枚破壊できる。だが、それを奴は読んでいるだろう……ならばっ!)俺はSPCを7個取り除く事で、カードを1枚ドロウする!」

遊星 S P C 1 0 3

闇の意志

「……」

遊星

「俺は『S p - エンジェル・バトン』を発動!デッキからカードを

2枚ドローし、その後、手札から1枚を墓地に送る！」

遊星はスピード・ウォリアーを捨てた。

遊星

「ジャンク・シンクロンを召喚！」

ジャンク・シンクロン ATK1300

遊星

「ジャンク・シンクロンの効果で、墓地のスピード・ウォリアーを
守備表示で特殊召喚！」

スピード・ウォリアー DEF400

遊星

「そして、俺の場にチューナーモンスターがいる事で、墓地のボルト・ヘッジホッグは、特殊召喚できる！」

ボルト・ヘッジホッグ ATK800

遊星

「レベル2のボルト・ヘッジホッグと、スピード・ウォリアーに、
レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

ジャンク・シンクロンが3つの緑の輪となり、ボルト・ヘッジホッグ、スピード・ウォリアーを包み込む。

遊星

「集いし叫びが木霊の矢となり空を裂く！光指す道となれ！シンク

口召喚！出でよ！ジャンク・アーチャー！」

ジャンク・アーチャー ATK 2300

闇の意志

「攻撃力2300では、俺のブラック・マジシャンを倒す事は不可能だ！」

遊星

「ああ。普通はな」

闇の意志

「何！？」

遊星

「ジャンク・アーチャーの効果発動！ディメンジョン・シュート！」

ジャンク・アーチャーがブラック・マジシャンに光の矢を発射する。

光の矢を受けたブラック・マジシャンは次元の渦に飲み込まれ、消えてしまう。

闇の意志

「何が……」

遊星

「ジャンク・アーチャーは1ターンに一度、エンドフェイズまで、相手モンスター1体をゲームから除外する事ができる」

闇の意志

「くっ!?!」

遊星

「ジャンク・アーチャーで、ブラック・マジシャン・ガールに攻撃！スクラップ・アロー!」

ジャンク・アーチャーの攻撃でブラック・マジシャン・ガールが破壊される。

闇の意志

「ぐああっ!」

闇の意志 LP 2500 2200

遊星

「このターンのエンドフェイズに、除外されたブラック・マジシャンは元に戻る。カードを二枚伏せ、ターンエンド」

闇の意志

「遊星、どうやらお前には本気が出せそうだ……このデッキの真の力を見せてやる!俺のターン!」

遊星 SPC 3 4

闇の意志 SPC 10 11

闇の意志

「このカードは、自分の墓地の光属性と闇属性のモンスターを一体ずつゲームから除外する事で特殊召喚できる。俺は墓地のホーリー・

エルフとバフォメットをゲームから除外……」

ホーリー・エルフとバフォメットが次元の彼方へと消える。

遊星

「この召喚条件……まさか……」

闇の意志

「一つの魂は光をいざない、一つの魂は闇を導く！ やがて、光と闇の魂は、カオスの光を作り出す！ カオス・ソルジャー - 開闢の使者 - 降臨！！」

カオス・ソルジャー - 開闢の使者 - ATK3000

遊星

「これが、あの伝説の……」

闇の意志

「不動遊星！このカードでお前を混沌の闇へ堕とす！！」

第十二話 迫り来る伝説！反撃のシンクロ召喚！（後書き）

次回予告

遊星

「カオス・ソルジャーを召喚され、俺は後一步という所まで追い詰められる。絶体絶命と思ったその時、新たな力が俺に宿る！」

次回、遊戯王5D's Magical A's ㊦決着！ライトニング・スラッシュ・ウォリアー！！『ライディングデュエルアクセラレーション！』

第十三話 決着！ライトニング・スラッシュ・ウォリアー！！（前書き）

V S 遊戯デッキ、遂に決着です！！

遊戯ファンの皆さん、この回を読んでも怒らないでくださいね……

感想を送ってくれた皆さん、本当にありがとうございます！！

ではどうぞ！！

第十三話 決着！ライトニング・スラッシュ・ウォリアー！！

遊星 LP1900 SPC4

闇の意志 LP2200 SPC11

闇の意志

「カオス・ソルジャー - 開闢の使者 - で、ジャンク・アーチャーを攻撃！開闢双刃斬！！」

カオス・ソルジャーがジャンク・アーチャーを手にした剣で両断する。

遊星

「ぐああっ！！」

遊星 LP1900 1200

闇の意志

「カオス・ソルジャーは、相手モンスターを戦闘で破壊した時、もう一度攻撃できる！！」

遊星

「何！？」

闇の意志

「行け！カオス・ソルジャー！時空突刃・開闢双破斬！！」

カオス・ソルジャーが剣を構え、遊星に向かっていく。

遊星

「トラップカードオープン！『ガード・ブロック』！相手からの戦闘ダメージを0にして、その後、カードを1枚ドロウする！」

闇の意志

「チッ！だが、こちらには、まだ攻撃できるモンスターが2体残っている。ブラック・マジシャンで、ダイレクトアタック！！」

遊星

「トラップ発動！！『シンクロ・ヒール・フォース』！！」

闇の意志

「何！？」

遊星

「このカードは、自分の墓地のシンクロモンスター1体をゲームから除外する事で、そのモンスターの攻撃力分、ライフを回復する！俺はニトロ・ウォリアーを除外！！」

遊星 LP 1200 4000

闇の意志

「ブラック・マジシャンの攻撃！ブラック・マジック！！」

遊星

「ぐあああああっ！！」

遊星 LP 4000 1500

闇の意志

「続けて、磁石の戦士 で攻撃！時空剣一閃！！」

磁石の戦士 が遊星を斬り付ける。

遊星

「くっ！？」

遊星 LP 1500 100

遊星

「シンクロ・ヒール・フォースの効果によりこのターンのエンドフェイズに墓地のレベル4モンスター1体を特殊召喚できる！蘇れ！
ジャンク・ブレイダー！！」

ジャンク・ブレイダー ATK 1800

闇の意志

「ターンエンド……今の攻撃を受けていれば、楽になれたのにな……
…何故そこまでして戦う？」

遊星

「……」

闇の意志

「お前はあの小娘やその周りの人々にお前の死の運命を押し付けるつもりか？」

遊星

「何！？どういう意味だ！？」

闇の意志

「……………」

遊星

「くっ！？ならば、このデュエルで聞き出してやる！俺のターン！
！」

遊星 S P C 4 5

闇の意志 S P C 1 1 1 2

遊星

「（奴の S P C は 1 2 ……場にはカオス・ソルジャー、ブラック・マジシャン、磁石の戦士 ……）」

この状況は誰が見ても絶望的な状況だった。

遊星

「（ここまでなのか……俺は……）」

遊星が諦めかけたその時だった。

フェイト

『遊星…これ、ありがとう。大事にするね』

フェイト

『今日は…楽しかったよ。ありがとう』

遊星

「（フェイト……！？）」

遊星の頭の中にフェイトの声が響く。

遊星

「（そくだ……俺は負ける訳には行かない！必ず勝つと約束したんだ！！）」

その時、遊星の右腕の痣が光り出した。

遊星

「『S p -シンクロン・ドロー』自分のS P Cが5個以上ある時に発動する事ができる！！墓地の『シンクロン』と名の付いたチューナーモンスター一体につき1枚、デッキからカードをドローする。」

闇の意志

「奴の墓地の『シンクロン』名の付いたチューナーは2体……」

遊星

「よつて、俺はカードを2枚ドローする！！（これは……！？ついに来たか……）」

ドローしたカードを見て遊星は口元を歪める。

遊星

「チューナーモンスター、クイック・スパナイトを召喚！！」

クイック・スパナイト A T K 1 0 0 0

遊星

「レベル4のジャンク・ブレードにレベル3のクイック・スパナイトをチューニング!!」

クイック・スパナイトが3つの緑の輪となり、ジャンク・ブレードを包み込む。

遊星

「集いし剣が、全てを斬り裂く太刀となる!光指す道となれ!シンクロ召喚!斬り裂け!セブンスード・ウォリアー!!」

セブンスード・ウォリアー A T K 2 3 0 0

遊星

「クイック・スパナイトがシンクロ召喚によって墓地に送られた時、相手モンスターの攻撃力を500ポイントダウンさせる!!」

カオスソルジャー - 開闢の使者 - A T K 3 0 0 0 2 5 0 0

遊星

「さらに『S p - サモン・スピダー』を発動!自分のS P Cが4つ以上ある時に、手札からレベル4以下のモンスターを一体特殊召喚できる!!」

闇の意志

「レベル4以下のモンスターだ?!?そんなモンスターを召喚してどうなる?お前に残された道はもう残されていない!!」

遊星

「違う!俺のライフはまだ残っている!そして俺には守るべき者がいる!その人のために俺は戦う!!」

闇の意志

「ならば見せてみる！この俺を倒し、奇跡を起こしてみろ！！」

遊星

「サモン・スピダーの効果で、手札からチューナーモンスター、バルディッシュ・シンクロンを特殊召喚！！」

バルディッシュ・シンクロン ATK 0

遊星の場にフェイトの愛杖『バルディッシュ・アサルト』の待機状態と同じ姿のモンスターが現れる。

闇の意志

「何だ、これは！？」

遊星

「これが、お前を倒すキーカードだ！レベル7のセブンソード・ウオリアーにレベル1のバルディッシュ・シンクロンをチューニング！！」

バルディッシュ・シンクロンが金色の輪となり、セブンソード・ウオリアーを包み込む。

遊星

「集いし雷光が、闇夜を斬り裂く刃となる！光指す道となれ！シンクロ召喚！光来せよ！ライトニング・スラッシュ・ウオリアー！！」

ライトニング・スラッシュ・ウオリアー ATK 3500

遊星の場にはセブンスード・ウォリアーに酷似したモンスターが紺色のマントを羽織り、バルディッシュの『ザンバーフォーム』を構えていた。

闇の意志

「何だこれは……！？こんなカードは闇の書には記録されていない！そのカードは何だ！？」

遊星

「悪いがその問いに答えるつもりは無い！ライトニング・スラッシュ・ウォリアーで、カオス・ソルジャー - 開闢の使者 - を攻撃！！ソニック・スラッシュ！！」

ライトニング・スラッシュ・ウォリアーがバルディッシュを構える。それと同時にライトニング・スラッシュ・ウォリアーの姿が消える。

闇の意志

「消えた！？奴はどこに……」

闇の意志が後ろを向いた瞬間にカオス・ソルジャーは木っ端微塵に斬り裂かれていた。

ライトニング・スラッシュ・ウォリアーが再び姿を現した時には、カオス・ソルジャーは爆発し、爆風が闇の意志を襲う。

闇の意志

「ぐあああつ！！」

闇の意志 LP2200 1200

闇の意志

「まだまだ……！まだ、カオス・ソルジャーを倒しただけだ……俺のライフはまだ1200残っている。次の俺のターン、スピードワールド2の効果でSPCを10個取り除く事でライティング・スラッシュ・ウォリアーを破壊し、俺のモンスター達でダイレクトアタックをすれば、お前の負けだ……」

遊星

「残念だが、お前に次のターンは無い。このデュエルは俺のこのターンで決着が着く」

闇の意志

「何イ！？」

遊星

「ライティング・スラッシュ・ウォリアーの効果発動！戦闘で相手モンスターを破壊した時、相手フィールド上のモンスターを一体を破壊し、相手に1000ポイントのダメージを与える！フォトンランサー！！」

ライティング・スラッシュ・ウォリアーが剣を持っていない左手で金色の魔力弾を作り出し、ブラック・マジシャンに向けて発射する。

ブラック・マジシャンはフォトンランサーを受けて破壊される。

闇の意志

「ぐっ！！」

闇の意志 LP 1200 200

遊星

「そして、この効果で相手モンスターを破壊した時、ライトニング・スラッシュ・ウォリアーは攻撃力を1000ポイント下げて、もう一度攻撃できる!!」

闇の意志

「何だと!？」

ライトニング・スラッシュ・ウォリアー ATK 3500 2500

遊星

「ライトニング・スラッシュ・ウォリアーで磁石の戦士で攻撃!
!ツイン・ソニック・スラッシュ!!」

ライトニング・スラッシュ・ウォリアーが磁石の戦士に向かっていくと同時にその姿を消す。

闇の意志

「また、消えた!？」

次の瞬間、磁石の戦士は粉々になり、爆風が闇の意志をDホイールごと吹き飛ばす。

闇の意志

「ぐああああああああああつ!!!!」

闇の意志 LP 2000

遊星

「俺の勝ちだ」

闇の意志

「くっ!!」

地面に墜落した闇の意志は起き上がりながら遊星を見る。

闇の意志

「だが、このデュエルで破壊されたモンスターの力は闇の書の糧となる!」

遊星と闇の意志のデュエルディスクの墓地から青白い光を放つ光線が闇の書があると思われる方向へと飛んでいく。

闇の意志

「不動遊星……。伝説の決闘者のデッキを破るとは……さすがだ。お前の力がここまで大きくなっていたとはな……」

遊星

「さっき言っていた事の意味を答えろ。俺の死の運命とは何だ?」

闇の意志

「さあな……いずれわかるだろうよ……」

闇の意志の体が消えていく。

遊星

「おい!!」

遊星が詰め寄る。

闇の意志

「お前がここで何をしようが構わないが、あの小娘は大丈夫なのか？」

遊星

「何！？」

その時、遠くの方からフェイトの叫び声が聞こえてきた。

闇の意志

「おやおや、奴らあの小娘の魔力も喰いものにするのか……これは早く行かないと大変な事になるだろうな……」

闇の意志はそう言い残し、姿を消した。

遊星

「フェイトに何が……！！？」

遊星はDホイールに飛び乗り、フェイトの反応がある場所へと走って行った。

第十三話 決着！ライトニング・スラッシュ・ウォリアー！！（後書き）

次回予告

遊星

「仮面の戦士に襲われたフェイト。命の危険は無かったが、仮面の戦士の目的は一体何なのか……そして、新たな幕開けが、今始まる。」

次回！遊戯王5D's Magical A's 『勇気の選択！！』 ライディングデュエルアクセラレーション！！」

〈補足〉

ライトニング・スラッシュ・ウォリアー

戦士族 / 8 / 光属性 / ATK 3500 / DEF 2500

「バルディッシュ・シンクロン」+「セブンスード・ウォリアー」

効果：このカードは「魔法使い族」としても扱う。このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、相手フィールド上のモンスター一体を破壊し、相手ライフに1000ポイントのダメージを与える。この効果で相手モンスターを破壊した時、攻撃力を1000ポイント下げる事で、もう一度だけ攻撃できる。このカードに装備されたカードを墓地に送る事で、相手フィールド上のカードを1枚破壊し、相手ライフに500ポイントのダメージを与える。

第十四話 勇気を選択!!（前書き）

デュエルシーンが無いと、ストーリー進めにくいな……

第十四話 勇気の選択！！

リンカーコアを奪われ、気絶したフェイトはすぐに收容された。

なのはの時と同様にリンカーコアに酷いダメージを受けているものの肉体的負傷は浅く、魔力以外はすぐに回復するという事だった。整備を終えて試験航行中の『アースラ』のミーティングルームでミーティングが行われる。

リンディ

「フェイトさんは、リンカーコアに酷いダメージを受けているけど、命に別状は無いそうよ」

リンディがフェイトの様子を報告する。

なのは

「私の時と同じように、闇の書に吸収されちゃったんですね」

なのはが自分が以前受けた時の事を思い出しながら言う。

クロノ

「『アースラ』が稼働中で良かった。なのはの時以上に、救援が早かったからな」

クロノが安堵する。

エイミー

「みんなが出撃した後、しばらくして、駐屯所のシステムがクラッ

キングで、粗方ダウンしちゃって…それで、指揮や連絡が取れなくて……ごめんね……あたしの責任だ……」

エイミーが自分を責める。

リーゼロッテ

「んなことないよ。エイミーがすぐにシステムを復帰させたから、『アースラ』との連絡が取れたんだし、仮面の男達の映像も、ちゃんと残せた」

リーゼロッテがエイミーをフォローする。

リンディ

「でもおかしいわね。向こうの機材は、管理局が使っているシステムと同じなのに、それを外部からクラッキングできる人間なんているものなのかしら?」

リンディの言葉をエイミーが繋げる。

エイミー

「そうなんですよ!防壁も、警報も、全部素通りで、いきなりシステムをダウンさせるなんて……」

アレックス

「ちょっと、あり得ないですよね……」

エイミー

「ユニットの組み替えはしてるし、遊星君が、もっと強力なブロックを考えてくれてるんだけど……」

なのは

「それだけ、すごい技術者がいるって事ですか？」

リーゼロッテ

「もしかして、組織でやってるのかもね」

クロノ

「君の方から聞いた話も、状況や関係がよく分からないな」

クロノが自分の隣に座っているアルフに言う。

アルフ

「ああ……あたしと遊星が駆け付けた時には、もう仮面の男はいなかった……けど、あいつが……シグナムがフェイトを抱き抱えて……言い訳はできないが、すまないと伝えてくれって……」

リンディ

「アレックス、『アースラ』の航行に問題は無いわね？」

アレックス

「ありません」

アレックスがリンディの問いに答える。

リンディ

「うん。それでは予定より少し早いですが、司令部を『アースラ』に戻します。各員は所定の位置に」

全員が肯定の返事をする。

リンディ

「それと、なのはさんはお家に帰らないとね」

なのは

「あ……はい。……でも……」

リンディ

「フェイトさんの事なら大丈夫。私達の方でちゃんと見ておくから」

リンディがなのはの気になっている事を見透す。

なのは

「あ……はい」

なのはも納得したのか、小さな声で返事をした。

なのは

「それと、遊星さんは……」

なのはが聞く。

リンディ

「遊星さんは元気よ。さっきエイミイも言ってたけど、防御ブロックの作成とかやってるみたいだし、そう心配する必要はないわ」

リンディは笑顔で答えた。

『アースラ』の医務室では、気を失っていたフェイトが目を覚まし

ていた。

フェイト

「……ん？」

目を覚ましたフェイトは自分のそばにリンディがいる事に気付く。

リンディ

「フェイトさん」

リンディはフェイトの事を静かに呼んだ。

フェイトが起き上がると、アルフがフェイトの寝ているベッドに突っ伏して寝ているのが見えた。

フェイト

「あ……アルフ……」

リンディ

「アルフも昨夜からずっとあなたのそばに付きっきりだったのよ」

リンディが苦笑する。

フェイト

「え……？えつと……私……」

リンディ

「ここは、『アースラ』の艦内。あなたは砂漠での戦闘中に背後から襲われて、気を失ってたの」

リンディがフェイトが疑問に思っている事を教える。

リンディ

「リンカーコアを吸収されてはいるけど、すぐに治るそうよ。心配しないで」

フェイト

「そっか……私、やられちゃったんですね……」

フェイトが落ち込む。

リンディ

「管理局のサーチャーでも確認できなかった不意打ちよ。仕方ないわ」

リンディがフェイトを励ますと同時にフェイトの手を握る。

フェイト

「あっ……／＼／」

フェイトがそれに気づき、頬を赤らめる。

リンディ

「あっ、ごめんなさい。嫌だった？」

フェイト

「いえ、嫌とかでは……」

フェイトが照れる。

リンディ

「少し、うなされていたみたいだったから、でも良かったわ。あな
たが無事で」

と、リンディが微笑む。

フェイト

「すみません。ありがとうございます」

リンディ

「学校には、家の用事で休む事にしてあるから、もう少し休んでい
るといいわ」

フェイト

「はい……」

リンディ

「お腹減ってるでしょ？何か軽い食事でも持ってくるわね。何が
いい？」

リンディが出口の方へ歩きながらフェイトに聞く。

フェイト

「え……いえ、そんな……」

フェイトが遠慮しようとするが、

リンディ

「いいから」

と、フェイトの言葉を遮る。

フェイト

「えっと……じゃあ、お任せします」

そんなリンディを見送り、握られていた手を見つめるフェイト。

それは、「アリシア・テストロッサのコピー」ではなく、

「フェイト・テストロッサ」本人が初めて感じた母親という温もりだった。

遊星は食事の乗ったトレイを持って、フェイトのいる病室へと向かっていった。

リンディに頼まれて、食事を持って行く事になったのだ。

その時リンディが妙に笑顔だったのは気のせいだろう。

遊星が扉を叩くと、

フェイト

『は……はい』

フェイトの声が聞こえてきた。声を聞く限り、フェイトは元気みたいだ。

遊星

「フェイト、俺だ。食事を持ってきた」

フェイト

「え！？ゆ……遊星なの！？」

遊星

「あ……ああ」

フェイト

「あ……えと、入っていいよ……」

フェイトにそう言われ、遊星は病室に入る。

遊星

「元気そうだな」

フェイト

「うん。まだちょっとフラフラするけど……」

遊星

「一人なのか。アルフがいると聞いたんだが……」

フェイト

「さっきまでいたけどご飯食べて来るって」

遊星

「そうか」

遊星はそう言ってフェイトにトレイを渡す。

トレイを受け取ったフェイトは真っ赤になった。

「遊星が来る五分前」

アルフ

「さて、お腹空いたし、ご飯食べて来るかな。フェイトのご飯はリンディ提督が持つて来るんだよね？」

フェイト

「うん。そう言ってたよ」

アルフ

「遊星が持つてきてくれるといいねえ」

フェイト

「ええ！？何でそんな話になるの！？」

アルフ

「いや、そっちの方がフェイトも喜ぶんじゃないかなと思ってさ。遊星に食べさせてもらったり」

フェイト

「た……食べ……／／／」

（回想終了）

フェイト

「……／／／」

遊星

「どうした？食べられそうか？」

フェイト

「一人じゃ、無理かも…… / / /」

遊星

「？」

フェイト

「遊星が……食べさせてくれない？」

その後、遊星はどう対応していいかわからなくなったらしいとか……

同時刻、闇の書の主、八神はやてが入院している病院の屋上で、ヴォルケンリッターが集まっていた。

ヴィータ

「どうすんだよ！！頁も中々集まらないし、闇の書から出た黒い奴も消えちまった……次にあいつ等と戦う事になったらもう逃げられるかわかんねえよ！！」

シグナム

「確かに、これ以上闇の書の頁を消費して、不動遊星と戦うのは厳しいな。今日も100頁ほど集めてきたが……」

シャマル

「それに、はやてちゃんの足の麻痺、どんどん上に上がってきてるみたいなの……心臓に麻痺が届くのももう時間の問題かもって……」

ザフィーラ

「主を助けようにも、まずは闇の書を完成させなければならぬ……しかし、公に姿を現せば、間違いなく我らは捕らえられる……」

ヴィータ

「ちくしょう!!どうすりゃいいんだよ!!」

と、ヴィータが屋上の柵に拳を降ろした時、

???

「願いを叶えるためなら自らの心の闇を曝け出せ」

シャルが胸に抱えていた闇の書から声が聞こえたのだ。

シグナム

「何だ!?!お前は……」

???

「お前達の願いを叶えたいのならば、見せてみる、お前達の覚悟を……心の闇を……」

次の瞬間、闇の書はシャルの手から離れ、闇の書から、黒い影を現した。その姿は、これまでの闇の意志と同じように、黒い人影と言う点は同じだが、黒い甲冑のようなシルエットをしていた。

シグナム

「心の闇とはどういう事だ!?!それに、お前は……」

???

「我が名は霸王。古代ベルカの騎士達よ……」

霸王と名乗った黒い人形の左腕がデュエルディスクのような形に変形する。

霸王

「闇の書はただ完成させればいいという物ではない。集めた魔力と、心の闇によって、その力に変化が出る」

ヴィータ

「何だよ！心の闇って、わけわかんねえ事言ってるじゃねえ！！」

ヴィータがグラーファイゼンを構えながら叫ぶ。

霸王

「人の心に巣食うマイナスの感情……怒り、憎しみ、殺意、嫉妬、苦痛、これらは全て人の心を蝕み、闇となる。だが、闇の書にはそれが必要だ」

シグナム

「心の闇を集めて闇の書に吸収させるというのか？」

霸王

「そう言う事だ。これを使え」

霸王は1枚のカードを取り出し、シグナムに投げる。

霸王

「お前達の力をそのカードに流し込み、そのカードを完成させる。それを使えば、魔力の蒐集など簡単にできる」

ヴィータ

「これを使って、闇の書を完成させれば、はやては助かるのか！？」

霸王

「ああ。だが、そのカードを完成させるには、自らが闇に堕ちなければならぬ……一度闇に堕ちれば、もう戻れないが、それでもいいのか？その勇気があるか？」

シグナム

「我らヴォルケンリッター、この命を主はやての為に使うと決めている。例え、自らが滅びようと……」

霸王

「ならば見せてみる！お前達の闇を！！」

その夜、病院の屋上でヴォルケンリッターは自らを闇に堕としたのだった。

主、八神はやてを救う為に……

第十四話 勇気の選択！！（後書き）

次回予告

遊星

「クリスマス・イヴに俺達はすずかの友達の見舞いに行く事に……
そこで会ったのは、俺達が何度も戦った闇の書の騎士達だった。そ
の夜、俺達は再度、騎士達と戦うことに……」

次回！遊戯王5D's Magical A's「聖夜の戦い」
ライディングデュエルアクセレーション！！」

第十五話 聖夜の戦い（前書き）

久しぶりの更新です！！

詰め込み過ぎた感じがあるのは大目に見てくれると嬉しいです。

第十五話 聖夜の戦い

クリスマスを目前とした高町家では、フェイトと遊星がお邪魔して夕食を共にしていた。

士郎

「フェイトちゃんは？今年のクリスマスはやっぱりご家族と一緒にのかな？」

フェイト

「はい……えと、一応は……」

フェイトが顔を赤くしながら答える。

桃子

「そう。遊星君は……」

遊星

「クリスマスにケーキを販売すると聞いているので、手伝うつもりでいるのですが……」

遊星がぶっきらぼうに答える。

士郎

「それはありがたいね。うちは今年もイヴは地獄の忙しさだからな」

なのは

「私、今夜のうちに値札とポップ作っておくから！」

美由紀

「お願いね、私達は、今夜しっかり寝とかないと!!」

美由紀が気合いを入れる。

遊星&フェイト

「「??」」

それを聞いた遊星とフェイトが目を丸くする。

なのは

「翠屋のケーキ人気商品だから、イヴの日はお客さんいっぱいなの」

頭に『?』マークを浮かべていた二人になのはが説明する。

美由紀

「それにね、イヴを過ごす恋人同士とか友達同士のために、深夜まで営業してるんだよ」

美由紀が補足をする。

フェイト

「そうなんですか」

遊星

「なるほどな」

なのは達の説明を聞いた二人は納得する。

美由紀

「恭ちゃんはいいよね〜店の中でずうっと忍さんと一緒だし〜」

恭也

「それは別に関係ないだろう」

恭也が素っ気なく答える。

遊星

「なるほど、いつでもラブラブというわけだな」

それを聞いていた遊星が目を光らせる。

恭也

「ゆっ遊星！俺は別にそんなんじゃ……」

恭也が慌てる。

遊星

「仲がいいのはいい事じゃないか」

恭也

「う……」

恭也は遊星の言葉に何も言えなくなってしまふ。

それを隣で聞いていたフェイトが顔を赤くして遊星の方をずっと見ていたのだが遊星はまったく気付いていなかった。

遊星達が高町家の夕食にお邪魔した日の夜に、すずかは、終業式で

ありクリスマススイブでもある24日、入院しているはやてにお見舞い兼クリスマスプレゼントを贈るというイベントを考えていた。四人で学校帰りに突然訪れ、サプライズプレゼントでびっくりさせようというものだった。

4人はメールでやりとりをしつつ、そのイベントを了承するのだった。

フェイト

「ごめんね遊星。一緒に来てもらっちゃって。疲れてるでしょ？」

遊星

「いや、気にするな。徹夜には慣れている。それに、徹夜明けは体を動かした方がいいんだ」

遊星はなのは、フェイト、アリサ、すずかと一緒にはやての入院している病院に来ていた。

本来遊星は翠屋でクリスマスケーキの販売を手伝う予定だったのだが、

士郎

「ありがとう、遊星君。君のおかげで、去年よりずっと早くケーキが全部完成したよ」

遊星

「いえ、役に立てたのなら良かったです。後は販売するだけですな」

士郎

「いやいや、ここまでで十分だよ。販売は私達だけでやるから、君は休むといい」

遊星

「いや……それでは……」

士郎

「フェイトちゃんと」

士郎が食い下がろうとする遊星の言葉を遮る。

遊星

「はい？」

思わず聞き返す。

士郎

「フェイトちゃんと仲良くクリスマスを過ごすといい」

遊星

「はあ……（この人は何故こんな事を……？わからない……）」

士郎が何故そんな事を言うのか遊星にはまったく理解できなかった。

士郎

「（と言っても、遊星君はわからないんだろうな……）」

士郎は心の中でそう思っていた。

そして、その考えは当たっていた……

遊星

「まあ、折角もらった休みだ。楽しむ事にするさ」

フェイト

「そっか……そうなんだ……（遊星にクリスマス、一緒に過ごそうって誘わないと……）」

そうは思っているのだが中々言葉が出ない。

フェイト

「あう……」

考えているうちにはやての病室の前に到着し、フェイトはなのはにぶつかってしまう。

なのは

「どうしたの？フェイトちゃん。大丈夫？」

フェイト

「うん。何とか……（やっぱり無理だった……）」

フェイトは心の中でため息をついた。

遊星

「俺は後から入る。まずはお前達から入るといい」

すずか

「わかりました」

アリサ

「それじゃあ、いこっか」

四人が病室に入って行った。

四人が病室に入るのを見届けた遊星は頃合いを見計らって病室に入った。

遊星

「失礼します……！？」

病室に入った遊星は驚きを隠せなかった。

何故なら、その病室には何度も対立してきた、守護騎士の3人がいたのだから。

しかし、遊星はあくまで普通に接する事に務めた。

はやて

「あれ？えっと。あなたは……遊星さん？」

遊星

「覚えていてくれたのか？」

はやて

「すごく、不思議な感じの人だったから。遊星さんこそ、私の事覚えてくれたんやな」

遊星

「ずずかから写真を見せてもらってな。ここに入院しているのは知ってたんだが、中々行く時間が取れなかった」

はやて

「それでも、今日来てくれたんやから、私はとっても嬉しいよ？」

はやてが笑う。

遊星

「そう言って貰えると助かる」

そして遊星達は事を大きくしないために何事も無いように振る舞った。

遊星

「外は寒かったからな。ロビーで何か暖かいものでも買ってくる」

シグナム

「それなら、私も、お手伝いします」

シャマル

「私も……」

遊星

「ああ、助かる」

遊星とシグナム、シャルは病室を出た。

病室を出る際になのはとフェイトには普通に振る舞うようにとアイコンタクトをした。

病院の屋上にて、遊星とシグナム、シャルが向かい合う。

遊星

「お前達があそこにいたという事は、はやてが……」

シグナム

「そうだ。あの方が闇の書の主だ」

遊星

「お前達が『闇の書』の蒐集をしていたのは……」

シグナム

「他にもない、主はやてのためだ」

遊星

「何故だ？あんな事をして、はやてが喜ぶとも思っているのか？」

シグナム

「主はやてには我らのしている事を知らせていない」

遊星

「何！？それは、今はやてが入院しているのと何か関係があるのか？」

シグナムは不自由な足の治療のためにはやてが通っていた病院で、シグナムたちを「はやての家族」と認めた石田医師が、はやての病気の真実と、現在の進行状況を告げたのだった。原因不明の麻痺。足先から始まった麻痺がいまや膝を越えて、少しずつ上に上がってきていること。この数ヶ月は特に進行が早く、このままでは内臓機能の麻痺…つまり、「死」が迫ってきているということ。

シグナム

「そうなる前に、『闇の書』を完成させれば、主はやての体は元に戻る……」

遊星

「何故そう言い切れる！その力が、『闇の書』の力がそんなに都合のいいように働くと思っているのか！」

シグナム

「知った様な事を……！！お前に何がわかる……！！」

シグナムが声を荒げる。

遊星

「今の『闇の書』はもうお前達の知っている『闇の書』じゃない！」

シグナム

「何？」

遊星

「今までの様々な改変を受けて『闇の書』は壊れてしまっている！あの状態のまま力を解放すれば、はやては……！」

シグナム

「世迷い言を……そのような嘘を我らが信じているのか？」

遊星

「くっ！（やはりダメか……説得は通じない。なら……）」

遊星は覚悟を決めた。

遊星

「俺は今、お前達と争う気はない。戦うとしたら、はやてと別れてからだ」

シグナム

「……わかった」

その後遊星達はロビーで暖かい飲み物を買って戻り、それからは何事も無かったように過ごした。

日が完全に沈んだ頃、遊星、なのは、フェイト、シグナム、シャマルははやてのいる病院からは遠く離れたビルの上にいる。

シグナムとシャマルはなのはとフェイトに真実を告げた。

なのは

「はやてちゃんが、『闇の書の主』……？」

フェイト

「……」

なのはとフェイトは、はやてが『闇の書の主』であることを知り驚愕する。

シグナム

「悲願は後僅かで叶う」

シャマル

「邪魔をするなら、はやてちゃんのお友達でも……！」

なのは

「待って！ちょっと待って！話を聞いてください！ダメなんです！

『闇の書』が完成したら、はやてちゃんは……」

説得しようとするなのはに、有無を言わずにヴィータが襲いかかる。

ヴィータ

「邪魔すんなよ……もう後ちょっとで助けられるんだ。はやてが元気になって、あたし達の所に帰ってくるんだ！必死に頑張ってきた

んだ……もう後ちょっとなんだから、邪魔すんなアアアア!!」

涙ながらに渾身の力でなのはを攻撃するヴィータ。

だが、なのはその攻撃を防ぎきる。

ヴィータ

「悪魔め……」

炎の中から浮かび上がる純白のバリアジャケット姿を見て、ヴィータが呻くように言う。

なのは

「悪魔でいいよ……」

なのはがレイジングハートを起動させ、構える。

なのは

「悪魔らしいやり方で、話を聞いてもらおうから!!」

一方で遊星とフェイト、シグナムは向かい合う形で対峙していた。

フェイト

「『闇の書』は、悪意ある改変を受けて、壊れてしまっている。今の状態で完成させたら、はやては……」

シグナム

「お前もその男と同じ様な事を言うのか……しかし、我々はある意味で、『闇の書』の一部だ!」

シグナムがレヴァンティンを構える。

遊星

「フェイト……もう説得は通じない。こうなったら、あいつ等を力ずくで止めるしかない!」

遊星がデュエルディスクを構える。

フェイト

「うん」

フェイトがバリアジャケットを起動させる。

しかし、フェイトのバリアジャケットはいつもと違っていた。防御を捨てて、高速機動に特化した『ソニックフォーム』。かつて砂漠での戦闘で使用しようとしていた、フェイトの切り札だった。

シグナム

「薄い装甲をさらに薄くしたか」

フェイト

「その分、速く動けます」

シグナム

「緩い攻撃でも、当たれば死ぬぞ。正気か? テスタロッサ」

フェイト

「あなたに勝つためです。強いあなたに勝つためにはもうこれしかないと思ったから……」

シグナムが騎士甲冑を纏う。

シグナム

「こんな出会いをしていなければ、私とお前達は一体どれほどの友になれただろうか……」

遊星

「まだだ……まだ間に合う!」

シグナム

「止まれん……我ら守護騎士……主の笑顔のため、騎士の誇りを捨て、その身を闇に堕とすと決めた。もう、止まれんのだ!」

シグナムが涙を流す。

フェイト

「止めます!私とバルディッシュと遊星が!」

上空で対戦するなのはとヴィータ。なのはは戦いの中で、『闇の書の本当の名前』についての話をする。

なのは

「本当の名前があったでしょう?」

ヴィータ

「『闇の書』の本当の名前?」

ヴィータが動きを止める。

戦闘が停止するかと思った矢先に、突如遠距離からかけられたバインドが、なのはを襲う。

フェイト

「なのは!?!」

シグナム

「!?!」

戦闘中ながら事態に気付いたフェイトとシグナム。

姿を隠していた仮面の戦士を見つけ出し、フェイトが一撃を加えるが、突然、別方向からの攻撃を受ける。

遊星

「フェイト!?! (あれは、バインド!?!)」

遊星が仮面の戦士のいる所に目を向けると、同じ姿形の仮面の戦士がもう一人そこにいたのだった。

そして、その隙をつかれたフェイトも拘束を受ける。

驚き戸惑う守護騎士たちだったが、仮面の戦士は騎士達をも拘束す

る。

遊星

「何をする気だ!？」

遊星が問い詰めるが仮面の戦士達は遊星を無視する。

仮面の戦士

「この人数だと、バインドも通信防御もあまり持たん……それに一人野放しになっている。早く頼む」

仮面の戦士

「ああ」

バインドの制御をしていない方の仮面の戦士が『闇の書』を出現させる。

シヤマル

「なっ!?!いつの間に!?!」

仮面の戦士が『闇の書』を開き、守護騎士達のリンカーコアを闇の書に吸収しようとしたその時……

????

「待て」

突如どこからか声が響く。

遊星

「何だ!?!今の声は……ッ!?!」

遊星が目の前に目を向けると、目の前に黒い人形が姿を現した。

遊星

「お前は！？また闇の書から現れた決闘者か！？」

かつて闇の書から現れた黒い人形。

遊星とほぼ同じデッキを使い遊星と戦った人形。

キング・オブ・デュエリスト『武藤遊戯』のデッキを使い遊星と戦った人形。

しかし、目の前にいる人形は今までの人形とは違い、甲冑を着込んだ様なシルエットとなっていた。

仮面の戦士

「お前は？」

???

「我が名は霸王。『闇の書』より生まれし最強の存在だ……」

遊星

「霸王だと！？（何だこいつは……今までの奴とはレベルが違う！）」

霸王

「今、ここで『闇の書』を完成させることは間違いではないが、決定的な物が抜けている」

霸王と名乗った人形は遊星を無視して話を進める。

仮面の戦士

「何だと？」

霸王

「そこにいる、『シグナー』である不動遊星を取り込む事で『闇の書』は全てを超越する力を得る」

仮面の戦士

「なるほど……しかし、そんな時間はもう残されてはいない。人数が多いためにバインドも通信防御も長くは持たない」

仮面の戦士がそう言うと、霸王は遊星と仮面の戦士達以外、全員に仮面の戦士が施したバインドの上から漆黒のバインドを施した。

霸王

「熟練の魔導士でも抜け出すのに数十分は掛かる代物だ。これで時間稼ぐ事が出来る」

霸王の左腕がデュエルディスクのような形に変わる。

霸王

「さあ、選ぶがいい。戦って皆を自由にするか、戦わずして全てを滅ぼす手助けをするかを……」

遊星

「（やるしかないのか……だが、あいつから出ている闘志は今の奴とはレベルが違う。だが、戦わなければ、フェイト達を危険な目に遭わせてしまう。それだけはさせない！）」

遊星がデュエルディスクを構える。

霸王

「戦う意思表示を見せたか」

遊星

「この戦い、負けるわけにはいかない。勝って全てを救ってみせる！」

霸王

「面白い。行くぞ！」

遊星と霸王がデュエルディスクから手札を五枚ドロ―する。

遊星&霸王

「デュエル！！」

第十五話 聖夜の戦い（後書き）

次回予告

遊星

「霸王……今までに俺が戦った事の無いタイプの決闘者……俺は、本当に奴に勝つ事が出来るのか……！！？」

次回！遊戯王5D's Magical A's『恐怖の霸王！』
ライディングデュエルアクセレーション！！」

第十六話 恐怖の霸王！（前書き）

久しぶりにまともなデュエルシーンを書いた気がします。

いい刺激になりました！！

第十六話 恐怖の霸王！

遊星＆霸王

「デュエル！！」

遊星 LP 4000

霸王 LP 4000

遊星

「先攻は俺だ！ドロー！『ジャンク・ブレイダー』を攻撃表示で召喚！！」

ジャンク・ブレイダー ATK 1800

遊星

「カードを二枚伏せ、ターンエンド」

霸王

「ドロー。手札から、悪魔族専用融合カード『ダーク・フュージョン』発動」

霸王の場に黒い渦が現れる。

遊星

「（『ダークフュージョン』！？聞いた事の無いカードだ。一体何を融合させるつもりだ……！？）」

霸王

「手札の『E・HEROフェザーマン』と『バーストレディ』をダークフュージョン」

霸王の場にファザーマンとバーストレディが現れ、黒い渦の向こうに消える。

霸王

「出でよ、『E・HEROインフェルノ・ウイング』」

霸王の場にインフェルノ・ウイングが現れる。

E・HEROインフェルノ・ウイング ATK2100

遊星

「E・HERO同士が融合してE・HEROが召喚されるだ！？」
『E・HERO』は十代さんの操るカード……やはり俺の記憶から……」

霸王

「他者の記憶など、一部でも奪えれば、そこから記憶の持ち主以外の人間の記憶に潜り込む事など容易い事だ」

遊星

「貴様……！」

遊星が怒りを露にする。

霸王

「『インフェルノ・ウイング』で『ジャンク・ブレイダー』を攻撃！『インフェルノ・ブラスト』！！」

インフェルノ・ウイングが両手から青白い火球をジャンク・ブレーダーに投げつけ、破壊する。

遊星 LP 4000 | 300 || 3700

遊星

「くっ！だがこの程度！！」

霸王

「これで終わりではない。『インフェルノ・ウイング』が戦闘で相手モンスターを破壊した時、破壊したモンスターの攻撃力が守備力、どちらか高い方の数値分、さらにダメージを受けてもらう。『ヘル・バックファイア』！！」

インフェルノ・ウイングが青白い火球を遊星に投げつける。

遊星

「ぐあああッ！！」

遊星 LP 3700 | 1800 || 1900

フェイト

「ッ！？」

フェイトが攻撃を受けた遊星を見て声をあげようとするが、強力なバインドに拘束されているために声が出なかった。

霸王

「この攻撃をまともに受けるとはな……」

遊星

「だが、この攻撃の借りはさせてもらう！トラップ発動！『トウル
ース・リインフォース』！！この効果により、デッキからレベル2
以下の戦士族モンスター一体を特殊召喚する！来い！『スピード・
ウォリアー』！！」

スピード・ウォリアー ATK 900

霸王

「ターンエンド」

遊星

「ドロー！『ジャンク・シンクロン』を召喚！！」

遊星の場にジャンク・シンクロンが召喚される。

ジャンク・シンクロン ATK 1300

遊星

「レベル2の『スピード・ウォリアー』にレベル3の『ジャンク・
シンクロン』をチューニング！！」

ジャンク・シンクロンが緑色の輪となり、スピード・ウォリアーを
包み込んで消える。

遊星

「集いし星が、新たな力を呼び起こす！光指す道となれ！シンクロ
召喚！出でよ『ジャンク・ウォリアー』！！」

遊星の場にジャンク・ウォリアーが現れる。

ジャンク・ウォリアー ATK 2300

遊星

「バトル！『ジャンク・ウォリアー』で『インフェルノ・ウイング』を攻撃！！」

ジャンク・ウォリアーがインフェルノ・ウイングに向かっていく。

遊星

「『スクラップ・フィスト』！！」

ジャンク・ウォリアーの右腕がインフェルノ・ウイングを粉砕する。

霸王 LP 4000-200=3800

遊星

「さらに、永続トラップ『シンクロ・ブラスト』！！これにより、俺の場のシンクロモンスターが攻撃した時、相手に500ポイントのダメージを与える！！」

遊星の場に『シンクロ・ブラスト』のカードが現れ、霸王に攻撃する。

霸王 LP 3800-500=3300

遊星

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

霸王

「ドロー。『E・HEROヘルブラット』を特殊召喚」

E・HEROヘルブラット ATK300

霸王

「『ヘルブラット』は自分の場にモンスターが存在しない時に手札から特殊召喚できる。そして、ヘルブラッドをリリースして、『E・HEROマリシヤス・エッジ』召喚!!」

E・HEROマリシヤス・エッジ ATK2600

遊星

「レベル7のモンスターを一体のリリースで召喚するだ!!?」

霸王

「『マリシヤス・エッジ』は、レベル7だが、相手の場にモンスターが存在する場合、リリースモンスターを一体減らす事が出来る。」

遊星

「くっ!?!」

霸王

「『マリシヤス・エッジ』で『ジャンク・ウォリアー』を攻撃!!」

マリシヤス・エッジが両腕に装備されている針をジャンク・ウォリアーに投げつける。

遊星

「トラップ発動!『くず鉄のかかし』!相手モンスターの攻撃を一

度だけ無効にする！」

マリシヤス・エッジの攻撃はジャンク・ウォリアーの目の前に現れ
たくず鉄のかかしによって防がれる。

遊星

「『くず鉄のかかし』は発動後、墓地に送らず、再セットする」

霸王

「ターンエンドだが、墓地に行った『ヘルブラット』の効果により、
カードを1枚ドロー」

遊星

「俺のターン、ドロー。（今、俺の手札に、奴のモンスターを倒す
カードは無い。なら……）カードを1枚伏せ、ターンエンド」

霸王

「ドロー。『E・HEROヘル・ゲイナー』を攻撃表示で召喚」

E・HEROヘル・ゲイナー ATK1600

遊星

「（攻撃力2600の『マリシヤス・エッジ』で『ジャンク・ウォ
リアー』を攻撃し、『ヘル・ゲイナー』でダイレクトアタックを仕
掛けるつもりか……だが、俺の場には『くず鉄のかかし』がある。

『マリシヤス・エッジ』の攻撃を『くず鉄のかかし』で防げば、攻
撃力1600の『ヘルゲイナー』の攻撃を止める事が出来る……）」

霸王

「『ヘル・ゲイナー』のモンスター効果発動」

遊星

「何!？」

霸王

「『ヘル・ゲイナー』を、2ターン先の未来へと飛ばす」

ヘル・ゲイナーが霸王の場から消える。

遊星

「（自ら自分の攻撃モンスターを減らした!?!）」

霸王

「これにより、『マリシヤス・エッジ』は一度のバトルフェイズ中、2度の攻撃を行う事が出来る」

遊星

「何だと!?!」

霸王

「『マリシヤス・エッジ』で『ジャンク・ウォリアー』を攻撃!！」

マリシヤス・エッジが両腕に装備されている針をジャンク・ウォリアーに投げつける。

遊星

「トラップ発動!『くず鉄のかかし』!相手モンスターの攻撃を一度だけ無効にする!」

マリシヤス・エッジの攻撃はジャンク・ウォリアーの目の前に現れ

たくず鉄のかかしによって防がれる。

霸王

「だが、『マリシヤス・エッジ』はこのターンもう一度攻撃できる」

遊星

「くっ！？（くず鉄のかかしは1ターンに一度しか使えない……）」

霸王

「『マリシヤス・エッジ』で『ジャンク・ウォリアー』を攻撃！！」

マリシヤス・エッジが両腕に装備されている針をジャンク・ウォリアーに投げつける。

その針はジャンク・ウォリアーに直撃し、ジャンク・ウォリアーは爆散する。

霸王

「『ニードル・バースト』！！」

遊星

「ぐああっ！？」

遊星

LP 1900 - 300 = 1600

霸王

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

遊星

「（この痛みはこれまでの闇の決闘とは比べ物にならない……俺が負

けたら、奴はフェイト達にこの攻撃を……それだけはさせない！この俺の身を犠牲にしたとしても！！俺のターン！ドロー！！『ハイパー・シンクロン』を攻撃表示で召喚！！」

ハイパー・シンクロン ATK 1600

遊星

「トラップ発動！『ロスト・スター・ディセント』！！墓地のシンクロモンスターを守備表示で特殊召喚！！蘇れ！『ジャンク・ウォリアー』！！」

遊星の場にジャンク・ウォリアーが再び現れる。

遊星

「『ロスト・スター・ディセント』の効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効果され、表示形式の変更は出来ず、守備力は0となり、レベルが一つ下がる」

ジャンク・ウォリアー DEF 1300 0 レベル 5 4

遊星

「行くぞ！レベル4となった『ジャンク・ウォリアー』にレベル4の『ハイパー・シンクロン』をチューニング！！」

ハイパー・シンクロンが緑色の輪となりジャンク・ウォリアーを包み込み消える。

遊星

「集いし願いが新たに輝く星となる！光指す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ！『スターダスト・ドラゴン』！！」

スターダスト・ドラゴン ATK2500

遊星

「さらに、『ハイパー・シンクロン』をシンクロ素材とした事で、『スターダスト・ドラゴン』の攻撃力は800ポイントアップする
！！」

スターダスト・ドラゴン ATK2500+800=3300

遊星

「バトル！『スターダスト・ドラゴン』で『マリシヤス・エッジ』を攻撃！！響け！『シューティング・ソニック』！！」

スターダスト・ドラゴンの口から放たれた銀色の音波がマリシヤス・エッジに向かって行く。

霸王

「トラップ発動！『イービル・バリア』。自分の場の『E・HERO』への攻撃を一度だけ無効にする」

スターダスト・ドラゴンの攻撃はマリシヤス・エッジには届かずに消えてしまう。

遊星

「くっ……ターンエンド」

霸王

「ドロー。魔法カード『イービル・ドレイン』を発動。このカードは自分の手札1枚につき、相手の場のモンスター一体の攻撃力を3

00ポイント下げる」

遊星

「何!？」

霸王

「俺の手札は2枚。よってスターダスト・ドラゴンの攻撃力は60ポイントダウンする」

スターダスト・ドラゴン ATK3300 DEF600=2700

霸王

「そして、下げた分の攻撃力を自分の場のモンスターの攻撃力に加える」

E・HEROマリシヤスエッジ ATK2600+600=3200

霸王

「そして、手札から速攻魔法『サイクロン』を発動!!お前の場の伏せカードを破壊する」

霸王の場に現れた竜巻が遊星の場の伏せカードを破壊する。

遊星

「くず鉄のかかしが……」

霸王

「『マリシヤス・エッジ』で『スターダスト・ドラゴン』を攻撃!『ニードル・バースト』!!」

マリシヤス・エッジがスターダスト・ドラゴンに向けて針を投げつける。

遊星

「『ハイパー・シンクロン』をシンクロ素材とした事で、『スターダスト・ドラゴン』は戦闘では破壊されない!!」

霸王

「だが、ダメージは受けてもらっ」

遊星

「ぐあああっ!？」

遊星 LP 1600-500=1100

霸王

「『マリシヤス・エッジ』の2度目の攻撃。『ニードルバースト』!!」

マリシヤス・エッジが続けてスターダスト・ドラゴンに攻撃する。

遊星

「うあああっ!？」

遊星 LP 1100-500=600

後ろでその様子を見ていたフェイトは涙を流していた。

フェイト

「（もう止めて……このままじゃ……遊星が死んじゃう……）」

しかし、そんなフェイトがそう思っても遊星は倒れる事は無かった。

霸王

「ターンエンド」

遊星

「ドロー！（来た！この状況を逆転できるカードが！）俺はカードを2枚伏せ、ターンエンド」

霸王

「ドロー。このタイミングで、『ヘルゲイナー』が戻ってくる。そして『マリシャス・エッジ』で『スターダスト・ドラゴン』を攻撃！『ニードル・バースト』！！」

マリシャスエッジがスターダストドラゴンに針を投げつける。

もうくず鉄のかかしは無く、遊星には防ぐこの攻撃を受け切る事は不可能だと、誰もがそう思った時、

遊星

「リバースカードオープン！！」

遊星の逆転の1枚が開かれたのだ。

遊星

「罠カード『バスター・モード』！！このカードの効果により、俺の場の『スターダスト・ドラゴン』を『スターダスト・ドラゴン／バスター』にモードチェンジさせる！！」

スターダスト・ドラゴンが光に包まれ、青い鎧を装着したスターダスト・ドラゴンノバスターとなる。

スターダスト・ドラゴンノバスター A T K 3 0 0 0

霸王

「だが、攻撃力は『イービル・ドレイン』の効果で攻撃力の上がつた『マリシヤス・エツジ』の方が上だ！」

遊星

「まだだ！トラップ発動！『スキル・サクセサー』！このカードの効果により、『スターダスト・ドラゴンノバスター』の攻撃力は400ポイントアップする！！！」

スターダストドラゴンノバスター A T K 3 0 0 0 + 4 0 0 〓 3 4 0 0

遊星

「『スターダスト・ドラゴンノバスター』で迎撃！！！」

スターダストドラゴンノバスターが口から銀色の音波を発射し、マリシヤスエツジを迎撃する。

霸王

「くっ！？」

霸王 L P 3 3 0 0 〓 2 0 0 〓 3 1 0 0

遊星

「霸王！例えお前が何者であろうと、どんな力を使おうと、俺は…」

…いや、俺達は負けない！本当の戦いはこれからだ！！」

第十六話 恐怖の霸王！（後書き）

次回予告

遊星

「『スターダストドラゴン/バスター』を召喚した俺は霸王に反撃し、徐々に形勢を逆転させて行く。そして、追い詰められた霸王は

……

次回！遊戯王5D's Magical A's『発動！超融合！！闇の書覚醒！！』

ライディングデュエルアクセレーション！！」

第十七話 発動！超融合！！闇の書覚醒！！（前書き）

少し間が空いてしまいましたが、何とか投稿できました！！

第十七話 発動！超融合！！闇の書覚醒！！

遊星と霸王のデュエルは続く。

遊星 LP 600

霸王 LP 3100

霸王

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンド」

遊星

「俺のターン！バトル！『スターダスト・ドラゴンノバスター』で『ヘル・ゲイナー』を攻撃！！『アサルト・ソニック・バーン』！
！」

スターダスト・ドラゴンノバスターがヘル・ゲイナーを攻撃し、破壊する。

霸王

「ぐっ！？」

霸王 LP 3100 | 1400 || 1700

遊星

「（『スターダスト・ドラゴンノバスター』には、魔法、罠、効果モンスターの効果が発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する効果がある。だが、俺のライフは600。奴のカードを無効にしたら、俺

の場はがら空になる。奴の手札にモンスターがあれば、そこで決着が着く……なら！）カードを1枚伏せ、ターンエンド」

霸王

「ドロー、トラップ発動！『イービル・リボーン』！墓地の『E・HERO』と名の付いたモンスター一体を攻撃力を500ポイントアップさせて特殊召喚する！蘇れ！『マリシヤス・エッジ』！！」

霸王の場に再びマリシヤス・エッジが現れる。

E・HEROマリシヤス・エッジ ATK2600+500=3100

遊星

「くっ！？攻撃力が『スターダスト』を上回った！？」

霸王

「だが、この効果で召喚されたモンスターはこのターン攻撃できない。ターンエンド」

遊星

「ドロー！！墓地の『スキル・サクセサー』の効果発動！！墓地のこのカードを除外する事で俺の場のモンスター一体の攻撃力を800ポイントアップさせる！！」

スターダスト・ドラゴン/バスター ATK3000+800=3800

遊星

「行くぞ！！『スターダスト・ドラゴン/バスター』で、『マリシ

ヤス・エッジ』に攻撃！！『アサルト・ソニック・バーン』！！』
スターダスト・ドラゴン／バスターが口から銀色の音波をマリシャ
ス・エッジに向けて発射する。

その攻撃はマリシャス・エッジを直撃したが、マリシャス・エッジ
は破壊されなかった。

遊星

「何！？何故『マリシャス・エッジ』を破壊できない！？」

遊星が動揺する。

霸王

「『イービル・リボーン』で特殊召喚したモンスターは守備力を5
00ポイント下げる事で戦闘での破壊を無効に出来る」

マリシャス・エッジ DEF1800ー500＝1300

遊星

「だが、ダメージは受けてもらう！」

霸王 LP1700ー700＝1000

遊星

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド。（俺のこの伏せカード。
『ガード・ブロック』。奴が次に何かを仕掛けたとしても、『スタ
ーダスト』をリリースしてそれを阻止。そして、攻撃をしたとして
も、このカードで防げば、奴の攻撃を凌げる……）」

霸王

「ドロー」

霸王がドローした時、上空の『闇の書』が怪しく光る。

霸王

「どうやら、『闇の書』の完成が近づいたようだ」

遊星

「何！？どういう意味だ！？」

霸王

「どうやら、騎士共の心の闇は想像以上に深かったようだな」

遊星

「心の闇……だと！？」

霸王

「手札から魔法カード『タイプ・チェンジ』を発動。このターンの間、選択したモンスターの種族を、自分の選択した種族に変更する。俺は『スターダストドラゴン／バスター』の種族をドラゴン族から岩石族へと変更する」

スターダストドラゴン／バスター ドラゴン族 岩石族

遊星

「『スターダスト』の種族を変える！？何のつもりだ！？」

霸王

「手札を1枚墓地へ送り、見せてやろう、心の闇が造り出した最強

の力の象徴を……」

霸王から黒い靄のような物が吹き出し、上空に浮いている『闇の書』に吸収される。

霸王

「絶対無敵！究極の力を解き放て！！発動せよ！『超融合』！！」

フィールド全体に漆黒の渦が現れる。

シグナム

「あ……あれは……何故……奴が……」

霸王のカードを見たシグナムがバインドに縛られながらも驚く。

シャマル

「私達が……完成させたカードを……」

遊星

「何！？完成させただと！？」

霸王

「このカードは、かつて『遊城十代』が霸王となった際に完成させた究極の融合カード。記憶では存在していたが作成することはほぼ不可能だった……だが、未完成の『超融合』を具現化させるのに成功し、騎士達を使い、完成させた……」

遊星

「異世界での巨大生物の魔力が抜き取られ続けていたのは知っていた……だがそれは全て『闇の書』に吸収されたんじゃないかかったとい

うのか!？」

霸王

「騎士達が集めた魔力は全てこの『超融合』に吸収された。完成したこの力を思い知るがいい!!」

遊星

「新たな融合カードか!？だが、『スターダスト・ドラゴン/バスター』の効果発動!!このカードをリリースする事で、魔法、罠、モンスター効果を無効にして破壊する!!」

遊星がスターダスト・ドラゴン/バスターをリリースしようとするが、スターダストドラゴン/バスターは場から消えずに留まっており、超融合も無効にならなかった。

遊星

「何!？何故、そのカードの発動が無効化されない!？」

霸王

「無駄だ。『超融合』の発動に対してカウンターをする事は出来ない。完全なる勝利を導くための絶対的な力!その力の前には、あらゆる物は無力!!」

遊星

「無敵の融合カードだ!？だが、お前の場にはモンスターが一体のみ、融合素材は手札に……」

霸王

「『超融合』は融合素材はフィールド上のカードだけだ。」

遊星

「フィールド上のカード!?……まさか!？」

霸王

「そのまさかだ……俺は自分の場の『マリシヤス・エッジ』と貴様の場の岩石族となった『スターダスト・ドラゴン/バスター』を超融合——!」

マリシヤス・エッジとスターダスト・ドラゴン/バスターが黒い渦の無効へと消える。

霸王

「出ですよ!!『E・HEROダーク・ガイア』!——!」

E・HEROダーク・ガイア ATK?????

遊星

「攻撃力が決まっていない?」

霸王

「『ダーク・ガイア』の攻撃力は融合素材とした、悪魔族、岩石族モンスターの攻撃力の合計となる」

E・HEROダーク・ガイア ATK5600

遊星

「この局面で攻撃力5600だと!?（だが、俺の場には『ガード・ブロック』が伏せられている……このターンは……）」

そこまで考えた遊星の思考に別の事が浮かんだ。

遊星

「（『闇の書』は過去に何度も悪意ある改変を受け、歪んでしまった。外部からの制御は出来ず、全てを滅ぼすまで止まらない呪われた魔導書。）」

今まで聞かされていた事が妙に引っ掛かった。

霸王

「『ダーク・ガイア』の攻撃！！」

ダーク・ガイアが攻撃態勢に入り、頭上に巨大な隕石を出現させる。

遊星

「（歪んでしまった根源を探し出し、正しい方向に戻せば……しかし、どうすれば……）」

霸王

「『ダーク・カタストロフ』！！」

ダーク・ガイアが頭上の隕石を無数の破片に砕き、遊星に向けて落下させる。

フェイト

「遊星！！」

フェイトが遊星の名を叫ぶ。

遊星

「（奴は、このデュエルが始まる前に言った。『シグナー』である

俺を取り込む事で『闇の書』は全てを超越する力を得ると。なら、
一か八かの賭けだ!!」

遊星はリバースカードを発動させなかった。

遊星

「ぐあああつ!!」

遊星はその攻撃をまともに受けた。

遊星 LP 60015600=0

遊星はその場で膝を付く。

霸王

「デュエルは終わった。貴様の敗北だ」

霸王が超融合のカードを闇の書に向けて掲げる。

超融合のカードが『闇の書』に吸収される。

霸王

「お前達も『闇の書』の糧となるがいい」

霸王が仮面の戦士達に合図する。

それを見た仮面の戦士達はシグナムのリンカーコアを『闇の書』に
吸収させた。

シグナム

「…………貴様…………我々を裏切ったのか!？」

霸王

「裏切った?何の事だ?」

ヴィータ

「とぼけんじゃねえよ…………あたし達に協力して…………はやてを助ける
つて…………言っただじゃねえかよ…………」

ヴィータのその言葉を霸王は一蹴する。

霸王

「そんな事を約束した覚えは無い。貴様等の勝手な解釈を俺に押し
付けるな。俺の目的は最初から『闇の書』の完成だけだ。お前達の
主の事など知った事か」

シグナム

「貴様…………」

シグナムが怒りを露にする。

霸王

「自分の無力さを呪い消えるがいい…………愚かなプログラムども…………」

霸王がそう言うと、シグナム達のリンカーコアは完全に吸収され、
シグナム達は姿を消した。

遊星

「貴様…………シグナム達に何を…………!?!」

霸王

「貴様が気にする事ではない。お前もすぐに消える」

霸王が遊星に右手を向ける。

霸王の右手から黒い渦の様な物が現れ、遊星を拘束する。

遊星

「ぐっ！？ぐあああっ！？」

そして、遊星も闇の書に吸収された。

それと同時にザフィーラが救援に現れる。

ザフィーラが仮面の戦士を攻撃するが、その攻撃は簡単に防がれた。

霸王

「そうか……まだ残っていたか……」

ザフィーラもシグナム達と同じようにリンカーコアを抜き取られ、その場に倒れてしまう。

霸王

「『闇の書の終焉』を今ここに始める……」

霸王の言葉を聞いた仮面の戦士は準備を開始する。『闇の書の終焉』を迎えるために。

一方、病室にいたはやては謎の不快感に襲われ、目を覚ました。

はやて

「みんな……！？遊星さん……！？」

霸王

「あの小娘達はどうした？」

仮面の戦士

「お前のバインドを破った直後に四重のバインドとクリスタルケイジをかけた。抜け出すのに数分はかかる」

仮面の戦士が説明するが、霸王はなのは達の事など、眼中に無いのか、興味を示さなかった。

仮面の戦士はなのはとフェイトの姿を写し、はやてをその場に召還する。

はやて

「なのはちゃん！？フェイトちゃん！？何なん？何なんこれ……！？」

空中に張り付けにされているヴィータ、はやての目の前で倒れてい

るザフィーラを見たはやてが声を上げる。

なのは（擬態）

「君は病気なんだ。『闇の書の呪い』って病気」

フェイト（擬態）

「もうね、治らないんだ」

はやて

「え!？」

なのは（擬態）

「闇の書が完成しても君の体は治らない」

フェイト（擬態）

「君が救われる事は無いんだ」

はやて

「そんなん……ええねん……ヴィータを離して。ザフィーラに何したん……!？」

なのは（擬態）

「この子達ね、もう壊れちゃってるんだ。私達がこつする前から」

フェイト（擬態）

「とつくの昔に壊された『闇の書』の力をまだ使えろと思ひ込んで、無駄な努力を続けてたんだ」

はやて

「無駄って何や!？シグナムは!？シャルは!？」

擬態した二人が後ろの方を見る。

そこには、シグナムとシャルルが着ていた服だけが残されていた。

なのは（擬態）

「壊れた機械は役に立たないよね？」

フェイト（擬態）

「だから、壊しちゃおう」

はやて

「なっ……！？そんな……やめてえ……！！」

はやてが叫ぶ。

なのは（擬態）

「やめて欲しかったら」

フェイト（擬態）

「力づくでどうぞ」

二人の右手が怪しく光る。

はやて

「なんで……なんでやねん……！！なんでこんな……！！」

なのは（擬態）

「ねえ、はやてちゃん」

フェイト（擬態）

「運命って残酷なんだよ」

はやて

「やめて……やめて……やめてええええっ！！！」

はやての叫び声が夜の空に響く。

そんなはやての願いは叶わず、ヴィータとザフィーラは消滅してしまふ。

バインドとクリスタルケイジを破ったのはとフェイトがはやての元へ向かうがもう手遅れだった。

なのは達に擬態した仮面の戦士達の行為にはやての悲しみと怒りがはじけ、その思いに呼応した闇の書がはやての元に現れる。

その様子を見ていた霸王が声を上げる。

霸王

「遂に！遂に来た！！長い間失われていた俺の力が遂に完成した！俺の……霸王の悲願が回帰する時が来た！！」

その声は遊星と戦っていたときとはまるで別人のようだった。

霸王

「さあ、八神はやて。お前の手で、『闇の書』の封印を解放しろ！！」

ビルの屋上が爆発し、ドス黒い波動が天に向かって延びた。

そしてその波動の中心にはやてが浮いていた。

目は虚ろになり、肌も色が抜けたように真っ白になっていた。

はやて

「我は『闇の書』の主なり。この手に力を……」

はやてが機械の様に言った。

その言葉に呼応するかのように、はやての手に『闇の書』が現れる。

はやて

「封印……解放……」

『闇の書』

『解放』

『闇の書』が封印を解放する。

幼いはやての体は大人の女性の体へと急激に成長し、その体を無数の赤いベルトの様な物が覆い、茶色の髪は背中程の長さへと伸び、色は銀色へと変化する。そして鋭くなった目は金色に輝いていた。さらに、『闇の書』が遊星を取り込んだ所為か、左頬に遊星のマークと同じ模様が浮かび上がっていた。

その様子になのはとフェイトは息を飲む。

闇の書の意志

「また、全てが終わってしまった……一体幾度、こんな悲しみを繰

り返せばいい……」

闇の書の意志は涙を流し、すべてが終わってしまった悲しみに俯く。
繰り返される悲しみと、またも主を失う痛み。

なのは

「はやてちゃん!!」

フェイト

「はやて……」

必死で呼びかけるなのはたちに、闇の書の意志は静かに告げ、右手を天に掲げる。

闇の書の意志

「我は闇の書、我が力の全ては、主の願いのそのままに」

巨大な広域攻撃魔法『デアボリックエミッション』の光弾が、その頭上に発生していた。

第十七話 発動！超融合！！闇の書覚醒！！（後書き）

次回予告

遊星

「『闇の書』に取り込まれた俺は、闇の書の歪みを探す。そして、俺は『闇の書』の過去を知る事になる……」

次回遊戯王5D's Magical A's 『闇の書の歪み』

ライディングデュエルアクセレーション！！」

第十八話 闇の書の歪み（前書き）

今回はセリフより、文章が多めです。

若干ネタ切れ感がしますが、暖かい目で見てくださいと嬉しいです。

第十八話 闇の書の歪み

闇の書の意志

「デアボリックエミッション……闇よ染まれ……」

市街地の結界内では、闇の書の意志が完全に目覚めを終え、なのはたちに容赦のない攻撃をしかけていた。

範囲内すべてを魔力爆撃するデアボリックエミッションから、『ソニックフォーム』で防御力が落ちているフェイトを守るなのは。

闇の書の意志は、涙を落としながらそれを見つめていた。

遊星

「……！？」

『闇の書』に取り込まれた遊星は真っ黒な空間にいた。

遊星

「そうか……俺は『闇の書』に……だとすると、ここは『闇の書』の中なのか？」

辺りを見回すが、そこには遊星しかいなかった。

遊星

「シグナム達は……取り敢えず、これからどうするか……」

遊星は闇の中を歩き始めた。

辺り一帯が闇であるにも関わらず、遊星は進んでいた。

わかるのだ。

自分がどう進めばいいかが。

遊星

「これは……!？」

進んだ先に見えたのは『闇の書』を持っている一人の男だった。

遊星

「これは……記憶!？」

男

『これを使い、俺は最強になれる……!!』

男が消え、色々な人間が『闇の書』を使い、その度に滅んでいくのが見えた。

最強の力を得ようとする者。

全てを支配しようとする者。

愛する物を守ろうとする者。

多くの人が『闇の書』を使い、そして滅んでいった。

『闇の書』の中の記憶が映像となって遊星の前に現れたのだ。

遊星

「『闇の書』は最初から『闇の書』なんて名前じゃない。全てを滅ぼし、悪意ある改変を受け、そして、そう呼ばれるようになった……
…本当の名は……」

さらに映像が変わり、はやての姿が映し出される。

幼い頃に両親を亡くし、ずっと一人で暮らしていたはやて。

そして、はやてが9才の誕生日を迎えたその瞬間、本棚にあった、鎖で封をされた一冊の本が輝き出す。

突然の事態におびえるはやてに、鎖の封を破ったその本は、はやてに『封印を解除します』と静かに告げた。

遊星

「これは……『闇の書』の……そして、はやての……」

はやては第一の覚醒の際に『闇の書の声』を聞き、自らが受け取った力と使命を漠然とながら知っていた。

闇の書の主は、すなわち守護騎士たちの主。

主は守護者の面倒を見るものと、騎士たちの衣食住の世話を申し出るはやて。

住むところはあるし、料理は得意だと、騎士一同の衣服購入を申し出る。

戸惑いつつも主の命に従い、守護騎士達は、はやての世界で、はやての家で家族のように寝食を共にする暮らしを始めた。

はやては一同に、ごく一般的な家事手伝い以外の命は一切下さず、むしろ騎士達の世話を楽しんですらいるようだった。

元々、順応性の高いシャルは、瞬く間にはやてとともに家事全般をこなすお手伝い係に。

当初は新たな主にさして興味を示さなかったヴィータも、自分を可愛がり、色々な事を教えつつも甘やかすはやてに大いに甘えるようになった。

ザフィーラは物静かで頼もしいペットとして、シグナムは一家を守る立場として、家庭内での役割が決まっていた。

はやてを抱きかかえ、テラスから夏の星を見上げるシグナム。

そんな何気ないある日の夜、シグナムははやてに問う。

闇の書の蒐集を行わなくて、本当に良いのかと。

闇の書の真の主となれば、はやては絶対たる力を手にいれ、それを自在に使うことができる。

不自由な足を治すこともたやすいはず。そう告げるシグナムに、はやては笑って返す。

自分が闇の書の蒐集を命ずれば、なんの関係も罪もない誰かに、迷惑をかけることになってしまう。

自分のわがままで人に迷惑をかけるのは良くない。

そして、自分は今の暮らしになんの不满もない……と笑う。

しかし、冬が近づく秋口に異変が起きた。

不自由な足の治療のためにはやてが通っていた病院で、シグナムたちを『はやての家族』と認めた石田医師が、はやての病気の真実と現在の進行状況を告げたのだった。

原因不明の麻痺。足先から始まった麻痺がいまや膝を越えて、少しずつ上に上がってきていること。

この数ヶ月は特に進行が早く、このままでは内臓機能の麻痺……つまり、『死』が迫ってきているということ。

その事実を告げられたシグナムとシャルマルは真実にたどり着く。

『闇の書の呪い』

闇の書の、抑圧された強すぎる魔力が、リンカーコアが未成熟なはやての体を蝕み、健全な肉体機能どころか生命活動さえ阻害している。

それが現在の下半身麻痺という結果につながり、命さえ奪おうとしている。

そして、第一の覚醒を迎えたことで、それは加速した。

まるで、『闇の書』の完成を急かすかのように。

はやての危機に、涙ながらに激昂するヴィータ。

シャマルの治療魔法も効果がない病気に、なすすべのない一同。

シグナムたちにできる、たった一つの治療法。

それが闇の書の完成であり、はやてを『闇の書の真の主』にすると
いうことだった。

愛しくも優しい主、はやてのために。

守護騎士一同、騎士の誓いを破ってでも、主を救う道を選ぶ。

主への不忠と不義理を心で詫びながら、騎士たちの闇の書のページ
蒐集の戦いが始まったのだった。

遊星

「そんな事が……」

はやてと守護騎士達の事情を少しは知っていたが、ここまで詳しく
は知らなかった。

血は繋がっていなくともはやてと守護騎士達は家族なのだ。

遊星にも、幼い頃からずっと一緒にいたジャックやクロウ、サテラ

イトのみんながいる。

遊星にとって彼等は仲間であり、家族なのだ。

その家族を失う事は自分の身を2つに引き裂かれるよりも辛い事なのだ。

遊星

「待っているはやて！必ず俺が助け出してみせる！！」

遊星は新たな目的を定め、闇の中を進んでいった。

『闇の書』の歪みを正すのではなく、歪みを正すと同時にはやてと守護騎士達をも救ってみせると。

デアボリックエミッションを防ぎ、市街に隠れるのはとフェイト。フェイトはバリアジャケットを『ソニックフォーム』からノーマル状態に戻し、戦略を考える。

ユーノとアルフが合流するが、闇の書の意志は隠れたのはたちを逃がさないため、封鎖領域を展開する。

そして、結界内では激しい戦闘が続いていた。

ユーノとアルフのバインドをもつともせず、なのはとフェイトのバスター・スマッシュャーも受けきる闇の書の意志。

闇の書の意志の射撃魔法『ブラッディ・ダガー』の狙撃を回避したなのはたちを、さらなる驚異が襲う。闇の書の意志のミッドチルダ式の魔法陣から生成されるそれは、なのはの『スターライトブレイカー』だった。

アルフはユーノを、フェイトはなのはを抱きかかえて、闇の書の意志から離脱する。

なのはがリンカーコアを吸収された際にコピーされた魔法。

かつてライバルだった時になのはによって至近距離からの直撃を受けたことのあるフェイトは、『スターライトブレイカー』の危険性を理解していた。

そして『スターライトブレイカー』の欠点である「チャージ終了までの間は移動ができなくなる」という事実も掴んでいたフェイトは、回避距離を取るために、全速での避難を選んだのだった。

バルディッシュ

『左方向300ヤード、一般市民がいます』

バルディッシュにそう伝えられ、急いで救出に向かう二人。

取り残されていたのは、なんとアリサとすずかだった。

なのはとフェイトは二人に気付かずに救出に赴いてしまい、正面から鉢合わせてしまう。

驚く一同だが、その時、闇の書の意志の『スターライトブレイカー』が発動する。

遊星

「ここは……」

闇の中を走っていた遊星がたどり着いたのは、『闇の書』の記憶が映し出される場所ではなかった。

遊星

「やっと、ここまで来れた……」

遊星の目の前には車椅子に座ったはやてが『闇の書』を抱きかかえ、無数の鎖によって拘束されていた。

そして、その隣には黒い鎧を身に纏った者が立っていた。

遊星

「霸王……」

遊星の声に気付いた霸王が遊星の方を向く。

霸王

「お前か……良くここまで来られたな……」

そう呟く霸王は以前遊星達の前に姿を現した時の黒い人影では無く、顔も、鎧にも、全ての部位に色が付いていた。

霸王が氷の様に冷たい金色の目で遊星を見る。

霸王

「何をしにここに来た？」

遊星

「俺ははやてと、守護騎士達と、『闇の書』を救いにここまで来た」

遊星のその言葉に霸王は笑う。

霸王

「お前にそんな事をしている余裕があるのか？」

遊星

「何が言いたい！？」

霸王が遊星の目の前に映像を出す。

そこには海鳴市の結界内ではとフェイトが闇の書の意志と戦闘している所が映っていた。

霸王

「あの小娘達は、今も必死になってアレを止めようとしている」

遊星

「……」

霸王

「お前はあそこにいる小娘と、壊れたプログラム共、そして『闇の書』を救うと言っていたな……それを実現させる事が出来たとしても、それまでにあの小娘共は持つのか？」

遊星は何も言わない。

霸王

「小娘共が消えれば、お前の力によってあの世界は消滅する。そしてお前は、自らの力で奴らを殺してしまった罪をここで永遠に突き付けられて生きていく事になる」

遊星

「……それがどうした？」

遊星が静かに、しかしはっきりと言った。

遊星

「あの二人は強い。俺の力など無くても、あいつを止められる」

霸王

「フン……まあいい。何をしようとも、ここで貴様を始末すれば済む事だ」

霸王が左腕のデュエルディスクを展開させる。

遊星

「そんな事はさせない！ここでお前を倒し、全てを救ってみせる！」

遊星がデュエルディスクを構えると同時に右腕の赤き竜の痣が光る。

遊星&霸王

「デュエル!!」

第十八話 闇の書の歪み（後書き）

次回予告

遊星

「霸王との再戦……今度は負ける訳にはいかない!!」

フェイト

「闇の書の意志との激闘、猛攻の隙を付き、闇の書の意志に反撃した私は……」

遊星

「次回、遊戯王5D's Magical A's『運命の再会！聖夜の贈り物』」

遊星&フェイト

「『ライディングデュエルアクセレーション!!』」

第十九話 聖夜の贈り物（前書き）

次回で遊戯王5D' s Magical A・sも第二十話を迎えます。

そこで、その記念に遊戯王5D' s Magical人気投票をしたいと思います。

詳細は次回の前書きにてお伝えします。

第十九話 聖夜の贈り物

闇の書の意志が放った『スターライトブレイカー』を防ぎ切ったなのはとフェイト。

アースラからの転送魔法で、封鎖領域内の比較的安全な場所へと転送されるアリサとすずかだが、なのはとフェイトは突然の遭遇に複雑な心境を抱く。

万が一に備え、ユーノとアルフにアリサとすずかを守ってもらいつつ、闇の書の意志の元へと向かう二人。

なのは

「見られちゃったね……」

残されたなのはが隣にいるフェイトに話しかける。

フェイト

「うん……でも……」

フェイトが言葉を途切らせる。

なのは

「？」

フェイト

「遊星も……同じ事をしたと思う……」

と、フェイト。

なのは
「にゃはは」

不意になのはが笑う。

フェイト
「え？な、何！？」

なのは
「だってフェイトちゃん、さっきからずっと遊星さんの事ばかり話してるから……」

フェイト
「ええ！？そうかな……？」

なのは
「そうだよ？覚えてないの？」

フェイト
「……／／／」

自分の言った事を思い出したフェイトの顔が赤くなる。

闇の書の意志から一時距離を取った時も、スターライトブレイカーから距離を取るために戦線を離脱した時も遊星の事を話していたようない気がする。

何を話していたかは思い出せなかったが。

なのは

「でも、遊星さんが戻って来るまでは、私達が頑張らないとね」

フェイト

「う、うん……／＼／」

二人は事態を収束させるため、闇の書の意志に懸命に話しかける。

なのは

「（はやてちゃん、そして『闇の書』さん。止まってください！ヴィータちゃん達を傷付けたの、私達じゃないんです！！）」

フェイト

「（シグナム達と、私達は……）」

闇の書の意志

「我が主は、この世界が、自分の愛する物を奪った世界が、悪い夢であつて欲しいと願った。我はただ、それを叶えるのみ。主には、穏やかな夢の中で、永久の眠りを……そして、愛する騎士達を奪った者には、永久の闇を！！」

闇の書の意志が魔法陣を展開させる。

なのは

「『闇の書』さん！！」

闇の書の意志

「お前も、私をその名で呼ぶのだな……」

闇の書の意志が、寂しげな表情をする。

なのは

「え？」

なのはがそう聞き返した刹那、地面から魔導生物が現れ、なのはとフェイトを捕縛する。

闇の書の意志

「それでもいい……」

闇の書の意志が手元の闇の書を開く。

闇の書の意志

「私は、主の願いを叶えるだけだ……」

なのは

「願いを……叶えるだけ……！？そんな願いを叶えて……それではやてちゃんは本当に喜ぶの！？心を閉ざして、何も考えずに、主の願いを叶えるだけの道具でいて、あなたはそれでいいの！？」

闇の書の意志

「我は『闇の書』……ただの道具だ」

闇の書の意志が涙を流す。

なのは

「だけど、言葉を使えるでしょ！？心があるでしょ！？そうでなくやおかしいよ……本当に心が無いんなら泣いたりなんかしないよ！」

闇の書の意志

「この涙は主の涙。私は道具だ。悲しみなど……無い」

闇の書の意志はそう言い張る。

フェイト

「バリアジャケット・パージ」

バルディッシュ

『ソニックフォーム』

バルディッシュが電子音声と共に金色の閃光を放ち、なのはとフェイトは魔導生物の拘束から抜け出す。

同時にフェイトは『ソニックフォーム』の姿になっていた。

フェイト

「悲しみなど無い？そんな言葉を、そんな悲しい顔で言っただって、誰が信じるもんか！！」

なのは

「あなたにも心があるんだよ。悲しいって言っていていいんだよ！あなたのマスターは、はやてちゃんは、きっとそれに応えてくれる、優しい子だよ！？」

フェイト

「だから、はやてを解放して、武装を解いて！お願い！！」

その直後、街の道路から無数の火柱が上がる。

闇の書の意志

「早いな……もう崩壊が始まったか……私もしきに意識を無くす。そうなれば、すぐに暴走が始まる。意識のある内に、主の願いを叶えたい……」

闇の書の意志がなのはとフェイトの周りに無数の赤いナイフ『ブラッディ・ダガー』を展開させる。

しかし、その攻撃が始まる前にフェイトが『ブラッディ・ダガー』を破壊し、なのはを救出する。

フェイト

「この、駄々っ子!!」

フェイトがバルディッシュを構える。

フェイト

「言う事を……」

次の瞬間、フェイトが闇の書の意志に向かって加速する。

フェイト

「聞けエー!!」

自分の思いを伝えるために斬りかかるフェイト。

闇の書の意志

「お前も、『闇の書』の中で、眠るといい……」

闇の書の意志は、フェイトの攻撃を受け止め、フェイトを「眠り」

へと誘う。

フェイトの体が金色の光に包まれる。

そしてフェイトは、闇の書の内部に吸収されてしまう。

なのは

「フェイトちゃん!!」

なのはが呼びかけるが、フェイトがそれに応える事は無かった。

闇の書の意志

「全ては、安らかな眠りのうちに……」

闇の書の意志が静かに告げた。

遊星

「フェイト!？」

遊星はフェイトの身に何かが起こった事を本能的に察知した。

遊星

「フェイトに何が……」

霸王

「『ワイルド・サイクロン』で、『マックス・ウォリアー』を攻撃

！！『サイクロン・スラッシュ』！！」

ワイルド・サイクロンが背中に装備された羽から竜巻を起こす。竜巻は、マックス・ウォリアーに向かっていく。

遊星

「トランプ発動！！」

霸王

「無駄だ。『ワイルド・サイクロン』が攻撃する時、相手は魔法、罠カードを発動できない」

遊星

「何！？」

ワイルド・サイクロンが起こした竜巻からかまいたちが発射され、マックス・ウォリアーを破壊する。

遊星

「ぐあッ！？」

遊星 LP4000 - 1000 = 3900

霸王

「『ワイルド・サイクロン』が相手に戦闘ダメージを与えた時、相手の場のセットされた魔法、罠カードを全て破壊する」

遊星の場の伏せカード『くず鉄のかかし』が破壊される。

霸王

「どうした？デュエルはまだ始まったばかりだぞ？見せてみる。お前の力を……」

遊星

「くっ！ドローー!!」

引いたカードはジャンク・シンクロンだった。

遊星

「手札から魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動!!手札の『ボルト・ヘッジホッグ』を墓地に送り、デッキからレベル1のモンスター、『チューニング・サポーター』を特殊召喚する!!」

チューニング・サポーター ATK100

遊星

「さらに、ジャンク・シンクロンを通常召喚!!」

ジャンク・シンクロン ATK1300

遊星

「『ジャンク・シンクロン』の効果で、墓地の『ボルト・ヘッジホッグ』を特殊召喚!!」

ジャンク・シンクロンがボルト・ヘッジホッグを呼び出す。

ボルト・ヘッジホッグ DEF800

遊星

「さらに、『チューニング・サポーター』は、シンクロ素材として

使用する時、レベルを2として扱う事が出来る」

チューニング・サポーター レベル1 2

遊星

「そして、レベル2となった『チューニング・サポーター』にレベル3の『ジャンク・シンクロン』をチューニング!!」

ジャンク・シンクロンが緑の輪となり、チューニング・サポーターを包み込み、消える。

遊星

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光指す道となれ!シンクロ召喚!出でよ!『ジャンク・ウォリアー』!!」

ジャンク・ウォリアー ATK2300

遊星

「『ジャンク・ウォリアー』がシンクロ召喚に成功した時、自分の場のレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計を『ジャンク・ウォリアー』に加える!『パワー・オブ・フェローズ』!!」

ジャンク・ウォリアー ATK2300+800=3100

遊星

「さらに、『チューニング・サポーター』がシンクロ召喚の素材として使用され、墓地に送られた時、デッキからカードを1枚ドロースする!!こいつには出し惜しみは無しだ!行け!『ジャンク・ウォリアー』!!『スクラップ・フィスト』!!」

ジャンク・ウォリアーがワイルド・サイクロンを右腕のガントレットで粉碎する。

霸王 LP4000Ⅰ1200Ⅱ2800

遊星

「霸王！俺はお前を倒し、はやてと守護騎士を救って見せる！！」

霸王

「戯れ言をほざくな。貴様の力など、俺の足下にも及ばぬ力だ。その力の差を今から貴様の身に叩き込む！！」

第十九話 聖夜の贈り物（後書き）

次回予告

フェイト

「『闇の書』に取り込まれてしまった私。そこで出会ったのは……」

次回、遊戯王5D、sMagicalA、s『運命の再会!!』

ライディングデュエルアクセレーション／／／

第二十話 運命の再会！（前書き）

遊戯王5D's Magical A's 第二十話記念キャラクター
人気投票！！

～ルール～

『遊戯王5D's Magical』及び『遊戯王5D's Magical A's』の中で好きなキャラを三人選んで、その中の1位、2位、3位を決めてください。

1位は3ポイント、2位は2ポイント、3位は1ポイントで、ポイント数が一番高いキャラクターがランキング一位となります。

投票方法は感想、メッセージボックスどちらでも構いません。

できればそのキャラが好きな理由も一緒に送っていただけると嬉しいです。

なお、同じ方からの投票はたくさん投票しても一票と致しますので、ご注意ください。

期限は7月29日から8月20日までです！

皆さんの投票をお待ちしております！！

第二十話 運命の再会！

フェイト

「……ここは？」

『闇の書』の中で、フェイトは目を覚ます。

そこは幼い頃を過ごしたミッドチルダの山中、その中に停泊した時の庭園の一室だった。

温かな朝の光の差す、懐かしい室内。

フェイトの隣には『子犬フォーム』のアルフが寝ていた。

そして、その隣にもう一人、少女が寝ていた。

フェイト

「え……！？」

フェイトは驚いた。

寝ていたのはフェイトと同じ顔の少女アリシア・テストロッサだったからだ。

困惑するフェイトだったが、突然ドアをノックする音によって現実を引き戻された。

????

「フェイト、アリシア、アルフ、朝ですよ」

部屋をノックして入ってきた自分の家庭教師であり世話係だったリ
ニスの姿を見て、フェイトの驚きと困惑はさらに深まるのだった。

遊星 LP3900 霸王 LP2800

遊星

「ターンエンド」

霸王

「ドロー、魔法カード『ダーク・リカバリー』を発動。墓地の『ダ
ーク・フュージョン』と、『ダーク・フュージョン』に使用した融
合素材モンスターを一体を手札に戻す」

霸王は『ダーク・フュージョン』と『フェザーマン』を手札に戻す。

霸王

「そして、『ダーク・フュージョン』を発動！手札の『スパークマ
ン』、『クレイマン』を融合！現れる！『E・HEROライトニ
ング・ゴーレム』！！」

E・HEROライトニング・ゴーレム ATK2400

霸王

「『ライトニング・ゴーレム』の効果発動。1ターンに一度、モン
スター一体を破壊する」

遊星

「何!？」

霸王

「『ジャンク・ウォリアー』を破壊!!『ボルテック・ボム』!!」

ライトニング・ゴーレムが黒い雷球をジャンク・ウォリアーに投げつける。

ジャンク・ウォリアーはその雷球の直撃を受け、爆散する。

遊星

「『ジャンク・ウォリアー』!!」

霸王

「『ライトニング・ゴーレム』の攻撃。『ヘル・ライトニング』!!」

ライトニング・ゴーレムの右手から黒い稲妻が発射され、ボルト・ヘッジホッグが破壊された。

霸王

「ターンエンド」

遊星

「（やはり、こいつは強い。有利だった俺をたった1ターンで逆転された……）」

遊星は自分の手札を見る。

遊星

「（俺の手札は3枚。『シールド・ウイング』、『スピード・ウォリアー』、『レベル・ステイラー』。これらのカードを守備表示で出しても、すぐに破壊される……なら、このドローに賭ける！！）俺のターン！！」

遊星は自分の全てを賭けてカードをドローした。

遊星

「（よし！）手札の『レベル・ステイラー』を墓地に送り、チューナーモンスター『クイック・シンクロン』を特殊召喚！！」

クイック・シンクロン ATK700

遊星

「さらに、『スピード・ウォリアー』を通常召喚！！」

スピード・ウォリアー ATK900

遊星

「行くぞ！レベル2の『スピード・ウォリアー』にレベル5の『クイック・シンクロン』をチューニング！！」

クイックシンクロンが五つの緑の輪となりスピードウォリアーを包み、消える。

遊星

「集いし思いがここに新たな力となる！光指す道となれ！シンクロ召喚！燃え上がれ！ニトロ・ウォリアー！！」

ニトロ・ウォリアー ATK 2800

遊星

「『ニトロ・ウォリアー』で『ライトニング・ゴーレム』を攻撃！
」

ニトロ・ウォリアーが背部のブースターを噴かし、ライトニング・
ゴーレムに向かっていく。

遊星

「ダイナマイト・ナックル!!」

緑色のオーラを纏ったニトロ・ウォリアーの両拳がライトニング・
ゴーレムを粉碎する。

霸王 LP 2800 | 400 || 2400

霸王

「.....」

遊星

「ターンエンドだ.....」

霸王

「この程度か.....お前の力は.....」

遊星

「何!?!」

霸王

「行くぞ！！俺のターン！！」

遊星

「くっ！？（何かが……来る……！？）」

アリシア

「母様～おはよう～！！」

アルフ

「プレシア～おはよう～！！」

アリシアとアルフが大広間でお茶を飲んでいたプレシアに朝の挨拶をする。

プレシア

「アリシア、アルフ、おはよう」

プレシアも二人に挨拶をする。

リニス

「プレシア、困りましたよ。今日は嵐か雪になるかもしれません」

プレシア

「？」

プレシアはリニスの言葉に首を傾げる。

リニス

「ほら、フェイト」

リニスが柱の影に隠れているフェイトを呼んだ。

呼ばれたフェイトはビクビクしながら柱の影から姿を見せた。

プレシア

「フェイト、どうしたの？」

リニス

「どうも、何か怖い夢でも見たらしくて、今が夢か幻だと思っているみたいですよ？」

リニスが説明する。

アリシア

「フェイト、勉強のし過ぎとか？」

アルフ

「ありえる」

アリシアとアルフがからかう。

プレシア

「フェイト、いらっしやい」

プレシアが手招きする。

フェイト

「……」

フェイトは戸惑いつつも、プレシアの元に歩いていった。

プレシアは暗い表情を浮かべているフェイトの顔に両手を添えようと手を伸ばすが……

フェイト

「……！？」

フェイトは過去の恐怖から、身を引いてしまう。

プレシア

「怖い夢を見たのね……でももう大丈夫よ。母さんもリニスもアリシアも、みんなあなたのそばにいるわ」

アルフ

「プレシア～あたしも～」

アルフが不満の声を上げる。

プレシア

「そう。アルフもね」

プレシアが笑う。

今まで見た事の無い母親の笑顔を見て、フェイトの困惑はさらに広がった。

リニス

「まあ、朝食を食べ終わる頃には、悪い夢も覚めるでしょう」

プレシア

「さあ、席に着いていただきますしょう」

アリシア

「はい!!」

皆が朝食を食べているとき、フェイトは一人で考えていた。

フェイト

「（違う。これは…夢だ。母さんは私にこんな風に笑いかけてくれた事は一度も無かった。アリシアも、リニスも、今はもういない…でも…これは……」

プレシア

「ねえ、今日はみんなで街に出ましようか」

アリシア

「わーい!!」

リニス

「いいですねえ」

プレシア

「フェイトには、新しい靴を買ってあげないとね」

アリシア

「あゝフェイトばかりするゝい」

アリシアが頬を膨らませる。

リニス

「魔導試験満点のご褒美ですよ。遊星も褒めてましたよ」

フェイト

「え？遊星が……？」

遊星の名前を聞いたフェイトが驚く。

リニス

「アリシアももっと頑張れば、絶対に満点取れるって遊星が言っていましたよ？」

アリシア

「ホント？」

リニス

「はい。今日は朝から研究所の方に出掛けてしまっていますが、夕方には、帰ってくると思います」

アリシア

「そっかゝ。じゃあ、フェイト、今度の試験まで、補習をお願い」

フェイト

「う…うん……」

プレシアとアリシア、リニスとフェイト。現実では決して揃うことのなかった一同が揃っての穏やかな朝食。あたりまえの家族のように家族での外出や買い物話を微笑みながらする、そんな風景にフェイトは「これが夢である」と思いつつも、涙を落とす。

それは、かつてフェイトがつらい戦いと悲しみの日々の中で、幾度も夢に見た風景そのものなのだった。

霸王

「ドロー！魔法カード『闇の誘惑』を発動！デッキからカードを2枚ドロー。その後、手札から闇属性モンスターを1体をゲームから除外する。俺は『E・HEROネクロ・ダークマン』を除外する」

遊星

「（手札を補充、何かが来る！！）」

霸王

「自分の場にモンスターが存在しない時、手札のこのカードを特殊召喚！『E・HEROヘル・ブラット』！！」

E・HEROヘル・ブラット ATK300

遊星

「このパターン、まさか……」

霸王

「そして『ヘル・ブラット』を生け贄に、現れろ！『マリシヤス・エッジ』……！」

E・HEROマリシヤス・エッジ ATK2600

遊星

「やはり来たか……だが、攻撃力は『ニトロ・ウォリアー』の方が上だ……」

霸王

「さらに魔法カード『ヴィシヤス・クロー』を『マリシヤス・エッジ』に装備。攻撃力が300ポイントアップする」

E・HEROマリシヤス・エッジ ATK2600+300=2900

霸王

「『マリシヤス・エッジ』で『ニトロ・ウォリアー』攻撃！『ニードル・バースト』……！」

マリシヤス・エッジが両腕の針をニトロ・ウォリアーに向けて発射する。

針の直撃を受けたニトロ・ウォリアーは爆散する。

遊星

「ぐああっ……！」

遊星 LP39001100=3800

霸王

「そして、俺のエンドフェイズに墓地の『ヘル・ブラット』の効果により、カードを1枚ドローする」

遊星

「ドロー！『シールド・ウイング』を守備表示で召喚！ターンエンド」

シールド・ウイング DEF900

霸王

「ドロー。『マリシャス・エッジ』で攻撃！」

マリシャス・エッジがシールド・ウイングに向けて針を飛ばす。

遊星

「だが、『シールド・ウイング』は1ターンに2度まで戦闘では破壊されない！」

霸王

「だが、ダメージは受けてもらう」

マリシャス・エッジの針はシールド・ウイングを貫通して、遊星の体に直撃する。

遊星

「ぐああっ！！！！」

遊星の全身に鋭い痛みが走る。

遊星 LP3800I2000=1800

遊星

「まずい……このままでは……俺は本当に負ける……!!」

霸王

「ターンエンド」

第二十話 運命の再会！（後書き）

次回予告

遊星

「霸王の強大な力に追い詰められる俺。奴の強大な力を弱めるためには、奴が封じ込めているはやての意識を取り戻すしか無い！」

フェイト

「『闇の書』の中で出会ったアリシア。彼女は私にずっとここに居ようと誘う……」

遊星

「次回遊戯王5D's Magical A's『それぞれの戦い』」

遊星&フェイト

「『ライディングデュエルアクセレーション!!』」

第二十一話 それぞれの戦い！（前書き）

久々の投稿です！

ちよつと詰め込みすぎたしれないな……

第二十一話 それぞれの戦い！

遊星 LP1800 霸王 LP2400

遊星

「俺のターン……（俺の手札は『調和の宝札』が1枚のみ。このドロでモンスターを引かなければ負ける。だが、奴の場の『マリシヤス・エッジ』は装備魔法『ヴィシヤス・クロー』の効果で攻撃力が2900となっている。そして守備モンスターに攻撃したとき貫通ダメージを与えるという効果を持っている。守備力の低いモンスターを出してもダメージを受け、負ける……だが、俺はこのドロに賭ける！！）ドロー！！」

遊星はドロしたカードを見る。

遊星

「『デブリ・ドラゴン』。召喚時に墓地から攻撃力500以下のモンスターを召喚する効果を持つが、俺の墓地に攻撃力500以下のモンスターは『チューニング・サポーター』しかない……『スターダスト・ドラゴン』へのシンクロ召喚に繋げる事は出来ない。守備表示で出しても貫通ダメージを受けて900のダメージ……残りライフが1800しかない俺のライフは大きく削られる。なら……（手札より『調和の宝札』を発動！！手札の攻撃力1000以下のドラゴン族チューナーを墓地に送る。俺は『デブリ・ドラゴン』を墓地に送り、カードを二枚ドロー！！」

遊星がカードをドロする。

遊星

「俺は『マッシブ・ウォリアー』を攻撃表示で召喚!!」

マッシブ・ウォリアー ATK 600

霸王

「そんな雑魚をこの場で呼び出して何になる?」

遊星

「さらに、俺がモンスターの召喚に成功した事で、手札からこのカードを特殊召喚できる! 来い! 『ワンショット・ブースター』!!」

ワンショット・ブースター DEF 0

遊星

「『マッシブ・ウォリアー』で『マリシヤス・エッジ』を攻撃!!」

マッシブ・ウォリアーがマリシヤス・エッジを攻撃する。

霸王

「迎え撃て。『マリシヤス・エッジ』!」

マリシヤス・エッジが腕に装着された針を向かってくるマッシブ・ウォリアーを攻撃するが、攻撃されたマッシブ・ウォリアーは破壊されずに遊星の場へと吹き飛ばされた。

霸王

「?」

遊星

「『マッシブ・ウォリアー』は1ターンに一度、戦闘では破壊され

ずに、このカードが戦闘を行う事で発生する俺へのダメージは0となる」

霸王

「だとしても、そんなモンスターで攻撃する意味がどこにある？」

遊星

「さらに『ワンショット・ブースター』の効果発動！このカードをリリースする事で、このターン俺のモンスターと戦闘を行ったモンスターを破壊する！」

霸王

「何イ！？」

遊星

「お前の装備魔法『ヴィシヤス・クロー』は戦闘での破壊を無効にできる効果を持つカードだが、効果による破壊は無効に出来ない！」

霸王

「チツ！」

遊星の場にいたワンショット・ブースターがマリシヤス・エッジに向けてマッシブ・ウォリアーを自身の腕とともに飛ばす。

飛ばされたマッシブ・ウォリアーはマリシヤス・エッジに直撃し、マリシヤス・エッジは爆散する。

霸王

「くっ！？」

遊星

「ターンエンド」

霸王

「ドロー。装備魔法『イービル・ソウル』発動！手札の悪魔族モンスターを墓地に送る事で、墓地の悪魔族モンスターを特殊召喚する！」

遊星

「何！？」

霸王

「手札の『ヘルゲイナー』を墓地に送り、再び『マリシャス・エッジ』を特殊召喚！！」

霸王の場に再びマリシャス・エッジが現れる。

霸王

「この効果で召喚されたモンスターの攻撃力は墓地に送った悪魔族モンスターのレベル×100ポイントアップする。『ヘルゲイナー』のレベルは4。よって『マリシャス・エッジ』の攻撃力は400ポイントアップする」

E・HERO マリシャスエッジ ATK2600+400=3000

遊星

「くっ！」

霸王

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

遊星

「ドロー！『ハイパー・シンクロン』召喚！！」

ハイパー・シンクロン ATK1600

遊星

「さらに、俺の場にチューナーモンスターが現れた事により、墓地の『ボルト・ヘッジホッグ』を特殊召喚！」

ボルト・ヘッジホッグ ATK800

遊星

「行くぞ！レベル2の『ボルト・ヘッジホッグ』と『マツシブ・ウオリアー』にレベル4の『ハイパー・シンクロン』をチューニング！！光指す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ！『スターダスト・ドラゴン』！！」

スターダスト・ドラゴン ATK2500

遊星

「さらに、『ハイパー・シンクロン』をシンクロ素材とした事で攻撃力が800ポイントアップ！！」

スターダスト・ドラゴン ATK2500+800=3300

遊星

「『スターダスト・ドラゴン』で『マリシャス・エッジ』を攻撃！
！響け！『シューティング・ソニック』！！」

スターダスト・ドラゴンが口から発した銀色の音波がマリシャス・エッジを直撃する。

霸王

「ぐっ！？装備魔法『イービル・ソウル』を墓地に送る事で、装備モンスターを破壊から守る……」

E・HERO マリシャス・エッジ ATK3000-4000 2600

霸王 LP2400-3000 2100

遊星

「ターンエンド！」

霸王

「俺のターン！墓地の『イービル・ソウル』は墓地に送られた次のターンに墓地から除外する事で、カードを1枚ドローする。ただし、このターン、バトルフェイズを行う事は出来ない」

霸王がカードをドローする。

霸王

「魔法カード『ダーク・コーリング』発動！手札の『バーストレディ』と『クレイマン』を融合！現れる！『E・HERO ヘル・スナイパー』」

E・HERO ヘルスナイパー DEF2500

霸王

「ターンエンド」

遊星

「ドロー！『スターダスト・ドラゴン』で、『ヘルスナイパー』を攻撃！『シューティングソニック』！！」

スターダスト・ドラゴンがヘル・スナイパーを破壊する。

遊星

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

霸王

「ドロー！魔法カード『地砕き』発動！相手の場の守備力が一番高いモンスターを破壊する！！」

遊星

「『スターダスト』の効果を発動！『スターダスト』自身をリリースする事で『フィールド上のカードを破壊する効果』を無効にし、破壊する」

スターダスト・ドラゴンが自身の体を銀色に発光させ、『地砕き』の効果が無効にする。

しかし、それと同時にスターダスト・ドラゴンが鎖で全身を縛られたはやてを包み込み消える。

霸王

「何！？」

遊星

「これは一体……」

霸王

「どういう事だ！？不動遊星！貴様……一体あの小娘に何をした！？」

霸王が吠える。

遊星

「お前のその様子から見ると、はやてはお前にとって重要な存在のようだな……」

霸王

「チツ……」

霸王が舌打ちをする。

遊星

「さあ、聞かせてもらおうぞ。はやてを使って何をしようとしていたのか、そして、自らを『霸王』と偽っているお前の本当の目的を！」

霸王

「いいだろう。お前に話してやろう。俺の全て、そして闇の書の悲劇をな……」

遊星と霸王のデュエルが続く中、スターダスト・ドラゴンと共に移動したはやては目を覚ましかけていた。

はやて

「ん……眠い……」

今はやてがいるのは先程いた暗闇と一緒にだが、はやてを縛っている鎖は無かった。

はやて

「ん……」

はやてが目を開けると、目の前に黒い服を着た銀色の髪の少女が立っていた。

少女

「そのままお休みを……我が主。あなたの望みは全て私が叶えます。目を閉じて、心静かに夢を見てください」

はやて

「……」

そのままはやての意識は深い眠りへ落ちていった。

霸王

「遙か昔、ベルカには『霸王』と呼ばれる者がいた」

遊星

「霸王？」

霸王

「霸王には、聖王と呼ばれた好敵手がいた。共に戦い、笑い、仲の良い関係を築いていった」

霸王は語り続ける。

霸王

「だが、その聖王も『ある戦い』で命を落とした」

遊星

「何？」

霸王

「聖王は『ゆりかご』へと向かう決意をして、霸王の前から消えた。霸王はそれを止めようとしたが、叶わずに終わった」

遊星

「……」

霸王

「霸王は自分の無力さに絶望し、力を求めた。自分がもっと強ければ、聖王を死なせずに済んだかもしれない。霸王はがむしゃらに力を求め続けた。そして力を身に付けていくと同時に、その心は闇に染まっていった。やがて霸王も命を落とした。そして、その闇は霸王の身体から解放され、世界を彷徨い続けた」

遊星

「だが、その話と、『闇の書』とはやてが何の関係がある!？」

霸王

「彷徨った霸王の闇は当時稼働していた『闇の書』へと入り込んだ」

遊星

「何!？」

霸王

「『闇の書』へと入った霸王の闇は日々蒐集される魔力を少しずつ食いながら『闇の書』の中で徐々に大きくなっていた……」

霸王が続ける。

霸王

「様々な『闇の書』の主は魔力を蒐集し続け、その主が滅ぶ度にその主の闇をも食った霸王の闇はいつしか意志を持つ様になった。しかし、ある時から蒐集が一切行われなくなった……『闇の書』が八神はやてを主を選んだからだ」

遊星

「っ!？」

霸王

「だが、哀れにも主の病を治そうと再び魔力の蒐集が行われた。そして、不動遊星、お前の力の一部を取り込み、力を吸収し続ける事で俺の存在は完全な物となった。お前の記憶から決闘者を造り出し戦わせたのも、お前の力を取り込みより強くなるため。お前は知ら

「ず知らずのうちに、俺の存在を大きくしていったのさ」

遊星

「そんな事が……」

霸王

「信じないというのならそれでもいいが、現にお前と一緒にいた魔導師や『闇の書』の騎士達は俺によって傷付いている。お前の力を取り込んだ俺によって。今、外で戦っている『闇の書』の化身もお前の力を使つて魔導師を蹴散らしているか、あるいはもう殺してしまつたか……」

遊星

「……俺がみんなを……！？（確かに、『闇の書』は俺の力を取り込んで力を吸収していた……だとしたら、本当に俺がみんなを……！？）」

霸王

「気付いたようだ。自分の犯した罪に……話は終わりだ。デュエルを続けるぞ。『地砕き』を無効にするために消えた『スターダスト』は現在お前の場にはいない。『E・HERO ヘルゲイナー』を攻撃表示で召喚！」

E・HERO ヘルゲイナー ATK1600

霸王

「『ヘルゲイナー』でダイレクトアタック……！」

ヘルゲイナーが遊星を両腕の爪で攻撃する。

遊星

「ぐああっ!!」

遊星 LP 1800ー1600〓200

霸王

「ターンエンド」

遊星

「このターンのエンドフェイズに『スターダスト・ドラゴン』は場に戻る!」

遊星の場にスターダスト・ドラゴンが舞い戻る。

スターダスト・ドラゴン ATK 2500

霸王

「八神はやてが戻って来ない!?!」

遊星

「(スターダスト……お前ははやてをどこに?)俺のターン!ドロ!バトル!『スターダスト・ドラゴン』で『ヘルゲイナー』を攻撃!『シューティングソニック』!」

スターダスト・ドラゴンがヘルゲイナーを攻撃して破壊する。

霸王

「ぐううう!!」

霸王 LP 2100ー900〓1200

霸王

「さっきの話の所為か、動揺しているのがわかる……」

遊星

「（本当に……俺が、みんなを……！？なのはやフェイト、はやてや守護騎士のみんなを……！？）……カードを1枚伏せ、ターンエンド」

霸王

「貴様に勝つ手段は無い。『闇の書』に食われ、消えるがいい！魔法カード『ダーク・コーリング』発動！墓地の『マリシヤス・エッジ』と『ライトニング・ゴーレム』を融合！出でよ！最凶のヒーロー！『E・HERO マリシヤス・デビル』！！」

霸王の場にマリシヤス・エッジよりも凶悪な姿となったヒーローが現れる。

E・HERO マリシヤス・デビル ATK3500

霸王

「『マリシヤス・デビル』で『スターダスト・ドラゴン』を攻撃！砕け！『マリシヤス・エッジ・ストリーム！！』」

遊星

「くっ！？トラップ発動！『ミラージユ・ホール』！！」

はやて

「（私は、何を……望んでたんやっけ……？）」

まどろみの中で、はやてはそう思っていた。

少女

「夢を見る事。悲しい現実は全て夢となる。安らかな眠りを……」

はやてに語りかける様に少女の声が響く。

はやてに言い聞かせる様に……

はやて

「（……そうなんか？）」

はやてはその言葉に少しだけ疑問を覚えたのだった。

フェイトはアリシアと共にお花畑へと来ていた。

フェイトは丘の上の樹に身体を預け、アリシアはお花畑にうつ伏せに寝そべっていた。

そんな時、空が黒雲に包まれた。

アリシア

「あれ？」

それに気付いたアリシアが顔を上げる。

アリシア

「雨になりそうだね。フェイト、帰ろう？……フェイトってば！」

呼びかけに答えないフェイトにアリシアが大きな声で呼ぶ。

フェイト

「ごめん、アリシア。私はもう少し、ここにいる……」

フェイトは静かに言う。

アリシア

「そうなの？じゃあ、私も！」

アリシアがフェイトの隣に座る。

アリシア

「一緒に、雨・宿・り！！」

雨は絶え間なく降り続けていた。

二人とも何も話さなかった。

ただ時間だけが過ぎていった。

フェイト

「ねえ、アリシア。これは……夢、なんだよね？」

アリシアは答えなかった。

フェイト

「私とあなたは同じ世界にはいない。あなたが生きていたら、私は生まれてこなかったんだよね？」

アリシア

「……そう……だね」

アリシアが小さく答えた。

フェイト

「母さんも、私にはあんなに優しくは……」

アリシア

「……優しい人だったんだよ。優しくしたから壊れたんだ。死んじやった私を生き返らせるために……」

フェイト

「……うん」

フェイトが頷く。

アリシア

「ねえ、フェイト。夢でもいいじゃない。私、ここでなら、生きていられる。フェイトのお姉さんでいられる。母さんと、アルフとリニスと、遊星と。みんなと一緒にいられるんだよ？フェイトが欲しかった幸せ、みんなあげるよ？」

と、アリシアはフェイトに語りかけた。

はやて

「私が、欲しかった幸せ？」

少女

「健康な身体。愛する者達とずっと続いていく幸せ。眠ってください。そうすれば、夢の中であなたはそんな世界にいられます」

その言葉を聞いたはやては首を横に振った。

はやて

「せやけど、それはただの夢や!!」

その瞳には強い光があった。

霸王

「『ミラージュ・ホール』だと？」

遊星

「そうだ。『ミラージュ・ホール』は自分の場のドラゴン族シンクロモンスターが攻撃された時、自分のライフを半分払い、その攻撃

を無効にする」

遊星 LP 200 ÷ 2 = 100

マリシヤス・デビルの攻撃はスターダスト・ドラゴンの前に現れた虹色の光の穴へと消えた。

霸王

「だが、所詮は一時凌ぎの罨カード。悪あがきもいい加減にしろ」

遊星

「『ミラージュ・ホール』にはもうひとつ効果がある。攻撃無効効果が成功した時、デッキの一番上をめくり、それがモンスターカードだった時、そのカードを特殊召喚できる。違った場合はこのカードで無効にしたモンスターの攻撃力分のダメージを受ける」

霸王

「フン……まさに、イチかバチの賭けで俺の攻撃を異次元へと飛ばすという事が……最後まで楽しませてくれる……」

遊星

「（このドローに全てを賭ける！）ドロー……！」

遊星がカードをドローする……！！

遊星

「引いたカードは……モンスターカード『チェンジ・ウォリアー』……！！よってこのカードを攻撃表示で特殊召喚……！！」

チェンジ・ウォリアー ATK 300

霸王

「何を引いたかと思えば、そんな雑魚を呼んでどうなる？悪あがきもいい所だ。俺はこれでターンエンド」

遊星

「（俺は……勝てるのか？そして、俺はこの手で、みんなを……）」

遊星がドローカードに手を掛けた時、そのカードが光り出す。

遊星

「これは……!？」

それと同時に遊星の背中にシグナー全員の痣が集めるのがわかった。

遊星

「『救世竜 セイヴァー・ドラゴン』……。みんな……」

遊星はそつと目を閉じた。

そんな遊星に仲間の声が響く。

ジャック

『遊星、何を恐れている！お前はこんな所で立ち止まる様な男だったか？』

遊星

「ジャック……」

クロウ

『そうだぜ！お前の力は、お前が使ってこそその力だ！あんな奴の言う事なんて気にするな！』

遊星

「クロウ……」

アキ

『そうよ遊星。あなたはその力で私やみんなを助けてくれたじゃない。だからあの子達も助けてあげて』

遊星

「アキ……」

龍亞

『俺は遊星を信じてるよ！遊星ならきっと勝てるって！』

龍可

『だから、私達の力を受け取って！』

遊星

「龍亞、龍可……。みんな、ありがとう！』」

遊星は決意を固めた。

遊星

「霸王。お前は俺の力を使い、多くの人を傷付けた。絶対に許さない！』」

霸王

「貴様、自分の罪から目を背けるつもりか……」

遊星

「ふざけるな！勝手に他人の力を使い、人を傷付ける。俺の力はそんな事のためにあるんじゃない！！」

霸王

「何！？ならば見せてみる。お前の正しい力とやらを……」

遊星

「行くぞ！『チェンジ・ウォリアー』はこのカードをリリースする事で、墓地のレベル1モンスターと入れ替える事が出来る。ただし、この効果で召喚したモンスターの攻撃力、守備力は0となる。俺は墓地の『チューニング・サポーター』と入れ替える！！来い！！『チューニング・サポーター』！」

遊星の場にチューニング・サポーターが現れる。

チューニング・サポーター	ATK1000	DEF3000
--------------	---------	---------

遊星

「そして！これが俺達の絆だ！『救世竜 セイヴァー・ドラゴン』を攻撃表示で召喚！！」

遊星の場にセイヴァー・ドラゴンが現れる。

救世竜 セイヴァー・ドラゴン	ATK0
----------------	------

霸王

「こいつは！？」

遊星

「行くぞ！レベル8の『スターダスト・ドラゴン』とレベル1の『チューニング・サポーター』にレベル1の『救世竜 セイヴァー・ドラゴン』をチューニング！！」

セイヴァー・ドラゴンが巨大化し、スターダスト・ドラゴンとチューニング・サポーターを包み込み消える。

遊星

「集いし星の輝きが、新たな奇跡を照らし出す。光指す道なれ！シンクロ召喚！光来せよ、セイヴァー・スター・ドラゴン！！」

遊星の場にセイヴァー・スター・ドラゴンが現れる。

霸王

「これは……赤き龍の化身……！？」

遊星

「行くぞ霸王！！これが俺の最後の攻撃だ！！」

第二十一話 それぞれの戦い！（後書き）

次回予告

遊星

「遂にセイヴァー・スター・ドラゴンを召喚した！このカードの力で闇の書の呪縛からみんなを解放してみせる！」

次回遊戯王5D's Magical A's 『終着への道』
ライディングデュエルアクセレーション！！」

第二十二話 終着への道（前書き）

チートカードの大盤振る舞い！

後悔はしていない……

第二十二話 終着への道

遊星 LP100 霸王 LP1200

遊星

「『チューニング・サポーター』がシンクロ素材として墓地に送られた事により、デッキからカードを1枚ドローする!!」

遊星がカードをドローする。

遊星

「バトル! 『セイヴァー・スター・ドラゴン』で『マリシヤス・デビル』を攻撃!!」

セイヴァー・スター・ドラゴンがマリシヤス・デビルへ突進する。

遊星

「『シューティング・ブラスター・ソニック』!!」

セイヴァー・スター・ドラゴンがマリシヤス・デビルの腹を貫通し、マリシヤス・デビルは爆散する。

霸王 LP1200 - 300 = 900

遊星

「俺はカードを1枚伏せる。そして、このターンのエンドフェイズに『セイヴァー・スター・ドラゴン』はエクストラデッキに戻り、墓地より『スターダスト・ドラゴン』を特殊召喚する。」

霸王

「フン……。苦勞して召喚した赤き竜の化身も『マリシャス・デビル』を破壊するだけに終わったか……。戻って来た『スターダスト・ドラゴン』も貴様の死での旅を共にする者として相應しいだろう。俺がすぐに消してやる。ドロー！！魔法カード『イービル・バック・サモン』！自分のライフを100にする様に払い、発動！自分の墓地の『E・HERO』と名の付いた融合モンスターを召喚条件を無視して特殊召喚する！」

霸王 LP900-800=100

霸王

「最凶のヒーローとして、闇の中より蘇れ！『マリシャス・デビル』！！」

霸王の場にマリシャスデビルが蘇生するが、先程とは違い、漆黒のオーラを身体に纏っていた。

E・HERO マリシャス・デビル ATK3500

遊星

「何だ？アレは……」

霸王

「『イービル・バック・サモン』の効果で召喚したモンスターの元々の攻撃力は倍となる」

遊星

「何だと！？」

E・HERO マリシャス・デビル ATK3500×2＝7000

遊星

「攻撃力7000だと!？」

霸王

「不動遊星!貴様の最後だ!行け!『マリシャス・デビル』!『マリシャス・エッジ・ストリーム』!！」

マリシャス・デビルが両腕から漆黒のオーラを纏った無数の巨大な針をスターダスト・ドラゴンに向けて発射する。

遊星

「(霸王。やはりこいつは強い。人々の心の闇を取り込み、俺の力も取り込み、そして古代ベルカの王の闇をも取り込み歪んだ存在。だが……)例えどんなに力が強くても、力だけでは全てを制する事は出来ない!」

霸王

「何だと?力こそ絶対だ!万物を支配する力こそが絶対無敵の力だ!」

遊星

「違う!そんな力で全てを支配しても、人と人が温かく笑う世界はやっては来ない!」

霸王

「フン……。貴様の詠う絵空事などもはや何の意味も無い!貴様の言う事が正しいと言うのなら、貴様の言う絆とやらが本当に正しいと言うのなら、俺の力を破って見せろ!！」

遊星

「くっ!?!」

マリシヤステビルへの攻撃はスターダストドラゴンへと直撃し、ワールド全体が巨大な爆風に包まれる。

はやて

「私、こんな望んでない!あなたも同じはずや!違うか?」

少女

「私の感情は騎士達と深くリンクしています。だから私も騎士達と同じ様に、あなたをいとおしく思います。だからこそ、あなたを殺してしまう自分自身が許せない」

はやて

「!?!」

少女

「自分ではどうにもならない力の暴走。あなたを侵蝕することも、あなたを喰らい尽くす事も、止められない」

はやて

「……覚醒の時、今までの事少しはわかったんよ。望む様に生きられない悲しさ。あたしにだって少しはわかる。シグナム達と同じや。ずっと悲しい思い、寂しい思いして来た……」

少女

「……………」

はやて

「せやけど、忘れたらあかん！」

はやては車椅子から腰を浮かし、右手を少女の頬に添える。

はやて

「あなたのマスターは今は私や。マスターの言う事はちゃんと聞かなきゃあかん」

はやて達の足下に白銀の魔法陣が展開される。

遊星

「ここは……………」

遊星が目を開けると、そこは霸王と戦ったフィールドでは無い別の場所だった。

遊星

「俺は……………奴に……………霸王に負けたのか？」

デュエルディスクでライフポイントを確認しようとしたが左腕のデュエルディスクは消えていた。

遊星

「ここは一体どこだ？さっきいた場所とあまり変わらないが……」

周りを見渡しても辺り一面漆黒の空間が続いているだけだった。

ただ一つ、先程の景色には無い物があつた。

車椅子に座つたはやてと、銀髪の少女である。

遊星

「……はやて？」

遊星は二人の元へと歩いていった。

少女

「あ……」

遊星に気付いた少女が遊星に顔を向ける。

はやて

「遊星さん。やっぱり、来てくれたんやな……」

遊星

「何？」

はやて

「ここで目を覚ました時、何となくだけど、遊星さんを感じたんよ」

遊星

「そうか……」

返事をした遊星は、はやてと一緒にいる銀髪の少女の事も聞こうと思いい、口を開きかけたが、空気を読み口を閉じた。

はやては少女の方へと向き直る。

はやて

「名前をあげる。もう闇の書とか、呪いの魔導書なんて言わせへん。あたしが呼ばせへん」

少女の目から涙が溢れる。

はやて

「あたしは管理者や。あたしにはそれが出来る」

少女

「無理です……。自動防御プログラムが止まりません。管理局の魔導師が戦っています……。それも……」

少女が涙声で訴える。

はやて

「止まって！」

はやてがそう呟くと、足下の魔法陣が発光し、天空からスターダスト・ドラゴンが現れる。

遊星

「スターダスト！？何故お前が……」

現実世界でも闇の書の意志に異変が起こり始めていた。

ギギギと音を出しながら背中を仰け反らせていたのだ。

なのはがデバイスの全壊覚悟のエクセリオンモードで渾身の一撃を何度叩き込んでもそんな仕種は取らなかったのだ。

はやて

『外の方！管理局の方！私……そこにいる子の保護者、八神はやてです！』

なのは

「はやてちゃん！？」

声の主がはやてだと知り、なのはは目を丸くする。

はやて

『なのはちゃん！？』

なのは

「うん。なのはだよ。色々合って闇の書さんと戦ってるの」

闇の書の意志が宙に浮いている『闇の書』のページを開こうと、両手をゆっくりと動かそうとする。

はやて

『ごめん。なのはちゃん。その子を停めたってくれるか？魔導書本体からはコントロールを切り離れたんやけど、その子が暴れると管理者権限が使えへん。今そちらに出てるのは自動行動の防御プログラムだけやから』

はやてが状況を大まかになのはに伝える。

なのはは目をパチパチとしばたかせながらも状況を理解しようとする。

ユーノとアルフも海鳴の海上に移動しており、先程のはやての言葉を傍受していた。

ユーノ

「（『闇の書』完成後に管理者が治めている……。これなら！）」

ユーノはなのは達がいる戦場へと向かいながらも、念話の回線をなのはに向けて開く。

ユーノ

「（なのは。わかりやすく伝えるよ。今から言う事をなのはが出来れば、はやてちゃんもフェイトも外に出れる！）」

ユーノとアルフは飛行速度を上げながらも、なのはに伝えるべきを伝えようとする。

ユーノ

「どんな方法でもいい！目の前の子を魔力ダメージでぶっ飛ばして！全力全開！手加減なしで！！」

ユーノは左手で強く拳を握ると同時になのはに伝えた。

なのははユーノとの念話で思わずハツとすると同時に、自分のやるべき事が見えた。

なのは

「さっすがユーノ君！わっかかりやすい！！」

なのははレイジングハート・エクセリオンを闇の書の意志に向ける。

レイジングハート

『全くです』

レイジングハート・エクセリオンもユーノのシンプルな説明に賞賛を送る。

なのはの足元に桜色の魔法陣が展開されると同時に海から気色の悪い触手が闇の書の意志のそばから出現した。

闇の書の意思の動きは先程よりもぎこちなく動いている。

なのは

「エクセリオンバスター！バレル展開。中距離砲撃モード！！」

レイジングハート

『オーライ。バレルショット』

なのはの命令にレイジングハート・エクセリオンは桜色の翼を六枚に広げる。

ヘッド部分の桜色の刃先端から桜色の魔力光が収束され、螺旋状のエフェクトが生じている。

レイジングハート・エクセリオンに収束されたそれは衝撃波となつて発射された。

闇の書の意味に向かって直撃するが、それでも変化が起こる気配はなかった。

はやて

「夜天の主の名において汝に新たな名をあげる。強く支える者。幸福の追い風、祝福のエール……」

はやては少女に優しい眼差しを向ける。

はやて

「リインフォース」

暗闇に満ちた空間は、はやての優しさの光に包まれた。

遊星

「はやて……」

はやて

「遊星さんも、巻き込んだじゃって本当にごめんなさい」

遊星

「気にするな。だが、俺にもまだやらなければいけない事がある。」

リインフォース

「……お前が戦っている霸王と名乗る者の事だな？」

遊星

「知っているのか？」

リインフォース

「ああ。あれは古代ベルカの霸王の闇が『闇の書』の闇と融合し歪んだものだ……」

遊星

「ああ。後一步まで追い詰めたが……。奴の力はまだ増幅し続けている……」

リインフォース

「ならば私の力を、お前に託そう」

リインフォースが白く光る3枚のカードを遊星に渡す。

遊星

「これは……？」

リインフォース

「私の力の一部だ。お前ならこの力をうまく使ってくれると信じている。アレを倒せれば、今回の事も解決へ向かうだろう」

遊星

「……わかった」

遊星が頷くと、遊星とはやて達の距離が開き始めた。

それに呼応するかの様にスターダスト・ドラゴンも暗闇の中へと消えた。

遊星

「はやて、お前ならここから必ず脱出できる。仲間を信じ、絆を信じれば、それがお前の力になる！」

はやて

「うん！ありがとう！遊星さんも絶対に戻って来てや！！全部終わったらみんなでご飯食べような！」

遊星

「ああ！」

はやて達が遊星の前から消える。

そして、遊星もまた、霸王の元へと舞い戻った。

霸王

「貴様……一体何をした！？何故、俺の『マリシャス・デビル』の攻撃を受けた『スターダスト・ドラゴン』が存在し、貴様も無事に生きている！！」

遊星

「はやてとリインフォースが俺に託した思い、無駄にはしない！ト
ラップ発動！『祝福の風』！」

霸王

「何だそのカードは！？そんなカードは今までの貴様のデッキには
無かったカード！」

遊星

「これがリインフォースが俺に託した力だ！罨カード『祝福の風』
は自分がこのデュエル中に『セイヴァー・スター・ドラゴン』をシ
ンクロ召喚している場合、墓地の『救世竜セイヴァー・ドラゴン』
を墓地から除外する事で発動できる！相手モンスターの攻撃を無効
にする！」

霸王

「チッ！だが、そんなカードを使った所で俺の有利に変わりはない
！」

遊星

「『祝福の風』にはもう一つの効果がある！攻撃無効後、手札、デ
ッキ、墓地からチューナーモンスター『祝福の使者ラグナロク』を
攻撃表示で特殊召喚する！」

遊星の場に黒衣に身を包んだ銀髪の少女が現れる。その姿は先程遊
星に希望の力を託したリインフォースを思わせた。

祝福の使者ラグナロク レベル2 ATK0 DEF0

霸王

「馬鹿か貴様。そんな雑魚が一匹増えたところで何も変わらないと

いう事がわからないのか？」

遊星

「……」

霸王

「俺の使った魔法カード『イービル・バック・サモン』はデッキのカードを上から5枚、墓地の悪魔族、戦士族モンスターを5種類除外する事でもう一度攻撃できる！」

霸王がデッキから除外したカード：『E・HERO ヘル・ゲイナ
ー』、『ダーク・フュージョン』、『O・オーバーソウル』、『イ
ービル・ブラスト』、『超融合』の5枚。

墓地から除外したカード：『E・HERO フェザーマン』、『E・
HERO バーストレディ』、『E・HERO ワイルドマン』
『E・HERO マリシャス・エッジ』、『E・HERO ワイル
ド・サイクロン』の5枚。

遊星

「何！？」

霸王

「行け！『マリシャス・デビル』！！『ツイン・マリシャス・エッ
ジ・ストリーム』！！」

マリシャス・デビルが両腕から漆黒のオーラを纏った無数の巨大な
針をスターダスト・ドラゴンに向けて発射する。

遊星

「『祝福の使者ラグナロク』、効果発動！自分の場のモンスターが攻撃を受けた時、ライフを半分払う事で一度だけ攻撃を無効にする！」

マリシヤス・デビルの攻撃はラグナロクの展開したバリアによって消えた。

遊星 LP 100 ÷ 2 = 50

霸王

「くっ！連続攻撃の効果を使用した次のターン、俺はドローフェイズとバトルフェイズを行う事が出来ない。ターンエンド」

遊星

「これが、このデュエルのファイナルターンだ！！」

遊星がカードをドローする。

遊星

「行くぞ！レベル8『スターダスト・ドラゴン』にレベル2の『祝福の使者ラグナロク』をチューニング！！」

ラグナロクが白銀の輪となり、スターダスト・ドラゴンを包み込む。

遊星

「集いし祝福の風が全てを包む翼となる！光指す道となれ！シンク口召喚！降臨せよ！『ラグナロク・スター・ドラゴン』！！」

遊星の場に漆黒の翼を生やし、右手には金色の装飾が光る錫杖を持った白銀のドラゴンが現れる。

ラグナロク・スター・ドラゴン レベル10 ATK3500 DEF3000 D

霸王

「新たなシンクロモンスターか……だが、攻撃力は『マリシヤス・デビル』の方が遥かに上だ!!」

遊星

「『ラグナロク・スター・ドラゴン』効果発動!!シンクロ召喚に成功した時、自分の墓地から魔法、罠カードを合計5枚まで除外し、1枚につき攻撃力を500ポイントアップする!『ラグナロク・チャージ』!!」

遊星は墓地より『ワン・フォー・ワン』『くず鉄のかかし』『調和の宝札』『ミラージュ・ホール』『祝福の風』の5枚を除外する。

遊星

「これにより、『ラグナロク・スター・ドラゴン』の攻撃力は2500ポイントアップする!!」

ラグナロク・スター・ドラゴン ATK3500+2500=6000

霸王

「だとしても、『マリシヤス・デビル』の攻撃力は7000!貴様のそのモンスターの攻撃力は6000!後1000ポイント程足りなかったようだな!」

遊星

「『ラグナロク・スター・ドラゴン』で『マリシャス・デビル』を攻撃!!」

霸王

「何? 血迷ったか、不動遊星! 自ら自滅の道を選ぶとはな!」

遊星

「この時、『ラグナロク・スター・ドラゴン』の効果発動! 『ラグナロク・スター・ドラゴン』が自身の攻撃力より攻撃力の高いモンスターに攻撃する時、自分のライフを半分払う事でデッキから魔法カードを1枚選び、その場で発動できる!!」

霸王

「デッキから魔法の発動だ?!?」

遊星 LP 50 ÷ 2 = 25

遊星

「俺はデッキより魔法カード『スターダスト・オーバー・ドライブ』を発動!!」

霸王

「なっ!!? そのカードは……!!?」

遊星

「このターン、エクストラデッキから『スターダスト・ドラゴン』をシンクロ素材とするシンクロモンスターをゲームから除外する事で、『スターダスト・ドラゴン』の攻撃力は、そのシンクロモンスターの攻撃力分アップする!!」

霸王

「闇の書の決闘者とのデュエルで使ったカードか……」

遊星

「エクストラデッキから『セイヴァー・スター・ドラゴン』をゲームから除外し、『ラグナロク・スター・ドラゴン』に『セイヴァー・スター・ドラゴン』の攻撃力3800を加算する……!」

ラグナロク・スター・ドラゴン ATK 6000 + 3800 = 9800

霸王

「攻撃力9800だと!?!」

遊星

「『ラグナロク・スター・ドラゴン』の攻撃!『スターダスト・ミストルティン』……!」

ラグナロク・スター・ドラゴンの翼から魔法陣が出現し、そこから白い光の槍がマリシヤス・デビルを貫く。

しかし、マリシヤスデビルは槍に貫かれても破壊されなかった。

霸王

「何だ?これは……!」

霸王がマリシヤス・デビルを見ると、マリシヤス・デビルの身体が足下から石化を始めた。

霸王

「『マリシャス・デビル』が石化するだ！？」

遊星

「今だ！『ラグナロク・スター・ドラゴン』！！」

ラグナロク・スター・ドラゴン口から白銀のビームをマリシャス・デビルに向けて発射する。

石化したマリシャス・デビルは避ける事が出来ず、ビームの直撃を受け爆散する。

霸王

「ぬおおおおっ！！」

霸王

LP100 - 2800 = 0

遊星

「……勝った」

霸王の敗北を確認した遊星は凄まじい脱力感に襲われ、膝を付く。

霸王

「馬鹿な……俺の……俺の……霸王の……悲願が……」

遊星

「お前の望みは絶たれた……もう諦める……」

霸王

「くっ……いずれ霸王の悲願を成就する者が……」

霸王はそう言い残し、黒い霧となって霧散した。

遊星

「悲願を成就する者だと……？……それより、早くここから脱出しなければ……」

遊星が立ち上がろうとするが、力が入らず立ち上がる事が出来なかった。

遊星

「力が……入らない……。俺は……ここまで……なのか……みんな………すまない………」

遊星の意識はそこで途切れた。

第二十二話 終着への道（後書き）

ラグナロク・スター・ドラゴン 星10 ATK3500 DEF3000

ドラゴン族/シンクロ・効果

「スターダスト・ドラゴン」+「祝福の使者ラグナロク」

このカードが場に表側表示で存在する時、カード名を「スターダスト・ドラゴン」として扱う。このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地から魔法、罫カードを合計5枚まで除外する事が出来る。このカードの攻撃力はこの効果で除外したカード1枚につき500ポイントアップする。このカードがこのカードの攻撃力より攻撃力の高いモンスターに攻撃する場合、自分のライフを半分払う事でデッキから魔法カードを1枚選択して発動できる。この効果を使用したターンのエンドフェイズ時、自分の手札、場、墓地のカードを全てデッキに戻してシャッフルする。

今回の次回予告はお休みです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5589p/>

遊戯王5D's Magical A's

2011年11月17日17時14分発行